それを望むなら

大羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それを望むなら

【Ｎコード】
Ｎ２９９４Ｅ

【作者名】
大羽

【あらすじ】
高校一年生の冬、杉村愁也はクレインと名乗る黒ずくめの男に出会った。クレインは愁也にある選択を持ちかける。それを始まりに、愁也の日常に少しずつ非日常が混じっていく。～～～～只今修正作業中です～～～～

プロローグ

午前一時十八分、二月。ある病院の一室に男が立っていた。
すらりと背が高く、身に着けた丈の長いコートが良く似合っている。こんな時間に病院にいるのは医者か看護師くらいだが、そのどちらでもないようだ。
男は室内でも革の手袋を嵌めていて、体には細かい雪が付いていた。全身に付いた雪はまだ解けずに残っており、まるでたった今この部屋に入ってきたかのようだ。そして、何よりも奇妙なのはこの男、頭に被った幅広の帽子から手袋、ブーツにいたるまで、着ているもの全てが黒い。ただ一点、肌が出ている顔のみを除いて。
男の視線はベッドで眠っている女性に向いている。酸素マスクをつけた、無表情な寝顔。
男が口を開いた。
「これが今回の……。これは少しばかり面倒かもな」
と、廊下から足音が聞こえてきた。誰かがナースコールを押したのか、それとも定時の見回りだろうか。それはだんだん近づき、男のいる部屋を通り過ぎた。足音が次第に小さくなっていく。
男はすでに、部屋から消えていた。

揺れる天秤：1（前書き）

この小説は主人公視点の一人称が基本ですが、一部に三人称が混じる場合があります。予めご了承ください。

揺れる天秤：1

第一話　揺れる天秤

例えば、だ。

自分にはどうしようもない問題に直面したとして、そんな時、人は一体何をするべきなのだろうか。なんとかして自分に出来ることを探すとか、なんとかしてくれる人を探すとか、色々と思いつくだろうが、本当に自分に出来ることが何も無いと悟った時、どんな風に毎日を過ごすべきなのだろう？　最近俺はそんな柄にもないことを考える時がある。まだ、答えは出ていないが。

まあ、それは置いておこう。

市内の公立高校の生徒である俺は今、朝の学校の廊下を歩いている。廊下にはまだ教室に入らずに話をしている生徒たちがいて、時折、笑い声も聞こえてくる。

俺はそれを背中に聞きながら教室の扉を開けた。視界にいつも通りの風景が広がる。何人かで机を囲んで雑談をしている者、やり残した宿題に追われている者、机に突っ伏して仮眠をとっている者など様々だが、大体の構図はいつも決まっているものだ。

雑談をしている者の中から、俺の姿を認めた一人がこちらに向かって来た。高めの身長、さっぱり短く切った髪、爽やかスポーツマンといった顔立ちのくせに帰宅部のそいつは近寄って来ながらこう言った。

「よお！　シュウ！　金貸してくれ」

シュウというのは俺のあだ名だ。俺は迷わず答える。

「イヤだ」

「え～！？　まだ何に使うかも言ってねえのに！？」

「聞かんでもロクなことに使わないのは分かるからな」

まさか使い道も聞かずに断られるとは思っていなかったらしく、

大げさに驚いた様子の俺の親友、浅倉信護（あさくらしんご）は、それでも食い下がってきた。
「じゃあ！　俺のＤ・ＳシリーズＤＶＤ全巻制覇計画はどうしてくれるんだよ！」
「知るか。あと朝っぱらから人の名前を大声で呼ぶな。うるせえだろ」
　そんな長ったらしい名前のヘンな計画に俺の金を使うつもりだったのか。ちなみにＤ・Ｓなるものはデッドなんとかっていう外国のドラマの略だ。
「もう諦めたら？　信護」
　信護の肩に手を置き、俺のもう一人の親友である神田速人（かんだはやと）は諭すように言った。
「なんだとぅ！　俺一人じゃ金が無いから、どうせなら三人で金出して楽しく皆で観ようというこの計画の何が悪いってんだ」
「名前聞いただけじゃそこまで分かんないよ」
　速人がやや幼さの残る顔に苦笑いを浮かべながら、的確なツッコミを入れる。ま、気持ちは分からなくもないが、残念なことに
「俺は観る気がしない」
　ので出資はしない。
「僕はそういうの、一人で観たいし。それにもう一・二巻は観ちゃったしね」
　俺に続き速人もやんわりと断った。
「何？　お前、なんでそんとき俺に言わないんだよ」
「どうして信護に言う必要があるのさ」
「それを聞いてたら、アポ無しでお前ん家行ってタダで観てたのに！」
「ハイエナかお前は」
「普通に貸してって言えばいいでしょ」
　まったく朝から元気なやつだ。俺は相手をするのが面倒になってきたので、あくびを噛み殺しながら横を通り過ぎようとした。それ

を見た信護が俺を指差して言う。
「そうだシュウ。お前、今日は何も言わずに帰ったりすんなよ？」
「はいはい。わかりました」
俺のやる気のない返事に、信護はぶつぶつ文句を言いながらも席に着いた。
そろそろＨＲが始まる時間だ。俺も自分の机に向かおうとしたが、ふと、真顔でこちらを見ている速人に気が付いた。心なしか先ほどまでと雰囲気が違う。
「速人？」
そのわずかな変化に、俺は不覚にも戸惑ってしまった。多少の動揺を隠しながら俺は尋ねる。
「なんだ。どうかしたのか？」
少しの間を空けて、速人は口を開いた。
「ねえ、愁也。君って最近……」
速人の言葉はガラッという大きな音に遮られてしまった。
「おーし、お前らさっさと席つけ～」
担任の小林涼子先生が勢い良く扉を開けて教室に入ってきたためだ。生徒たちは話をやめ、のろのろと自分の席へと歩いていく。
「最近……なんだって？」
俺は続きを促したが、
「そこの二人。突っ立ってないで席に戻る！　でないと追い返すよ？」
と言われて速人は自分も席に行ってしまった。本当に追い返されるわけはないが、ＨＲの間廊下で立ってなさいくらいは平気でいうお方だ。今はまずいと思ったのだろう。
俺は先ほどの速人の声が気になって、すぐには動くことが出来なかった。
アイツがあんな真剣な声を出すときは大抵――
「杉村ぁ。そんなに先生の話が聞きたくないのか」
嫌な予感がする。というか、これはもう予感ではなく確信に近い。

小林先生はにこやかな顔のまま立てた親指の先を右へ、もっと正確に言うならば廊下の方へ突き出した。
「いってらっしゃい」
「……はい」
自業自得だ。反論する気にはなれなかった。

放課後、俺は誰もいない教室の窓から外を眺めていた。眺めているといっても特になにかを見ていたわけではない。ただ単純にやることがなかっただけだ。もう一時間も信護が来るのを待っているのだが、速人の姿さえ見当たらないのはなぜだ。確か、俺が廊下に立たされているうちにヘマをやらかして居残りになったのは信護だけだった筈。
「はぁ……」
放っといて帰るかな。いつもなら俺は今頃、別の場所にいるというのに。まあ、あそこに俺がいたところで、何が変わるものでもないけど。
「どうにかならねえかな……」
ため息と一緒に吐き出した言葉に答える者はいない。と思っていたら。
「何が？」
「うおぅ！？」
すぐ後ろで声がしたので慌てて振り向くと、不思議そうにこちらを見る速人がいた。
「お、おぉ速人。遅かったな。今までなにしてたんだ？」
速人はかすかに眉をひそめたが、幸いなことにそれ以上追及してこなかった。その代わりにわざとらしいため息をついて言う。
「いやぁ、信護に『お前も手伝え』って、無理矢理ねー」
「ホントか？　どうせ面白がって見てたんだろ？」
コイツはこれで意外と意地の悪いところがある。

「いやだなぁ、ちょっとからかっただけだよ？　そしたら小林先生が『ヒマならあんたも手伝いなさい』って。ま、結局は信護に丸投げしてきたけど」
「お前、それはちょっと酷いぞ」
　それでいて全く気にしている様子がないのがある意味すごい。強かというかなんというか、絶対に損をしないタイプだ。
「居残りって、何をさせられてたんだ？」
「人体模型の修復」
「はあ！？」
「冗談だよ」
　なんだ。冗談か。さらっと言うから一瞬本気にしてしまったじゃないか。
　俺は手近な椅子を引き寄せ、それに腰を下ろして問いかける。
「なあ速人。お前、朝になにか言いかけてたよな？　あれ、なんて言おうとしたんだ？」
「ああ、あれはね、最近……」
　だがまたしても速人の言葉はガラッという大きな音に遮られてしまった。
「速人！　よぉくも逃げやがったな！　俺一人で喋っててバカみたいじゃねえか、っておお、まだいたのかシュウ」
　信護が勢い良く扉を開け教室に飛び込んできたおかげで、結局速人が何を言おうとしたのか聞きそびれてしまった。そのうえ、自分で言ったくせに俺のことをすっかり忘れていたらしい。
　俺は絶妙な間の悪さで話を中断させられたことと、一時間も待たされたことに腹が立ってきたので、無言で信護の腹にパンチを食らわせた。
「ぐふぅ！？　ちょっ……待たせたからっていきなりボディーブローかまさなくたっていいじゃないですか……」
　言いながらくず折れる信護を見て少し気が晴れた俺は、今さっき開いた扉をくぐる。わりと力を入れたので、すぐには追って来られ

ないだろう。
帰ろうとする俺に向かって速人が意外そうに言った。
「あれ？　一緒に帰るんじゃないの？」
「勝手に帰るなとは言われたけど、俺は一緒に帰るとは言ってないぞ」
そこで視線を倒れている信護に向け、
「じゃあな、俺は帰る」
と言って扉の取っ手に手をかけた。これで約束は果たした筈だ。
「待ちやがれ……この借りは必ず返すからな……」
「なんか、悪役の捨てゼリフみたいになってるよ」
俺は速人が言い終わるのを待たずに扉を閉めた。玄関へと歩き出す。
夕方の少し薄暗い廊下を歩きながら、俺はこれからの予定を考えた。目的地はもう決まっているから、あとはどうやって行くかだ。と言っても選択肢はそう多くはない。
「まあ、バスかな」
案の定、答えはすぐに出た。いつもこうならいいんだがな。

一方、愁也のいなくなった教室では未だに信護が腹を抱えてうずくまっていた。見かねて速人がため息とともに言う。
「いつまでやってんの？　もう愁也行っちゃったよ？」
それを聞いて信護はよろよろと起き上がる。
「そうか。あいつめ、この借りは……」
「それはもういいから。で、どうする？　本当にＤＶＤでも借りにいく？　お金は持ってるみたいだけど」
信護は心底驚いた様子で、イスに座って机に頬杖をつく速人を見た。
「お前、俺が借りるつもりないって気付いてたの？　相変わらず察しがいいなぁ。つか、なんで俺の財布事情をお前が把握してんだ？」

「ちょっと中を覗かせてもらったから」
「ウソつけ。肌身離さず持ってたのに、どうやって覗いたっつんだよ」
「さっきちょっかい出しに行ったでしょ。その時にスッた」
「ス……」
信護の顔が引き攣った。それから速人に詰め寄り、声のトーンをぐっと落として言う。
「マジで？　お前ってばそんな技持ってたん？」
「ごめん、信護のテンションの上がり方があまりに不自然だったから気になってさ。あれって愁也に気を遣ってたの？」
信護は乗り出した身を引き、顔を顰めて腕を組む。
「まあな。あいつ、表面上はいつも通りに見えっけど、どっか抜けてんだよな最近」
「今朝も廊下に立たされてたしね。それに……」
速人の脳裏に、思いつめた顔で窓を眺めている愁也の姿が浮かんだ。
「信護って愁也と付き合い長いよね。今までこういうことって」
「無かった」
信護は速人の言葉尻を捉えて否定した。その否定の速さは信護の言葉に間違いがないことを確信させるに足るものだった。
さらに、記憶を探るようにしながら話を続ける。
「そりゃ、前にもあいつが悩んでんのは見たことあるけどな。あんなぼーっとしてんのは初めてだ。なんか調子狂うんだよなぁ」
「なるほどね。それでこんな時間まで居残りさせられる羽目になったわけか」
合点がいったとばかりに速人は頷いた。
話が途切れた二人の間に、何とも言えない沈黙が落ちる。周りの音しか聞こえない状態がしばらく続いた。
「……はぁ」
その静寂を打ち破ったのは信護のため息だった。

「水くせえよなぁ。言ってくれりゃ相談に乗るのによ」
「頼みごととか好きじゃないっぽいからね、愁也。もうしばらく様子見てみようよ」
「だな。もうちょい待ってみっか。ってことで、帰りますかね」
「そうだね」
二人はカバンを手にし、空気の重たい教室から出た。
「ちょい待ち」
その直後、横手から聞き覚えのある声が二人を呼び止める。そこには腕を組み、壁に背を預ける小林涼子がいた。
「先生」
「いつから居たんスか？」
小林はそれには答えず、壁から背をはがし二人の正面に立った。依然として腕は組んだままだ。おもむろに口を開く。
「浅倉、あんた、プリント並べる順番間違ってんじゃないの」
「うえ、マジっすか？　もしかしてやり直し、とか？」
「当然」
「最悪だ……」
がっくりと肩を落とす信護。速人はその肩をぽんと叩いた。
「と、言いたいとこだけど」
小林は組んだ腕をほどき、頭を掻きながら軽く息をついた。
「しょうがない。今回はあたしがやっとくから、あんた達これからちょっと付き合ってくんない？」
唐突な提案。二人は思わず顔を見合わせた。
「付き合うって」
「どこにっスか？」
小林は二人の間に割り込み、肩を抱きながら言う
「あたしは今いい話を聞いて機嫌がいいからね。ラーメンでも奢ったげるよ」

夕日がビルの谷間に沈む頃、俺は目的地である病院の前にいた。住寄市（隣の市）でも大きな部類に入るその病院の入口の自動ドアをくぐると、病院独特の消毒液の匂いがした。清潔感が漂うエントランスを迷いなく進む。と、知っている顔が前を通った。すいません、と軽く声をかける。

「あら、愁也君。今日は遅かったのね。」

若い看護師は一目で俺だと気付いてくれた。

「ええ、まあ。姉貴の様子はどうですか？」

「まだ意識は戻ってないけれど、容体は安定しているから、そのうち目を覚ますと思うわよ」

「……そうですか。ありがとうございます」

俺はお辞儀を一つして病室へ向かった。階段を上り、奥に二部屋進み、向かって右手が姉貴の病室だ。部屋の前の表札が目に入る。

『二〇二号室　杉村深雪（みゆき）』

部屋の番号と姉貴の名前。

俺は部屋に入ると、ベッドで眠る姉貴のそばへ歩み寄った。酸素マスクをつけた無表情な寝顔。腕からは点滴の白い管が延びている。見ると、ベッド横の小さな棚の上の花瓶に花が生けてあった。

「姉貴」

呼びかけてみたが、反応はなかった。二週間、ずっと姉貴の表情は変わらない。

俺は部屋に一つだけ置かれたイスに座り、視線を床に落とす。俺にはどうしようもない問題、それがこれだ。いくら医者や看護師に大丈夫と言われても、このまま姉貴が目覚めないんじゃないかと、そんな不安がどうしても拭えない。かと言って俺に何が出来るわけでもなく。

頭では分かっていたつもりだった。俺には出来ることと出来ないことがあると。今の俺が姉貴にしてやれることは、せいぜい早く目が覚めるように祈ることくらいだ。だが、いざこうして姉貴を目の前にすると、なんとか出来ないものかとつい考えてしまう。

俺はイスの背もたれに体重を預け、肩の力を抜いた。天井を見上げて目を閉じる。こうしていると楽だ。
「疲れてんのかな……」

肩を叩かれた。びっくりして顔を上げると、入口近くで会ったあの看護師が心配そうに俺を見ていた。周りを見渡すと、窓から指す光はすでに夜の月明かりに変わっていた。いつの間にか俺は寝てしまっていたらしい。俺の様子を見て表情を和らげ、カーテンを閉めて部屋の電気を付けながら、看護師は尚も心配そうに言った。
「大丈夫？　疲れてるんじゃない？」
「あ、いや！……大丈夫です」
ちらりと姉貴を見る。
「俺、もう帰ります」
「そう？　気を付けてね」
「はい」
開いていた扉に手を掛けたままお辞儀をし、扉をゆっくり閉めて病室を後にした。薄暗かった廊下はすでに蛍光灯の明かりが照らしていて、腕時計を見るともう午後八時をまわっている。俺は二時間前に通った道を逆に辿り、病院の外に出た。バス停に目を遣る。
まずいな、もうバスが出そうだ。
そのままバス停へ駆けて行こうとしたところに、どこからか声がかかった。
「そこの君。少し待ってくれないか？」
そう言って夜の黒色から浮き出るように現れたのは、全身黒尽くめのロングコートの男だった。
年は二十代後半〜三十代前半だろう。帽子に革の手袋、コートの裾からは、黒のスーツとこれまた黒いブーツがのぞいている。コートのボタンも一番上までしっかり留めていた。長めの黒髪に整った顔立ちで、美形といっても差し支えない。男が近づいてくるに連れ、

俺のアゴも上がっていく。それほどに男は背が高かった。
「道を教えて欲しいんだが」
低めの良く通る声で男は言った。道を教えてくれと言われても、俺は今からバスに乗って帰るつもりなのだが。
「あ」
その逡巡の間に無情にもバスは走り出した。と同時に俺もう間に合わないことを悟った。
「……」
「……」
二人してたっぷり十秒ほど、去っていくバスの後ろ姿を見送る。遣る瀬無い思いを感じながら、俺は横目で男を見た。男も俺を横目で見ていた。そして体をこちらに向け、気まずそうに尋ねてくる。
「あ〜、ひょっとして、あれに？」
「はい。乗るつもりでした」
「次のバスは？」
「約一時間後になりますね」
「タクシーは……」
「見当たりませんが。一台も」
「……」
仕方が無い。電車で帰ろう。はあ。ここから駅まで、結構あるってのに。

「済まないな。引き止めてしまって。そのうえ道案内まで」
「平気です。親にも遅くなるって連絡しましたから」
ウチは連絡さえすれば、それほどうるさくは言われないので大丈夫だろう。一番恐ろしい姉貴は家にいないし。
俺は結局、男の道案内を引き受けた。というか、男の目的地が駅までの通り道から少ししか離れていなかったので、どうせなら一緒に行きますかということになったのだ。

俺と男は街頭も無い小道を並んで歩いた。光源は月明かりだけで心細いが、それでも十分に道は分かるし大通りを選ぶと遠回りになるのだ。
「しかし、私としては助かるが、もし私が君に対して悪意を持っていたらどうするつもりだね？」
「少なくとも、悪意を持ってる人はそんなこと言いませんよ」
男は笑った。正面を向いて答えたから顔を見ることは出来なかったが、なんとなく雰囲気でわかる。
考えてみるとこの人の言った通りだ。普通、こんな格好をした見知らぬ人について行ったりしないだろう。俺は男の服装をもう一度下から上まで眺めた。もちろん横目で。なんだってこの人は、こんなにも黒で固めているんだ？　葬式の帰りだろうか。
男は俺の視線に気付き、苦笑しながら言った。
「あぁ、この服装かね？　私は冷え性でね。この位着込まないと寒くて仕方が無いんだ。友人はもう少し周りの目を気にしろと言うんだがな」
「はあ、そうなんですか」
危うく納得しかけたが、それなら別に黒じゃなくていいんじゃなかろうか。
「もしかして好きな色は黒ですか？」
「む、良く分かったな」
ここまで主張されたら誰でも分かると思う。逆に気付かない方が難しい位だ。それから目的地に着くまで、しばらく当たり障りの無い話をした。
「あ、ここです。ここの曲がり角を右に」
「おお、そうか。話をしているとあっという間だな。ありがとう少年。助かったよ」
男は微笑みながら、手袋を外して右手を差し出してくる。
「どういたしまして」
俺は差し出された手を握った。

「！？」
恐ろしく冷たい。人の手ってこんなに冷たくなるもんか？
「――と呼んでくれ。少年、君の名前は？」
「え？　あ、愁也。杉村愁也です」
びっくりして男の名を聞き逃してしまった。男は一瞬、怪訝な顔をしたが、気にせずに会話を続けた。
「何かお礼がしたいんだが、生憎と今日は手ぶらでな。明日、先ほど話した場所へ来てくれないか？」
「いや、そんな、お礼をされるほどのことじゃないですよ」
「それでは私の気が済まないんだ」
「……わかりました。学校が終わってからだと、五時半とかになりますけど、その時間でいいですか？」
「ああ、それでいい。そうだ。電車賃は私が払おう。いくらだね？」
男はコートのポケットから財布を取り出しながら言う。財布は予想に反して茶色だった。……いや、別にいいけど。
「そのくらい、自分で出しますよ」
俺は遠慮したが、男は聞かなかった。
「人の親切は受けるものだぞ。いくらかね？」
「三六〇円です。往復で」
男は財布から千円札を出して俺に渡した。
「あれ？　多くないですか？」
「明日の分だ。では少年、また会おう」
ニヤリと笑い、帽子を直しながら去って行く黒ずくめの男。その姿が闇に溶け込むのに、十秒もかからなかった。俺はそれを見届けてから、自分の右手を見つめ、握手したときのあの人の手の冷たさを思い出す。あれはまるで……。
「まさかな」
頭に浮かんだ考えを振り払い、俺はまた歩き出した。
しかしあの人、今はもう使われてない教会に一体なんの用があるというのだろう？

揺れる天秤：2

次の日の朝。俺は教室の扉を前にして硬直していた。右手を取っ手にかけたままの体勢で、眉間にしわを寄せている。

それは何故か？

原因は近付いてくる足音にある。朝の廊下を全速力で走ってくる奴なんて俺の記憶の中じゃアイツしかいない。

「シューーーーウ！！」

俺は取っ手にかけた手を引き寄せ、握り締めた。

「だからッ…！」

一旦言葉を切り、信護の到着を待つ。そして

「朝っぱらから人の名前を叫ぶなって言ってんだろーが！」

握った拳を信護の腹へ。だが、バチッという音を立てて俺の拳は信護の両手に受け止められた。押す力と押し返す力は完全につり合い、拮抗状態に突入する。信護はしてやったり、という表情でにぃっと笑った。顔に無駄な力が入っているため、ものすごくぎこちない。

「二度も同じ手は食わんぜ。ところで愁也クン、昨日は一人でどこに行っていたのかな？」

「う……」

さすがに俺がここ最近どこかに通っていることは気付いていたか。でも、まだどこに通っているのかは知られていないようだ。出来れば姉貴が入院していることをこいつに知られたくはない。

「い、言いたくねえ」

かといって嘘は吐きたくないし。

「いーやー！　シュウが人には言えない場所に通っているぅー！」

「誤解を招くようなことを言うなッ！！」

「おごぁ！？」

頭にきた俺は、信護の顔に頭突きを食らわせた。予想外の攻撃に

信護は反応できず、俺の額がもろに信護の顔面を強打する。バタリと廊下に倒れる信護。
「ったく」
朝から余計な体力を使わせやがって。俺は倒れた信護に頓着せず、教室の扉をいささか乱暴に開けた。
「あ、おはよう」
ほんの数センチ先に立っていた速人がにこやかに挨拶をしてくる。
「……。おはよう」
驚きでとっさに声が出なかった。相変わらず意表を突いてくれる。そのまま速人は俺と入れ違いに教室を出ていくその途中に、廊下に倒れていた信護を踏んづけた。信護に足を乗せたまま、顔だけ下を向いて言う。
「何で倒れてるの？」
「……うるせぃ」
知っててやってんだろうな、アレ。俺はそのまま真っ直ぐ自分の席に着く。
この時の俺は、こんな感じの平凡な日常が繰り返されるのだろうと思っていた。多少は事件が起こるとしても、そんなのは些細な事で、おおむね変化の無い日々が続くと、そう考えていた。
すぐにその考えが変わるとも知らずに。

俺の住んでいる浅凪（あさなぎ）市はわりと大きな都市であり、大通りともなると十階以上のビルが立ち並び、車はひっきりなしに横を通り過ぎ、もちろん人通りもそれなりに多い。
その賑やかな人混みの中を、俺はのろのろと歩いていた。
現在、俺は犬の散歩中だ。当たり前だが俺の家の犬だ。オスのラブラドールレトリーバーで、名前はケン。本当はすぐさま隣の市に行くつもりだったのだが、出がけにおふくろが、出掛けるならついでに散歩させといてと言ってきたのだ。俺の家では姉貴とおふくろが権力の大半を握っている。

そしてウチには親父がいない。まだ産まれたばかりのケンをもらってきて五日後に死んだ。　交通事故だった。
親父の名前は杉村健一。親父から名前をとってケン。名付けたのはおふくろだ。
親父が死んだのは俺が小学校二年生の時だから、八年前か。俺と姉貴はもちろん泣いた。普段は涙なんか絶対に見せなかったおふくろも。俺はその時初めて、おふくろがどんな顔で泣くのかを知ったのだ。俺と姉貴の養育費は、親父が密かに貯めていた貯金と親父に掛けていた保険金で何とかなった。そのことを知ったのは、俺が中学生になってからだったが。
『あの人、用意だけはよかったから』
そう言って無理に笑ったおふくろの顔を、俺は今でも覚えている。
親父の葬式では顔も見たことのない親戚が大勢来た。多くは純粋に親父の死を悲しんでくれたが、中には金目当ての人間もいた。そんな人間にはおふくろは一歩も譲らなかった。帰り際、そいつらが言った『保険金目当て』という言葉に反応して姉貴がそいつらに飛び蹴りを食らわしてたっけな。
とにかく、ケンは親父が死んでからこっち、ずっと一緒に暮らしてきた家族のようなものだ。
親父のことを思い出すのは久しぶりだ。昨日会ったあの黒ずくめの男の雰囲気が、親父と少しだけ似ていたからかもしれない。いや、それはさすがに考えすぎだろうか。
でもあの男は不思議と悪い人物ではない、と思えた。それはほとんど直感に近いものだったが。
俺が昨日のことを思い返していると、何の前触れもなくケンが走り出した。
「あ、おい！」
ぼーっとしていて手元が疎かになっていたため、ケンは俺の支配を脱し、一目散に駆けていく。慌てて俺も後を追った。
ケンはややドリフト気味に横手の路地に入って行った。数秒の後、

高校生らしき二人組が、路地から転がるように飛び出してくる。すれ違うまで一瞬で、顔はよく見えなかった。
まあいい、今はケンに追い付くことが先決だ。
二人組が出てきた路地に入る。入口付近から路地の奥へと目を走らせると、こちらに背を向けるケンがいた。俺はほっとして、ケンを確保しようと小走りに近寄って行った。よく見ると、ケンは落ちている何かにひっついてそれを舐めまわしていた。
「なんだ？」
引っぱり出してみると、どうやらジャケットのようだった。背に液体が付いている。匂いからしてオレンジジュースだろう。
こいつ、これに反応したのか。俺はケンを見下ろし、それから予期せぬ拾いものに目を移した。拾ったはいいものの、これ、どうすりゃいいんだ？
持ち主を探して返すか？　でも、これを持ってうろうろしたくはないし、恐らく持ち主はあの二人組だろうから、戻ってくるまでここで待った方がいいかもしれない。
「あの……」
「はい？」
拾ったジャケットの処理についてあれこれ考えていると、後ろから声をかけられた。反射的に返事をしながら振り向くと、同い年くらいの女の子が立っていた。ああ、そういえばさっき路地の入口ですれ違った記憶があるな。あの二人組の連れだろうか。
「これ、あんたの？」
とりあえず聞いてみる。少女は首を振った。ならばこの落とし物はやはりあの二人組のどちらかの物なのだろう。
「あの二人の知り合いなんだったら……」
少女はまたも首を振った。今度は俺が質問するより先に口を開く。
「助けてくれてありがとうございます！」
「は？」
そして深々と頭を下げる少女。

助けてくれて、ってどういうことだ？
まったくもって状況が分からないが、どうやら彼女は俺に助けられたと認識しているらしい。
「いや、むしろ迷惑かけたんじゃないか？」
だって人と談笑してるとこに暴走犬が乱入だぞ？　迷惑以外の何ものでもないだろうに。
しかし少女は首を傾げて訪ねてくる。
「どうして迷惑になるんですか？」
「え、だってほら、こいつがあんたらの邪魔したろ？」
先ほどからケンはオレンジジュースを狙って、ぴょんぴょんと跳ねてくる。俺はリードを操ってその動きを抑えつつ、顎でケンを示す。
「えと、もしかしてわざとじゃないんですか？」
「何が？」
今度は俺が首を傾げる番である。どうも先ほどからほとんど話が噛み合っていない気がする。おそらく俺と彼女の認識の齟齬からくるものだろう。
彼女もどう説明すればいいのか分からず焦っているのか、妙にあたふたしていた。コミカルなその動きに合わせて、ケンがぴくりぴくりと小刻みに反応する。頼むからもう暴走するなよという意味を込めて軽く睨むと、ケンは申し訳なさそうに頭を垂れた。
その後、しばらくの間あたふたしていた彼女を落ち着かせ、話を聞いてみると、路地から飛び出してきた二人組は友達ではなく彼女に絡んでいた不良達だったらしい。脅されかけて困っていたところ、図らずもケンが乱入し、追い払ってしまった。そして彼女は俺がケンをけしかけてあいつらを追っ払ってくれたのだと思い、俺に礼を言ってきたという訳だった。
「ってか、こいつが勝手に暴走して偶然こうなったんだから、俺が礼を言われることじゃないんだけど」
「でも助かったのは事実ですから。ありがとうございました」

「だから礼はいらないんだって」
何度も頭を下げられると逆に困る。何もしていないのに礼を言われるのは、すわりが悪いというかなんというか。俺は苦笑しつつ訂正をいれた。
「わたしは雨宮碧（あめみやあおい）っていいます。あなたは？」
「……杉村愁也」
にこりと笑って明るく尋ねられると、もうそこらへんは気にしなくていいか、と思えてきた。初対面の人間にそんな顔ができるなんて、たぶん彼女は人見知りしない性格なのだろう。
俺は雨宮を改めて見る。身長は俺の肩くらい。長めの髪は、少し茶色がかっている。クラスの女子と比べても、可愛い方だろうと思う。少なくとも俺のクラスの男子どもは放っておかないだろうな。
俺が黙っていると、雨宮が何かに気付いたように小首を傾げて言った。
「杉村さん……」
「さん付けするほど年は違わないだろ。普通に話してくれりゃいいから」
「そうですか？　じゃあ、杉村君、ってもしかして朝凪高校の生徒？」
俺は軽く目を見開く。
「そうだけど、なんで分かったんだ？」
一旦家に帰って私服に着替えてきたのに。よく見ると雨宮が着ているのはウチの学校の制服だった。
「今朝、四組の前で何かやってたでしょ。あれ、君だよね？」
「ああ、まあ」
見られてたのか、あれ。俺はなんとなく視線を斜め下に逸らした。その逸らした視界に腕時計が入る。四時四十八分。すでに約束の時間まで一時間を切っていた。ケンのせいで約束を忘れかけていた俺を、一気に焦りが襲う。
「しまった」

思わず漏れた呟きに、雨宮は不思議そうな顔をした。
「どうかした？」
「用事思い出した。俺もう行かねえと」
「あ、ごめんね。時間取らせちゃって」
「気にすんな」
短く言い、ジャンパーを近くに捨ててあった自転車のサドルに掛け、リードを拾ってケンとともに俺は走り出した。女の子一人に二人がかりで絡んでいくような奴らにわざわざ返してやる義理もない。
路地を抜け、家に向かって走る。なるべく人の少ない道を選んで走りながら、自分の発した言葉を思い返す。
「気にすんな、か」
普段でも使うような何の変哲もない言葉だが、何故か今日だけは昔言われた言葉が頭の中に浮かんでくる。
『気にするな。お前のせいじゃない。だから……』
重なった言葉が胸に問える。黒々とした不安が、足元から少しずつ這い上がってくる気がした。

一時間後、俺は約束の教会に辿り着いた。駅から全力疾走して息も絶え絶えだ。昨日と全く同じ服装の男が、小ぢんまりとした教会の入り口前、四・五段ほどある階段の最上段に座っていた。
「やあ、少年。少し遅かったようだが？」
「ああ、いや、なんでも、ない、です。ちょっとした、トラブルが、あっただけで」
膝に手をつき、肩で息をする俺に、男は立ち上がり歩み寄ってきた。軽い金属の擦れる音に俺が顔を上げると、目の前にネックレスがぶら下がっていた。
細かい銀色の鎖に、ひし形の飾りが付いている。銀色のフレームに一回り小さい水晶らしき石をはめ込んだ造りになっているようだ。手に取り、親指で表面をなぞる。なだらかな曲線を描く石は、外気

に触れたせいかひんやりとしていた。
「お礼の品だ。気に入ってくれるといいんだが」
「え？　でもこんな高そうなもの、もらえませんよ」
アクセサリーのことはあまり詳しくはない。しかしこれが千円やそこらで買えるものじゃないことは俺にも分かる。道案内しただけにしては高すぎる報酬だ。もっとお手軽なものだと予想していた俺としては、ちょっと遠慮したくなってしまう。
受け取ってしまったネックレスを男に返そうとするが、差し出した手をやんわりと押し返された。
「せっかく来てもらったのに、手ぶらで返すわけにもいかん。感謝の気持ちとして受け取ってくれないか？」
「いや、でも……」
いつぞやと同じ構図である。男の方はまったく引く気がないようで、結局は俺が折れるしかなかった。
「どうも、ありがとうございます」
もらったネックレスをポケットに押し込み、改めて男の方を見ると、ネックレスを持っていた手と反対の腕に、なぜか猫を抱えていた。俺の頭上に疑問符が浮かぶ。
「あの、何で猫抱えてんですか？」
「これか。いや、これはとりあえず気にしないでくれ」
「いや、気にするなっていわれても……」
「例えばの話だ」
聞いてないし。続くはずの気になりますよ、という台詞は、男の台詞をかぶせられたために中断させられた。男は抱えていた猫を足もとに降ろす。まるで逃げ出す気配がないのが不思議なところだ。じっと蹲ったままの猫の様子が少し気になる。
「君の前に川があるとしよう。見ると上流から一人の人間と一匹の犬が流されてくる。周りには誰もいない。助けを呼びに行く時間もない。両方助けたいが、川の流れが速くてどちらかしか救えない。さて、君はどちらを助ける？」

「心理テストかなんかですか、それ？」
「そんなところだ」
　男の突然の質問に、俺は困惑するしかなかった。あまりにも切り出し方が不自然だ。何やら不穏な気配がする。いまさらながら、ほいほいとここに来たことを軽率だったかもしれないと思えてきた。
俺は眉を顰めながら答える。
「人間、ですかね」
「ほう？　それは何故？」
「何故ってそれは……」
　それは……どうしてだろう？　俺は上手く言い表すことが出来なかった。俺の反応を待っていた男は、何も言うことが出来ないでいる俺に背を向け、再び入口前の階段に座った。
「話は変わるが、少年。君にはお姉さんがいるね？」
「何で」
　待て、俺は病院の前でこの人に会ったんだ。偶然か何かで姉貴の病室を見たことがあるのかもしれない。だが、偶然見ただけにしてはやけに確信に満ちた言い方だ。
　徐々に俺の警戒心が高まっていく。
　男は少しだけ考える素振りを見せ、それから俺と目を合わせた。男の雰囲気が変わった気がする。わずかに瞳に険しさが増した、か？
「回りくどい事を言っていても始まらない。率直に言おうか。このままいけば、君のお姉さんはもうすぐ亡くなってしまうだろう」
「……何、言ってんだ」
　俺は正直に言って反応に困った。この男、本気で言っているんだろうか。
「冗談にしては笑えないな。医者も看護師も、そのうち目が覚めるって言ってたぞ。容体も安定してるって。あんた、えっと……」
　そういや名前聞いてなかった。信じてもらえないのは予想していたのか、男は余裕の表情だ。
「クレインだ。そう呼んでくれ」

「あんた、日本人だろ？」
「そうだが？」
「何で横文字なんだよ」
「コードネームだ」
親指を突き出す男。俺の顔が引き攣る。
「バカにしてんのかあんた。適当なこと言ってると怒るぞ？」
「む、まあ、今はその話は置いておこう。私が言いたいのは君のお姉さんの命が危ないということなんだよ」
クレインは真顔に戻った。俺は呆れ混じりに返す。
「あのな、一体なんの根拠があってそんなこと言うんだ？」
クレインは何事か考えるように唸った後に、
「そうだな。やはり口で説明するより、実際に自分の目で見た方が信じられるだろう」
と言って立ち上がった。すたすたと俺の前まで歩み寄り、コートのポケットからなにかのケースを取り出した。それから俺の手を取り、仰向けたその上に静かにケースを置く。俺はクレインを軽く睨みながらそのケースを開いた。
「メガネ？　これがどうしたって……」
ス、と片手をかざして俺の言葉をさえぎり、一歩下がってクレインは言った。
「百聞は一見に如かず。騙されたと思ってかけてみたまえ」
これをかけたところで一体なにが変わるというのか。と思ったが、俺は言われるがままにそれを顔へと持っていった。
「う……」
メガネをかけた途端、視界が緑色に染まった。一秒とかからずに元に戻ったがその代わり、俺の目に奇妙な光景が映った。眼鏡越しのクレインの体を、淡い緑色のものが覆っている。
「これは……」
俺は言葉を失った。試しにメガネを外してみる。途端に緑色のものは見えなくなった。もう一度かけてみる。先ほどと同じく、視界

を緑色が覆う。色が薄まり、周囲の様子が見えるようになると、普通の配色になる。クレインの周りには相変わらず緑色のものが見えた。辺りを見回してみる。緑色のものが覆っているのはクレインだけではなかった。草、木、そしてさっきクレインが抱えていた猫にも同じものが。しかし、地面や建物はそのままだ。

「見えたか？」

頃合いを見計らって、クレインが聞いてくる。

「なんなんだよ？これ」

「気だ」

「気？　ってあの、気功とかに使うアレか？」

我ながら下手な言い方だ。まだ動揺が抜けないせいか、どうも頭がうまく回らない。それでも俺の意図したことは伝わったようで、クレインは頷き、説明を始めた。

「気は、いわば生命力と言える。生きているものには必ず通っている。このメガネはそれを視覚できるようにする物だ」

真面目に解説されても、とてもじゃないが信じられない。第一、そんな代物があるならとっくに世間に知られているはずだろう。

「なんかタネがあんだろ？」

半信半疑の俺に、クレインは意味ありげな表情でふっと笑ったあと、おもむろに嵌めていた皮手袋を外し俺に寄越した。

「まだ信じられないというのなら、それを嵌めてこの猫を抱きあげてくれればいい。そうすればいやでも信じる気になる」

「はぁ？　なんで今そんな事しなくちゃいけないんだよ」

「百聞は……」

「あぁあぁ、分かったよ」

俺は訝りながら、クレインの足もとに座っている猫に目を向けた。しゃがみ込んでよくよく見ると、あることに気が付いた。この猫が纏っている（見た感じ、覆うというより纏うと言う方が正しいだろう）気とやらは、ひどく不安定だ。時々大きくゆらぎ、集まったそれが千切れて霧散していく。俺は猫を両手で挟み込むようにして抱

き上げようとした。
　しかし、結果的にその行為は失敗に終わった。まず猫に触れることが出来なかった。驚くべきことに、俺の手が猫の体をすり抜けてしまう。いくら掴もうとしても俺の両手が噛み合うだけで、まるでぬるま湯をかき回しているような、そんな感触。
　混乱している内に何やら硬いものに手が触れた。すくい上げてみると、それは黒ずんだ石のようだった。取り出してすぐに、ボロボロと崩れて風に飛ばされていく。それとほぼ同時に、猫の周りの気が霧が薄れるように消えていった。辺りの木々には変化は無い。だとすると、消えたのはこの猫の気のみ。
　気。クレインは生命力とも言ったか。
　待てよ？　それが無くなったらどうなるんだ？
　まさか。
　俺の頭にいやな考えが浮かぶ。
「まさか……そんな……」
　俺は無意識の内に呟いていた。じわじわと胸の内に不安が広がる。慌てて手袋を脱ぎ捨て、微動だにしない猫に恐る恐る触れた。
「冷たい。これ、死んでるのか？」
　俺があれを壊したから？　猫の中から取り出した、あの石を？
　あれは一体――
「君が取り出したものを、私たちは『核』と呼んでいる。魂と言った方がニュアンスとしては分かりやすいが、それだと語弊があるからな」
　俺が脱ぎ捨てた手袋を拾いながら、なんでもないことのようにクレインは言う。俺は緊張に身を固くした。僅かに声が震える。
「じゃあ、なんだよ。俺が殺したってことなのか？」
「……そうなるな」
　俺は信じられない思いで自分の手を見つめた。
「だがまあ、気に病むことはない。その猫はもう寿命が尽きていた。遠からず死んでいたことだろう。君が手を下すまでもなく、な」

そんなバカな。現にさっきまで生きていたのに。
「通常、気というものは生き物の体を循環している。他の生き物が吐き出し、大気中に漂っている気を取り込んで、私たちは生きているんだ」
俺は無言で立ち上がった。クレインは俺に構わず続ける。
「要は呼吸と同じ。無意識な行為だ。そして私たちが『核』と呼んでいるもの、あれが循環の元になるものだ。故にあれを取り出すと循環が出来なくなり、最後には死に至る。正常に機能している場合は取り出してもすぐ戻せば問題は無い。が、機能が停止してしまった核は、体から取り出した途端に壊れてしまう」
「けど、おかしくないか？　あの猫の、その、核とやらが機能してなかったなら、何でさっきまで生きてられたんだ？」
「何にでも例外はあるものだ。稀に、核が機能を止めても生き残る場合がある。他から生命力を奪って無理矢理に命を引き延ばす、というケースだな」
他から。この場合、他の生き物から、ということか。自力で集められないから、他から奪ってでも。生物の生存本能の成せる技とでもいうのか。
奪われたものは、どうなるんだろう？
俺はごくり、と生唾を飲み込んだ。
「それで、姉貴が危ないってのとどう関係してくるんだ？」
「ケン、と言ったかな。君の犬は。さっきの例え話を覚えているかね？」
そこでクレインは帽子を片手で直す。俺は何故そこでケンが出てくるのかと眉を顰めたが、数瞬でクレインの例え話の真意に気付いた。
語句の変換。人間を姉貴に、犬をケンに。
その意味するところは。姉貴とケンの、どちらかが……。
「つまりはそういうことだ。信じる気になったかどうかは、改めて聞くまでもないようだな」

俺は絶句した。言葉が出てこない。
「あんた、一体何者なんだ」
掠れた喉を駆使してようやく絞り出した俺の問いに、クレインはちょっと間を置いて答えた。
「死神」
「……は？」
「なんなら鎌でも見せようか？」
自信たっぷりに言われると、本気かどうか判断することが出来ない。
クレインは二の句が継げない俺に手を差し出した。どうやらメガネを返せという意味らしい。いちいち思わせぶりだ。俺は無言でメガネを外し、差し出された手のひらに置いた。回収したメガネをケースに入れ、次いで冷たくなった猫を抱えあげ、俺に向き直ったクレインは俺の表情を見てシニカルな笑みを浮かべる。
「冗談だ。れっきとした人間だよ。私はね。とにかく、君の犬が君のお姉さんの生命力を吸い上げているのは間違いない」
「ケンが姉貴を殺そうとしてるってのか？　姉貴を選ぶ理由がどこにある？」
俺は反論したが、クレインは首を振って言う。
「意思の問題じゃあない。これはただの現象だ。そこに個人の意思は働かない」
俺は拳を握り締めた。背中を嫌な汗が伝う。ケンが姉貴を殺すだと？　冗談じゃねえぞ。
「なんで俺にこんな話を？」
「君にどうするか決めてもらうためだ。誰に意見を聞いてもいいが、最後の決断は君がしろ。私は君の出した答えに従う」
俯く俺の肩にクレインは片手を置いた。
「俺に、どっちを犠牲にするか選べってことかよ」
俺は怒りより、むしろ苦々しさを吐き出すように言った。
「生き物は皆、何かしら犠牲にして生きている。君だって毎日鳥や

牛の肉を食べるだろう？」
「俺が殺せって言うのとは、違うだろ」
思わず言ってしまってから気付いた。こんなのは苦し紛れの言い訳だ。
クレインは俺の肩から手を離し、踵を返して階段を上る。
「たとえ誰が殺そうが、それを食べた時点で君がその行為を認めたのと同じことだ」
階段を上り切り、教会のドアを開けた。
「私は君を選んだ。君はどちらを選ぶのだろうな？　すぐに答えを出せとは言わない。一日。考える時間を与えよう。明後日には答えを聞かせてくれ。よく考えた方がいい。でないと後悔することになるぞ。少年」
クレインの横顔がドアに遮られて見えなくなる。ガチャリという音を最後に、辺りを静けさが包んだ。
「おい、待て！」
俺はクレインの後を追ってドアを開いた。窓は板か何かで塞いであるらしく、教会内は真っ暗で中の様子は見渡せない。闇に目が慣れるまで数秒。その間、物音ひとつしなかった。隠れる時間など無かったのに、もうどこにもクレインの姿は見当たらない。
月明かりも差し込まない暗闇の中、俺は苦しげに呟いた。
「何だってんだ一体……」
いきなり与えられたこの問いに、俺は答えを出すことが出来るのだろうか？
考える時間は、そう多くはないらしい。

揺れる天秤：3

けたたましいほどの音量で目覚まし時計のベルが鳴る。
「んん……」
午前七時三十分。俺は目覚まし時計を勢い良く叩いた。勢い良すぎて時計がベッド脇の棚から落ち、ガチャンという音とともに電池が吹っ飛ぶ。
昨日、俺は帰るなりすぐさま二階の自分の部屋へ行き、ベッドに倒れた。二十分ほどそうしていた。それから一回に下り、夕食と風呂を済ませて早々に二階に上がった。そしてそのまま寝てしまったのだった。
「起きるか」
俺は起き上がり、ベッドから下りた。時計を拾い上げ、調子を見る。どうやら電池が飛んだだけのようだ。
「そういや電池どこだ……ま、いいや」
ひとりごちた後、クローゼットを開き制服を取り出してベッドに並べた。私服から制服に着替えている途中、ズボンのポケットから何かが落ちた。フローリングの床にぶつかり、チャリンという軽い音を立てたそれは、昨日あいつから受け取ったネックレス。
拾い上げ、少し迷ったあとにそれを首に掛ける。どこか目につかないところに押し込んでしまおうかとも思ったが、現実逃避しているみたいでいやだった。
夢じゃないんだよな、昨日のことは。これが無ければ、昨日のことを夢の中の出来事だと思ったかもしれない。
夢だったら良かったのに、なんて考えても仕方ない。いくら願っても現実は変わらないのだから。
「寒っ」
じっとしていたら体が冷えてきた。吐く息が白い。今日は特に寒いなと思い、制服の上着を着ながらベッドに片膝を突いてカーテン

を開いた。外はうっすらと雪が積もっていた。道理で寒いはずだ。
着替えを終えた俺は、そこら辺に放っておいたカバンを引っ掴み、部屋を後にした。姉貴の部屋の前を通り過ぎ、階段を下りてリビングへ。幸い、リビングは暖房が効いていて暖かかった。
二人分の朝食をテーブルに並べていたおふくろがこっちを向いて言う。
「おはよう。朝ご飯出来てるわよ」
俺は「ああ」という気の抜けた返事をして椅子の背を引いた。無言で朝食を食べ始めた俺を、おふくろは食器を洗う手を止めてじっと見つめてきた。
「何だよ？」
無言で見つめられることに耐えられなくなった俺は、口に持っていきかけた箸を降ろして訊いた。おふくろは自身もテーブルに着きながら尋ねる。
「どうしたの？　あんた何か昨日から変じゃない？　嫌なことでもあった？」
「別に」
「あんたは隠し事しててもすぐ分かるの。さあ！　白状しなさい」
ずいっと身を乗り出すおふくろ。
「なんも無いって。それより水。出しっぱなしだぞ」
苦し紛れに指摘すると、おふくろは慌てて台所に戻って行った。
ほっとした俺は改めて朝食に箸を伸ばした。
白状なんて出来る筈がない。あんな話、今でも半信半疑なのに。
さすがに食欲などわかず、朝食を半分も食べられなかった。洗い物を終えて俺の向かいで食事をしているおふくろに目を遣る。
「おふくろ」
「ん、何？」
俺の真剣な面持ちに、おふくろは不思議そうな顔をした。俺はちょっと躊躇ってから質問を口にした。
「姉貴がいなくなるのとケンがいなくなるのと、どっちが悲しい？」

「そりゃあ、深雪に決まってるじゃない」
俺の突拍子も無い問いにおふくろは目を丸くしたが、迷いなく答えた。どうしてそんなこと、とばかりに苦笑混じりだ。
「なんで？」
「自分の子供だから。親ってそういうもんよ？」
そう言われたら納得するしかない。わざわざ訊くまでもなく、当たり前の答えだ。
安心したからか、肩に入った力が少しだけ抜けた。
「……行ってくる」
バカなことを聞いた気がして恥ずかしくなり、俺は乱暴に席を立つと、カバンを手にして足早に玄関を目指した。おふくろも後ろをついてくる。
「今日は冷えるわよ。上に何か着て行きなさい」
「要らねえ」
心配そうなおふくろの声を振り切って俺は外へ出た。ケンが小屋から出てきて俺を出迎える。俺はその頭を一回だけ撫でてから、朝の冷たい空気の中を歩き出した。

昼下がり。とある喫茶店に黒いロングコートの男が入って行った。クレインと名乗っていたその男は、店内を見回し、それからゆっくりと席に向かった。目当ての席に到着するとコートを脱いで椅子の背に掛ける。コートの中に着ていたのはこれまた黒のセーターに黒の革のパンツ。帽子はテーブルの隅に置いた。
「遅いわよ。一体何をしていたの？　クレイン」
クレインが席に着くと、先客が咎めるように言った。若い、二十代前半の美しい女性だ。暖色系のハイネックのセーター。タイトスカート。椅子の背にはジャケットが掛かっている。
クレインは店員にコーヒーを頼むと、ようやく女性に話しかけた。
「悪いな。教会に立ち寄ったら少し遅くなった」

「少し、ね。一時間は少しと言えるのかしら？」
「そう言うな。待たせて悪かったと思っているさ。……迷ったんだが、道端に放っとくわけにもいかなくてな」
クレインを横目で睨み、呆れたように言う女性を宥めながら、わざとらしく唸ってみせる。女性が訝しげな表情をした。
「何の話？」
「私が拾った猫の話だ」
女性は難しい顔をしていたが、理解を諦めたらしく深々とため息を吐いた。まったく悪びれないので、怒る気も失せてしまったのだろう。上手く女性の怒りをはぐらかしたクレインは、咳払いを一つして表情を引き締めた。
「彼は見つかったか？　ソフィア」
ソフィアと呼ばれた女性は首を振った。
「ダメね。全然見つからないわ。この近くにいる筈なんだけど」
そうか、とさして期待をしていなかったようにクレインは頷いた。そこへコーヒーが運ばれてくる。クレインがコーヒーを口に含み、カップに戻すのを待ってソフィアは続けた。
「そっちは？　会ったんでしょう？　今回の対象に」
「ああ、会ったには会ったが、意識不明ではな。それほど余裕のある状況とは言えん」
「住寄市なら、あなたより新宮寺君に任せた方が良いんじゃない？」
「彼は立場上、自由に動けん。それに、今回は場所が場所だけに条件も厳しい。身軽に動ける私が最適だろう」
「そうね。でもそう言うなら、もう少し周りの目を気にしたら？　その格好、結構目立つと思うわよ」
クレインは苦い顔をした。だがそれも一瞬で消え、普段の余裕に満ちた表情に戻る。
「そうだな。考えておこうか。それにしても、今回の件は多少面倒だったな。これが当たりならいいんだが」
「まるで、もう済んだ事のように言うわね。まだやる事があるでし

ょう？」
「ここまできたら、後は少年の答えを待って処理をするだけ。面倒なのは、どうやって事態を把握させるかだ。本人ではなく第三者に信じさせるのは、なかなか骨が折れるんだよ」
ソフィアがくすっと笑った。クレインはなぜ笑われたのか分からず、眉根を寄せる。
「その割には、何か良いことがあったって顔だけど？」
「そうか？……だとしたら、それはあの少年のせいかもしれんな」
「少年？　ああ、対象の家族のことね。いいの？　こんなこと、子供に話すには重すぎる話じゃないかしら」
「大丈夫さ。彼ならきちんと答えを出せる」
自信満々といった様子でふっと笑うクレインに、ソフィアは再度ため息を吐いて言った。
「その自信はどこからくるのかしら」
「心配せずとも、彼は充分に大人だよ」
言ってクレインは立ち上がり、コートを羽織った。頭に乗せられる帽子を目で追っていたソフィアは、すっかり冷めた紅茶を飲み、確認するように訊いた。
「彼を見つけたら連絡を入れるわ」
「頼む」
ソフィアの横を通り過ぎ、クレインは店を出た。灰色の曇り空を見上げぽつりと呟く。僅かに口の端が上がっていた。
「さあて、どうするのかな。少年は」
正面に戻した顔には、すでに笑みは浮かんでいなかった。
「存分に悩め、少年。この選択に正解など無いのだからな」
呟いた言葉が雑踏に消えるのを待たずに、クレインは歩き出した。

「よし、じゃあ今日はこのくらいで。解散！」
小林先生の声とともに、教室内はにわかに活気づいた。次々と教

室を出ていく生徒たち。次第に教室から人が減っていく中、俺は自分の席に座ったままぼんやりしていた。
今日一日、俺はまったくと言っていいほど授業に集中できなかった。時間が過ぎるのも、早かったような遅かったような、よく分からない。
なんとなく席を立つのも億劫で、窓の外をただ眺めていると、近頃なんだか一日中ハイテンションなあの人からお声がかかった。
「そこにいらっしゃるのは愁也クンじゃありませんか。浮かない顔でどうしたのかな？」
「別に。俺はデフォルトでこの顔なんだよ」
俺は信護の方を向かずに言い返した。
「そうかぁ？　でもそんな顔してるから、本堂に『おい、杉村。お前こっちに来てこの問題解いてみろ』って言われるんじゃないですかー？」
まったく似ていないモノマネをしながら、からかうように信護が言った。俺はじろりと信護を睨みつけた。ぼーっとしていたせいで数学の本堂に目をつけられ、授業中ことあるごとに皮肉を言われたのは、今日一番の不覚である。
そこへ速人がやってきた。俺の怒気を含んだ目つきを見て誰に向けるでもなく問いかける。
「どうしたのさ？」
話し相手が来たのを見てとり、信護は芝居がかった口調で喋り出した。
「ちょっと聞いてくださいよ。ほんとのこと言っただけなのに、愁也クンたら怖い目でこっちを睨むんですよ」
「それは、君の訳分かんないキャラのせいだと思うけど」
そっからしばらく二人の会話が続く。悪いが俺は二人の会話をこれっぽっちも聞いちゃいなかった。明日にはクレインに会いに行かないといけない。早く答えを決めなければならないのだが、焦りや不安ばかりが先立ってしまい、俺はいまだに心を決められていなか

った。
命の重さに違いはない、という類の言葉がある。だがそれは主観を排除した場合にしか当てはまらないと思う。誰だって赤の他人より身近にいる親しい者の方が大切だろう。全ての人がそういう考えとは限らないが、大多数の人には優先順位というものがある筈だ。もちろん俺にも。
姉貴もケンも、俺にとっては大事な家族だ。それは間違いない。ならば、その上でどちらの優先順位が上なのか。あいつが俺に問うたのは、つまりはそういうことだ。出された問いはこの上なく簡単だった。しかし、それはどちらかを切り捨てろと言うことと同義。
どちらも切り捨てたくはない。これが今の俺の正直な気持ち。だから未だに答えが出ていない。
そういえば、仮に答えが決まったとして、俺はどうやってあいつに伝えればいいんだ？
肝心なことを訊きそびれていた。今まで気付かなかった自分にビックリだ。
「ってなわけで！　今日はシュウの家に行こうと思うんだけど、どお？」
「あ？」
どうしたものかと悩んでいるところにいきなり話がきた。一体どんな流れで俺の家に行くことになったのかは不明だが、できることなら今は家に来て欲しくない。今、家に信護たちが来たら姉貴が入院していることがバレてしまうかもしれない。
なんとか断れないだろうか。
「今日は、ダメだ」
「えー？　なんで？」
「なんでって。とにかくダメだ。諦めろ」
「いいじゃん、別に」
くそ。何でこんな時に限ってしつこいんだよ。
「よくない。今日は無理だ」

「んなこと言わずに。ほら、久しぶりにシュウの姉ちゃんにも……」
「ダメだって言ってんだろ！！」
……しまった。あまりにしつこいからつい大声出しちまった。
俺の声はまだ教室に残っていた数人の生徒の注目を集めた。好奇の視線がこちらに注がれる。俺の剣幕に、信護も速人も目を丸くして驚いていた。俺は舌打ちをして席を立ち、大股で廊下に出ようとした。後ろで信護が何か言ったが、耳に入らない。
頭を冷やそう。イライラしすぎている。
廊下の真ん中を、途中何人かの生徒とすれ違いながら、俺は自分の行動を後悔していた。

「おい！　どこ行くんだよ！」
信護の問いを無視して愁也は行ってしまった。突然本気で怒られ、戸惑いと驚きを隠せない信護は呟かずにはいられなかった。
「なんか俺、気に障ることでも言ったか……？」
「あの様子を見るとそうみたいだねぇ」
驚きからいち早く立ち直った速人がそれを受ける。速人はしばらくの間、愁也が開け放した扉の先を見つめていた。不意に視線を感じて顔を横に向けると、隣に立っている信護の、窺うようなまなざしに気が付いた。
「何？」
「様子見てきてくんねぇ？」
速人はアゴに手を添え、ちょっと考えてから結論を告げた。
「ハンバーガーにポテトとドリンクで引き受けてあげよう」
「待て待て。ここは素直に頷くとこだろ」
「へえ。君は自分の不始末を他人にタダでさせるの？」
「うぐっ、冷たい視線！」
「もう一度言うけど、ハンバーガーとポテトとドリンクとアイスで引き受けてもいいよ」

「おォい！　何気に一品増えてんじゃねえか」
「嫌なら自分で見に行けば？」
「お願いします」
「ん。任せなさい」
頭を下げる信護に満足し、速人はとりあえず廊下に出た。それとなくだからなー、という信護の声を聞きながら、腰に手を当て廊下を左右に見回す。当然、愁也の姿はない。だがそこは割と長い付き合いだ。こういう時に愁也が選ぶ場所は、頭を冷やしに屋上かどこか、風に当たれるところだと速人は当たりをつけた。
（まずは屋上かな。やれやれ、あの二人は色々と手間がかかるなぁ。でもまあ、一緒にいると面白いからいいんだけどね。）
まんざらでもない様子で歩き出そうとした速人の背後から、控え目に声がかけられたのはその時だった。

屋上は風が冷たかった。ひんやりとした空気が顔を撫でる。積もった雪が融けた名残か、屋上には小さな水たまりが何カ所もあり、コンクリートの床はまだ湿っていた。出入り口と、俺の背の一・五倍はある金網以外、屋上には何も無い。
俺が扉から数歩前に進んだところで、上から声が降ってきた。
「やあ、少年。調子はどうだ？」
まさかの人物の声に、俺は驚いて振り向いた。いつからいたのか、クレインが出入り口の上、平らな屋根になっているところに腕と足を組んで座っていた。顔には皮肉めいた笑みを浮かべている。
調子はどうだ、か。悪いに決まっている。俺はぶっきらぼうに言った。
「どうやって学校に入ったんだよ、オッサン」
「おいおい。オッサンはないだろう。クレインと呼んでくれ」
「じゃあ聞くけどな、クレイン。一体どうやって入った？」
学校が不審者対策に力を入れている昨今、こんな目立つ奴がそう

易々と入ってこれる筈もない。いっそのこと、今すぐにこいつを不審者として突き出してしまおうかとも思った。それくらいに俺は機嫌が悪かった訳なのだが。
「それはそうと少年」
当の本人は聞いちゃいねえ。このふてぶてしさはある意味尊敬に値するのかもしれないな。
クレインは組んでいた腕と足を解き、片手で帽子を押さえ、へりを掴んだもう片方の手を支えにして俺の目の前まで飛んだ。着地で膝を曲げたため、クレインの顔が俺の顔の位置まで下りてくる。目前の顔は笑ってなどいなかった。射抜くような視線が俺の目を真正面から見据える。
「答えは出たのか？」
「！……」
俺は黙ったまま目を逸らした。足元の水たまりには、まるで痛みをこらえているかのような、しかめっ面の自分の顔があった。
俺の沈黙を否定と受け取って、クレインは姿勢を正し、言う。
「まあいい。今回は昨日言い忘れたことを伝えに来ただけだ。答えが出たら、いつでもいい、あの教会に来たまえ」
「ちょっと待て」
俺の横を通り過ぎようとしたクレインが動きを止める。
「あんたは姉貴とケンのどっちかを選べって言ったな」
「ああ、確かにそう言った」
こんなのは希望的観測にすぎないんだろう。でもその可能性がないとは限らないじゃないか。ただでさえ俺は状況がよく分かっていないのだ。こいつの言葉をそっくりそのまま信じるほど俺はこいつを信用できてない。
「どうしても選ばないといけないのかよ？　姉貴もケンも両方助けられるような、そういう選択肢はないのか？」
どれほど困難でも、どれほど可能性が低くても、そんな道があるならそれに縋りたかった。

選ぶのが怖い。俺の一存で大事なものが壊れてしまうのがたまらなく恐ろしい。
だがそんな俺の思いとは裏腹に、
「そんな方法はない」
現実は無慈悲だった。
「ふざ……！」
何の感情も乗せず、そして躊躇いもせずに俺の希望を引き裂いたそいつを殴ってやろうと思った。そうしないと俺の怒りは治まらなかったし、なによりこんな理不尽な状況に対する怒りをぶつけられるのはこいつくらいだった。
拳を握ってクレインの顔を睨みつけて。
でも、出来なかった。
こいつを殴ったところで何にもならないとか、さっき八つ当たりしちまったばっかりだろうとか、そういう理由じゃない。
「そんな方法があるのなら、君に言わずとも私がどうにかしているさ」
そう言ったクレインの険しい横顔に、悲しみや痛み、そして後悔の影がうっすらと見えたからだ。
その時に分かった。こいつも伊達や酔狂でこんなことをやっているのではないのだと。
握りしめた拳は行き場を失い項垂れ、俺は再び目を反らす。
「私にはどちらかを救う手助けしか出来ない。第三者である私が、どちらを救うかを勝手に決めることも出来ない」
だからケンと姉貴に近しい俺に判断を委ねるって？
「っそんな……」
その言い分は筋の通った配慮と言える。しかしそれは同時にすごく残酷なことでもある。
クレインは何も言わなかった。俺は何も言えなかった。
「最善を求め足掻くのは良い。しかし理想だけ求めても現実は変わらんよ」

しばしの沈黙のあとに、クレインは諭すように呟く。
言葉を返せない俺の横を通り過ぎざま、クレインは声を低めてこう言った。
「もう分かっているんじゃないのか？」
「え？」
振り返った先に、クレインの姿は無かった。慌てて周りを見回したが、屋上に隠れられる場所など無い。出入り口は一つだけだ。まさか飛び降りたわけでもあるまいし。本当に、消えたとしか言いようがなかった。
俺は呆然として呟いた。
「一体何者だ？　あいつ」
「それって誰のこと？」
突然、真横から声が返ってきた。
「うお！！　は、速人。お前、いつ来た？」
思わず三歩下がってしまった。速人、なぜお前はいつも気配を消して近づいてくるんだ。俺の過敏な反応を気にした風もなく、速人は言った。
「ちょうど今だよ。信護にそれとなく様子、見てくるように言われてね」
「それとなくって言われたのにぶっちゃけんなよ」
「それは愁也が言わなきゃ大丈夫でしょー」
明るい笑顔とともに、さらりと黒いことを言う速人だった。バレなきゃいいってことか。
俺はまあ、そうだけど、と歯切れの悪い答えを返した。
やっぱ、あの態度は良くなかったよな。後で信護に謝っておこう。
「ねえ、愁也」
速人の声が真剣味を帯びる。こういう時は、大抵が核心をついた質問をする時だ。俺の体がかすかにこわばる。自分でも、思わず背筋が伸びたのが分かった。
「君って、最近何に悩んでるの？」

きたか。さすがにというかやっぱりというか、バレていた。ま、無理もないな。俺は隠し事が得意な方じゃない。
速人は俺を真っ直ぐに見ている。俺は、目を逸らすことはしなかったが、何と言ったらいいのか迷っていた。
そのまま数分、あるいは数秒ほどが過ぎ、迷った末に俺が出した返事は
「わりぃ。今は言えねえ」
「……そ。分かった。愁也がそう言うんなら、僕はもう何も聞かないよ」
「そうしてくれると助かる」
「ただ……」
速人はいったん言葉を切り、横手の金網へと近付いて行った。俺も一定の距離を置いてその後を追った。
「僕は、それで納得したわけじゃないからね」
俺はこの言葉に驚いた。速人が直接不満を口に出すのは珍しい。もしかして怒っているのだろうか。声だけでは判断しかねるが、俺の位置からでは速人の表情は窺えない。
速人には悪いが、同情で気を遣われるのは嫌いだ。信護と速人を信用してないとかじゃなくて、俺の気持ちの問題。ちっぽけな意地だけど、たとえどんなに苦しくても、これだけは譲れない。
でも、速人の考えも聞いてみたい気がするんだよな。
「なあ、お前、自分の友達と自分の犬だったら、どっちが大事だ？」
数秒の沈黙。速人は振り返らなかった。
「僕だったら、犬かな」
「どうして？」
一拍の間。
「動物は、人間と違って裏切ったりしないから」
とっさに言葉が出てこなかった。喉まで出かかった言葉が、そのまま消えてしまった。
冷めた声だった。それ故に速人の感情が読めない。一メートルち

ょっとの距離が、どうしようもなく遠く感じた。速人は今、どんな顔をしているのだろう。
「速人。俺は――」
「冗談だよ」
振り返った速人の顔は、冗談を言った後のいつものあの顔だった。だが、俺はその表情にどことなく違和感を覚えた。
「じゃ、僕は信護に結果を報告してくるよ」
俺は速人が屋上の扉を閉めるのを、黙って見送った。それから軽いため息を一つ。
あいつ、まだ何か俺に話してないことがあるみたいだな。
「あ、そうそう。忘れてた」
閉じられた筈の扉がガチャッと開き、速人が顔を覗かせた。
「愁也にお客さん」
「客？」
速人の声にはいくらか楽しむような響きが含まれている。
それはいいとしても、俺に客とは誰だろう？　予想外の客ならついさっき来たばかりだが。
開け放した扉の奥から姿を現したのは、昨日ケンの散歩中に会った女の子だった。
彼女は俺の手前まで歩いてくる。俺の方はというと、必死に目の前に立つ人物の名前を思い出そうとしていた。確かに名前を聞いた筈。
「昨日の、え～……」
名前、なんだっけ。
少女は俺が何に戸惑っているのかを察し、自己紹介を始めた。
「わたしは一年一組の雨宮碧」
「ああ、悪いな。俺、人の名前を覚えんのは苦手で」
ちなみに俺は対人用記憶力が人より弱い。もう一年近いってのに同じクラスの人の名前と顔が一致しない場合があるほどなので、他のクラスとなると尚更だ。四組の俺が一組の人と話すことはほとん

どない。
「あぁ、うん。それは、いいんだけど……」
今さらながら気付いたが、雨宮の様子が昨日と違う。どことなく落ち着きがないというか、そわそわしている。歯切れも良くない。
「それで、俺に何の用なんだ？」
「昨日のことなんだけど、杉村君、あの時ブローチ拾ったりしてない？」
問いかける雨宮の顔は、必死と言ってもいいほどに真摯だ。瞳には不安と期待の色が滲んでいる。俺はその必死さに気後れしてしまった。
「いや、拾ってないな」
「そう……」
がっくりと肩を落とす雨宮。深々とため息なんか吐いて、落ち込み加減が半端じゃない。答えたこっちが心苦しくなる勢いだ。
「それって大事な物なのか？」
「うん」
そしてもう一度ため息。
「なんなら、俺も一緒に探そうか？」
「え、いいの？」
雨宮の顔がぱっと明るくなった。どうやら感情がそのまま表情に表れるタイプのようだ。
「帰宅部だからな。時間ならいくらでもある」
目の前でそんな沈痛な顔されて、『そうか。じゃあ、がんばれ』なんて言うほど、俺は心が貧しくはない。
「ありがとう。じゃあ荷物取りに教室に戻るから、玄関で待ってて」
「おう」
雨宮は回れ右をして、急ぎ足で屋上を後にした。
「さてと」
俺も教室に戻るか。予定外の用事が出来てしまったが、どうせ家に帰ってもただ悩むだけだろうから、これはこれでいいのかもしれ

ない。
いつの間にか、俺の中の不安や焦りといったものがすっかり鳴りを潜めてしまったことに、俺はこの時ようやく気が付いた。

十分後、俺は荷物をまとめ、（荷物と言ってもカバンのみだが）玄関へと到着した。教室で信護に謝ってから行こうと思ったのだが、どうやら先に帰ったようで教室にはいなかった。
明日にするしかないな。
雨宮は先に来ていた。玄関の近くの壁に寄り掛かり、所在なさげだ。俺が近寄ると、彼女も俺に気付いて壁から背を剥がした。
雨宮は紺色のコートにマフラーを身に着けている。対して俺はYシャツの上に紺のブレザー。俺の格好を見て、雨宮の目がちょっと大きくなった。
「寒くないの？」
「平気だろ」
多分だけど。雨宮は一種、感心したような息を漏らした。
「それより、早くしないと暗くなるぞ」
「あ、そうだね」
俺達はそれぞれ靴を履き代え、外に出た。昨日、雨宮に会った場所へと向かう。学校からそんなに離れていないので徒歩で充分だろう。
まだ湿っている歩道を歩きながら、俺は並んで歩く雨宮に尋ねた。
「ときに、本当に落とし物なのか？　あの二人組に盗られたんじゃなくて」
「違うよ。わたしはちょっと話しただけ。だって、先にからまれてたのは別の人だったもの。わたしが割って入ったらすぐに逃げちゃったけど」
「そ、そうか」
もっと怒ってもよさそうだが、雨宮は気にしていないらしい。た

った一人で助けに入るところといい、実は芯の強い人物なのかもしれない。
「そういや、雨宮って速人と知り合いなのか？」
「え？」
雨宮はこっちを見てきょとんとしている。
「速人と一緒に屋上に来たみたいだから」
理由を聞いて、ああと納得した様子の雨宮は、正面に顔を戻して答えた。
「本当はね、教室から飛び出してきた杉村君と廊下ですれ違ったんだけど、すっごい不機嫌そうな顔だったから声掛けにくくて」
すっごい、のところを強調された。そんなに怖い顔に見えたのだろうか。すれ違って気付かない俺も俺だけど。
大通りに出ると、途端に通行人が多くなった。目的地はもう少し先だ。
「どうしようか困ってた時に、教室から神田君が出てきたから」
行き先を知っているかもしれないと声を掛けたという。よく考えたら三人一緒にいるところを見られていたのだから、友達だということは知っていて当たり前か。そうなると、俺の行動パターンが速人に筒抜けということに。
俺の行動はそんなに分かりやすいのだろうか。なんか知らんけど悔しい。
そこからは他愛のない雑談になった。最近の出来事、友達の話、授業の話など、そんな会話をしていると昨日の夜の事が嘘のような気がしてくる。
自然と張り詰めた気も緩んできて、何て言うか、随分と楽だった。
そうこうしている内に目的の場所に着いた。ケンを追って雨宮と出会った路地。商業ビルと進学塾の間の、道と言うにはやや狭い通路だ。
俺は対人用以外の記憶力は良いから、ここで間違いないだろう。
「ここだな。探してるブローチってどんなだ？」

「青色で鳥の羽根の形だから、分かりやすいと思うよ」
「分かった。じゃあ、俺は奥から、雨宮は手前から探そう」
言って、俺は路地の奥へと歩き出した。突き当りに到着すると、俺はざっと近くを見渡し、見える範囲にそれらしいものが無いことを確認した後、死角になる場所を探し始めた。
それからたっぷり一時間、路地を隈なく探したが雨宮のブローチは見つからなかった。
「無いな。ホントにここで落としたのか？」
「間違いない、と思う。ここに来るまでは持ってた記憶があるもの」
自信が揺らいだのか、語尾が小さくなった。気持ちが沈んでいるためだろう、顔が俯いてしまっている。
俺は頭を掻きながら言った。
「これだと同じ物をもう一つ買った方が早いんじゃないか？」
「あのブローチの代わりになる物なんて、どこにも無いよ」
さっきと違って妙に確信的な言い方が引っかかる。手に入れるのが難しい物ってことか？
そういえば、以前おふくろが姉貴の小物を間違って捨てた、ということがあったな。まさかとは思うが。
「家族が間違って捨てちまったとかじゃ……」
バッと雨宮は弾かれたように顔を上げ、語気を荒げて言った。
「そんなことある筈ないよ！　だって、あれは……！」
何故か雨宮の言葉は不自然に途切れた。辛そうな表情で口を引き結ぶ。
俺はその勢いにびっくりして、少しの間固まってしまった。それから、そろそろと手を下ろし、うっすらと涙を浮かべる雨宮に、動揺しながらも言った。
「わりぃ」
雨宮は無言でまた俯いてしまった。
辺りに目を遣ると、陽が陰り、路地に入ってくる光が弱々しくなってきていた。もともと明るい場所じゃないから、これ以上時間が

経つと明かり無しに探すことは難しいだろう。
「今日はもう諦めよう。暗くなってきた。どっかで休んでくか？」
「……うん」
すっかり元気がなくなった雨宮を見て、俺は自分の現状を思い出した。
明日、俺は大切なものを失う覚悟をしなくちゃいけないんだな。

辺りはまたたく間に暗くなった。季節は冬。暗くなるのも早い。
俺と雨宮はすぐ近くにある公園に行き、備え付けのベンチに腰を落ち着けた。すでに陽も落ち、公園に俺たち以外の人はいない。
俺は公園内の自販機で飲み物を買ってきた。缶の上部を三本指でつまみ、雨宮の前に掲げてみせる。
「ほらよ。何が好きか分かんなかったから、とりあえずコーヒーにしたけど」
「ありがと」
雨宮はもう落ち着きを取り戻していて、両手で包みこむようにして缶コーヒーを受け取った。
俺も隣に腰を下ろし、プルタブを持ち上げる。軽い音がして、飲み口から白い湯気が昇った。一口飲むと甘味と酸味が口の中に広がり、冷えた体が内側から温まっていく。
しばらくの間、どちらも無言で缶を口に運んだ。
俺がコーヒーを八割ほど飲んだ頃、雨宮が缶を脇に置き、おもむろに口を開いた。
「さっきはごめんね。一緒に探してもらったのに怒鳴っちゃって」
「別にいい。なんか事情があるみたいだし」
言って、残りのコーヒーを一気に流し込む。雨宮は俺の言葉を聞き、微笑を浮かべた。
「優しいね。杉村君は」
「んぐっ！？　げほっ……えほ。なんでそうなる」

予想外の言葉に驚いてむせてしまった。面と向かってそんなことを言われるとは思わなかった。まさに不意打ち。
「あのブローチ」
「ん？」
「私が中学生のとき、誕生日にお姉ちゃんに貰ったものなの」
「そうか」
「杉村君には兄弟とかいる？」
「ああ。俺も姉貴が一人」
「そうなんだ。仲良いの？」
「え、まあ、どっちかって言うと良い、と思う」
身近すぎて、そういうの考えたことなかったな。
雨宮は、それを聞いて小さな声でぽつりと呟いた。
「なんか、いいね。そういうのって」
少し寂しそうな顔。
「雨宮？」
そして、今の言葉を打ち消すかのように勢い良く立ち上がった。伸びをして俺の方を向く。
「私もう帰るね。今日は手伝ってくれてありがとう」
「家まで送ろうか？」
夜に女の子一人じゃ危ないだろうと思って言ったのだが、雨宮は首を振った。
「いいよ。そこまでしなくても」
「いや、でも……」
「大丈夫！　ホントに平気だから」
そう言って作った雨宮の笑みは、どこかぎこちなかった。無理をしているのが一目で分かる。
一人になりたいってことか。
悟った俺は口をつぐむしかなかった。
「さよなら」
「ああ。じゃあ、な」

雨宮は俺に背を向け、出口へと歩いていく。
姉からの誕生日プレゼント、か。
俺は逡巡した後、意を決して立ち上がった。
「雨宮！　明日も探すつもりか？」
「え？　うん。そのつもりだけど」
振り返った雨宮の頭上には、疑問符が浮かんでいた。
まったく。自分でも人が良いと思う。明日にはあいつに会いに行かなくてはならないのに。でもまあ、いつでもいいと言っていたし、少し位待たせてもバチは当たらないだろう。
それに。
「ここまで聞いたら放っとけねえよ。見つかるまで俺も一緒に探す」
雨宮はきょとんとしている。数回、目を瞬いてから口を開いた。
「ホントに……？」
「ああ」
「ありがとう」
雨宮の笑顔は、さっきと全く違って見えた。
それに、礼を言うのはこっちの方だ。おかげで、何か分かった気がするから。
残り時間は少ないが、もうすぐ答えがだせそうだ。

揺れる天秤：４

次の日、俺は学校に着いてすぐに、信護に昨日は悪かったと詫びた。信護は機嫌が良かったらしく、気にすんなと歯を見せて笑っていた。なんとなく意味ありげだった。

速人はいつも通りだった。アイツはよほどのことがない限り、態度が変化しないのだ。

俺は普通に授業を受けて、飯を食って、たまに寝て、久しぶりに笑って、そんな感じで穏やかな日常を過ごした。

そして放課後、俺はＨＲが終わると信護と速人に用事があるからと断って、教室を後にした。

教室を出て一歩踏み出したところでズボンのポケットに入っている携帯電話が振動した。ポケットから携帯電話を取り出し、メールを開く。

『ちょっと遅れるから、先に校門前で待ってて』

そういえば昨日の別れ際に、入れ違いになったら困るからと、雨宮と携帯電話の番号とアドレスを交換していたんだった。信護がこれを知ったら大騒ぎするだろうな。アイツは近頃ハイテンションが地になってきて、対処に困る時がある。何だろうな。テンションの下げ方を忘れてしまったのだろうか。もしくは何か良いことがあったとか。

俺はあれこれ考えながら玄関を出て、校門に向かう。やっぱり信護は前からあんな感じだったかな、という考えに至ったところで校門に着いた。校門に寄り掛かって雨宮を待つ。顔を上に向けると、晴れ空が目に飛び込んできた。気温も昨日より高いし、風もない。いい天気だ。

しばらくすると、雨宮がこっちに走って来た。

「ごめんね。朱音（あかね）ちゃんの目を盗むのに、思ったより手間取っちゃって」

俺の傍まで来るなり雨宮は言った。
「目を盗むって、何の話だ？」
「あ、えっと、な、何でもない！　気にしないで」
あはは、と笑って誤魔化そうとしている。ま、詮索はしないでおこうか。
「とにかく行こう。行動は早い方がいい」
「そそそそうだね。行こう！　すぐ！」
俺の背中を押してまで急ごうとしている。
「？？」
早い方がいいのは分かるが、何もそこまでしなくても。ここにいると不都合でもあるのだろうか。

今回、俺達はちょっと方向を変えて、交番に行くことにした。速人に落し物をした時はどうするべきかと聞いたところ、それはやっぱり交番でしょうという答えが返ってきた。なるほどそりゃもっともだってことで、現場から一番近い交番へと向かっているわけだ。
そういえば、俺は帰宅部だから暇があるとして、雨宮は部活に入っていないのだろうか。この時間にこうして探しているくらいだから、たぶん入っていないんだろうけど。
「雨宮って、部活やってないのか？」
「ん？」
「部活」
「えーっと……」
雨宮の目が泳ぎ始めた。あからさまに動揺している。
「い、いい天気だよね、今日」
めちゃくちゃ不自然な話の逸らし方だな……。他にいくらでも話題があるだろうに。
「そうだな」
会話が途切れてしまった。苦し紛れの笑顔が次第に引き攣ってい

く。これ以上は無理だと観念したのか、最後には俺から目を逸らしてぽつりと言った。
「手芸部デス……」
別に隠すことでもないような。
「ふうん。今日は休みなのか？」
と言って雨宮の方を向くと、何故か雨宮はサッと、逃げるように顔を背けた。しばらく無言でその横顔を眺めているうちに、なにやら雨宮の顔に大量の冷や汗が。
もしかして。
「さぼったのか？」
「……うん」
そうきたか。予想外だ。雨宮って勝手に休んだりしなさそうなのにな。それについて俺がとやかく言う気はないが。
しかし、そこまでするってことは、探しているブローチは雨宮にとってよほど大事な物なのだろう。校門のところでやたら急いでいたのは、さぼったのがバレたら不都合があるからか？
「用事があるって言って休めばよかったんじゃないのか？」
「うーん、それもそうなんだけど。それはそれで問題があるっていうか」
「ふうん。ま、いいけどな。何でも。っと、ここだな」
交番に到着。雨宮はよしっと気合いを入れてドアをくぐった。
「ブローチ知りませんかっ！」
交番に入るなり、雨宮は机に手をつき身を乗り出して尋ねた。
「はい？」
雨宮の先制攻撃に、机に座っていた若い警察官（たぶん巡査）はたじろいだ。心なしかのけ反り、アゴが上がっている。俺は見かねて雨宮を机から離し、こっちを向かせた。
「落ち着け。はい、深呼吸、吸ってー……」
「すぅーっ」
「吐いてー」

「はぁー」
「よし、行け」
「ブローチ知りませんかっ！」
「オイ」
思わず手首のスナップまで入れたツッコミをしてしまったじゃないか。
自分が焦り過ぎだと気づいた雨宮は慌てて訂正した。
「じゃなくて。落とし物でブローチって届いてませんか？」
「ああ、そういうことか。うーん、どうだったかなぁ。あ、先輩。落とし物の中に、ブローチなんてありましたっけ？」
巡査は通りかかった先輩（恐らく巡査長）を呼び止めた。巡査長は見ていた資料から目を上げ、むう、と唸った。それから雨宮の方を向いて言う。
「それは最近の話？」
「おとといです」
俺は一歩下がってやりとりを見守ることにした。巡査と巡査長は顔を見合わせ、巡査がきっぱりと言った。
「今週に入ってから、落とし物は届いてないよ」
「そうですか……」
俯き、落胆する雨宮を気の毒そうに見る巡査の横で、巡査長が思い出したようにのんびりと呟く。
「おとといと言えば、えらい勢いで飛び込んできた男の子がいたな。君達くらいの年の」
雨宮が顔を上げる。俺も思い当たる節があり、巡査長の次の言葉を待った。
「近くの路地で女の子が不良にからまれてるって」
「それで、どうなったんですか？」
急に興味を示し始めた雨宮に、やや戸惑いながら巡査長は答えた。
「あ、ああ、現場に行っても誰もいなくてな。一応連絡先を聞いて男の子は帰したよ」

雨宮が今度は巡査長に詰め寄る。
「その人がどこに住んでるかわかりませんか？」
「「え？」」
巡査&巡査長の声が揃った。

事情を説明すると、巡査長は意外にすんなり住所を教えてくれた。場所は最近建設された住宅団地。先ほどまで玄関脇のインターホンに何度か呼びかけていたのだが、さっぱり応答がない。
「誰も居ないみたいだな。どうする？」
「出来るだけ待ってみる。もうすぐ帰ってくるかもしれないし」
「だけど、そいつが持ってるかどうかも分かんねえぞ？」
「ちょっとでも可能性があるなら、待つ意味はあると思うよ？」
他に手がかりもない今の状況を考えると、俺は頷くしかなかった。
「そうだな」
雨宮の決意は揺るがない。何がそこまで雨宮を動かすのだろうか。いくら姉からの誕生日プレゼントだとしても、ここまで頑張るほど大切なのか？
俺はポケットに両手を入れ、近くの塀に寄り掛かった。晴れた空に夕日が眩しい。
少し迷ったが、やっぱり聞いてみることにした。
「なあ、雨宮の姉ちゃんて、どんな人なんだ？」
「……？」
唐突な俺の質問に雨宮がこちらを向く。俺は何も言われていないのに、慌てて付け加えた。
「いや、そこまで頑張るくらいだから、どんな人なのかなってな」
雨宮は顔を前方に戻し、やや俯いた。ためらっているようにも見える。
「私のお姉ちゃんは、優しくて、美人で、しっかりしてて、頭も良くて、私の自慢のお姉ちゃんだった」

「だった？」
過去形。ってことは……。
「死んじゃった。私にプレゼントをくれてすぐに」
俺は反射的に口を開いたが、何も言えなかった。散々言われてきた安っぽい同情の言葉など、雨宮はもう欲しくないだろう。昨日のあの必死な態度、その理由がようやく分かった。
姉の形見、だったのか。
「悪い」
「ううん。気にしないで」
夕日の眩しさに耐えられなくなった俺は視線を太陽から外し、虚空を見つめる。
俺は何を悩んでいるんだろうな。どっちも失いたくないとか言って、選ぶことが怖いだけじゃないのか？
答えだって、本当は――
「あ！　杉村君。あれ！」
「なんだ？　帰ってきたのか？」
はっと我に帰り、雨宮の指差す方を見ると、制服を着た高校生っぽい男がこちらに歩いてくるのが見えた。理由は分からないが、しきりに辺りを窺っている。
俺は直接に面識はないから、あの男子がそうなのかは判断できない。
「あれか？」
「うん。すみませーん」
言うや否や、雨宮は駆け出した。俺も歩いて男の方へ向かう。
男は十字路に差しかかると注意深く左右を確認し、何かに気づいたような驚いた顔をして俺達と別方向に走り出した。
「あ？」
逃げ出した男の後を追うべく俺が駆け出そうとした時、前方から雨宮の小さな悲鳴が上がった。どうやら十字路の横手から現れた別の男にぶつかったらしい。

ようやく俺が追い付くと、衝突した男が後から来た男と一緒になって雨宮を責めているようだった。
「お前のせいで逃げられちまったじゃねえか。あ？　どうしてくれんだよ」
ぶつかった男が一歩前に出た。鼻にピアスをしていて、いかにもガラがわるそうな男だ。妙なことにならなければいいが。
「あれ？　そいつ、おとといも邪魔してきたヤツじゃね？」
今度は後から来た男が言った。こちらは金髪にサングラス。着崩した学制服を見るに、二人とも高校生だろう。
「あ、ご、ごめんなさい。よそ見してて……あれ？」
慌てた様子で頭を下げた雨宮は、何かに気付いたらしく、鼻ピアスの足もとに落ちている物を拾い上げた。
「これ、私の……」
どうやら探していたブローチを見つけたらしい。なんとまあ、散々探したものがまさかこんなところで見つかろうとは。
「おっとォ」
「あ！」
ほっとしたのも束の間、あろうことか鼻ピアスが横からブローチを奪い取ってしまった。
「お前、この前もよくも邪魔してくれやがったなぁ。あんときゃなんか妙な犬が襲ってきたが、今度はそうはいかねえぞ」
「アイツの代わりにきちんと金払ってくれねえと、な」
「ちょっと待った」
話が悪い方向に流れそうなので、俺は二人組と雨宮の間に割って入った。突然の乱入者の俺を、二人組はぎろりと睨みつけた。
「何だ、てめえは」
妙な犬の飼い主だよ、と言うとややこしいことになるのは明白だろうから、要点だけを告げることにする。
「それ、この子の物なんだ。大切な物だから返してやってくれないか？」

すると、鼻ピアスは眉をひそめ、それからニヤニヤと笑い出した。
「おお、いいぜ」
「じゃあ……」
雨宮が返してもらおうと前へ出るのをさえぎるように、鼻ピアスは付け加えた。
「ただし！　俺らはこの大切なブローチとやらを預かっててやったんだ。それなりの礼はもらいてえな」
「預かってて『やった』？　落とし物は交番に届けるのが市民の義務ってもんじゃないのか？　預かってたから金よこせなんてちょっと図々しいぞ」
俺の非難の言葉にまったく悪びれず、鼻ピアスは大げさに肩を竦めた。
「なあに、ほんの気持ちでいいんだよ。ああそうだ。おとといダメになったジャンパーの分、五千円でどうだ？」
何がほんの気持ちだ。ぼったくりもいいとこだろう。大体、金を渡したとしても、こいつらが素直に返してくれるとは思えない。弱みを握っているという意識があるせいか、完全にこちらの足元を見てきている。俺は今日はそんなに金を持っていないし、かといって相手は二人。力ずくでいっても勝てそうにない。こっちには雨宮もいるしな。
最悪の場合でも、ブローチだけは確保しないと。
「そ……」
「分かりました」
それとこれとは関係ないだろう。と言おうとしたら、雨宮が先に答えてしまった。俺は驚いて雨宮の横顔を見つめる。
雨宮は財布から五千円札を取り出し、鼻ピアスに差し出した。鼻ピアスがそれを受け取り、代わりに右手を伸ばす。開いた手のひらにはブローチが置かれていた。
ところが、雨宮の指がブローチに届く直前――
「ああ、言い忘れてたが……」

チラッと俺に視線を送る。
「一人五千円」
「何だと？」
雨宮が俺に不安げな眼差しを送ってくる。俺は首を振った。
「払えねえなら、これは返せねえなぁ」
金髪の方が俺に顔を近付け、サングラスを片手でくいっと上げる。目が笑っていた。馬鹿にしたようなその表情に、俺の頭には一気に血が昇った。
そうかい。やっぱり最初っから返す気なんて無かったってわけだ。
「ま、土下座でもしてくれんなら、考えてやってもいいがな」
たとえ今ここで土下座をしたとしても、恐らくこいつらはなんだかんだ文句を言って返すつもりはないのだろう。
それが分かってしまった俺は何も言えず、歯を食いしばることしか出来なかった。
へへっと笑って鼻ピアスは俺に背を向ける。
「待てよ」
俺は立ち去ろうとした鼻ピアスの肩に手を掛けた。とにかくこのまま行かせる訳にはいかない。
「っせんだ……よッ！！」
「がっ！」
鼻ピアスが振り向きざま、俺の鳩尾に拳を沈めた。ほとんど密着した状態で、しかも回転の勢いをのせた拳に、俺はたまらず腹を押さえて地面に膝をついた。
「おら！」
そこへさらに肘鉄が打ち込まれた。俺の右肩に直撃し、俺はコンクリートの地面に右肩から倒れた。
「杉村君！！」
雨宮が立ち上がろうとしている俺の傍にしゃがみ込む。俺は片手を上げて大丈夫だと意思表示をした。本当のところは苦しくて言葉が出せないし、肩がずきずきと痛んで全然大丈夫ではないのだが。

あの野郎、容赦なく打ち込みやがって。
痛まない方の肩を動かし、肘をついて前方を見ると、ちょうど二人組が曲がり角を折れて見えなくなるところだった。
最低だ。結局俺は何も出来なかった。情けない。
俺はよろよろと立ち上がり、近くの塀にもたれかかった。重い空気が漂う。せっかく見つけたのに、あんな形で手放すことになったのだ。雨宮が落ち込むのも当然だろう。どうにか取り返す方法はないものかと考えていると、雨宮がこちらを向いて申し訳なさそうに言った。
「本当にごめん」
「お前が謝ることじゃねえよ」
「でも、私と一緒にいたせいでこうなったんだし……」
「関係ねえって。それより、お前はブローチのことを気にかけてろよ」
雨宮の表情は曇ったままだ。ずいぶんと先ほどのことを気にしているらしい。目を伏せ、思いつめた顔で何事か考え込んでいる。
少し休んだおかげで、俺の肩と鳩尾の痛みも多少は和らいだ。今ならまだあの二人に追い付けるかもしれない。
「行こう、雨宮。……雨宮？」
俺が二人組の後を追おうとしても、雨宮はまったく動く気配がない。不審に思って呼びかけると、雨宮はぽつりと呟いた。
「もう、いいよ」
「いいって」
「こうなっちゃったら、諦めるしかないよ」
今にも消えてしまいそうな声で、まるで自分に言い聞かせているようだ。とても納得して言っているとは思えない。その様子に、少しだけ腹が立った。
俺のことなんか気にしてる場合かよ、と。自分でも理不尽な怒りだと思う。取り返そうと思えばできるじゃないか、お前のは。どうして手を伸ばさない？

「それで、お前は本当にいいのかよ？　何度か上手くいかなかったから、そんなんでお行儀よく諦めんのか？」
出来るだけ抑えたつもりだが、声の端々に苛立ちが滲み出ているのが自分でも分かった。
雨宮は俯いている。
「――――じゃない」
「？」
小刻みに震えていた。さすがに言いすぎたかと思い顔を覗き込もうとすると、雨宮がいきなり顔を上げた。
「簡単に言える訳ないじゃない！！　私だって悔しいよ。だけど、私に何が出来るって言うの！？」
涙で滲んだ瞳に睨まれ、俺は言葉が出なかった。さっきまでの憤りなど、どこかに吹き飛んでしまった。その代わり俺は少しだけほっとした。
まだ終わりじゃない。
「出来るか出来ないかを言ってるんじゃない。俺は、お前がどうしたいかを訊いてるんだ」
「私が……どうしたいか？」
「ああ。正直な気持ちを言ってみろ」
雨宮の瞳は揺れている。はじめは躊躇していたが、徐々に瞳に力強さが戻ってきた。そして、静かながらも決意のこもった声で言った。
「私は取り返したい。このまま諦めたくない」
俺はにやりと笑って言った。
「うし！　じゃあ、早いとこ追いかけるとしよう」
雨宮の表情が変わった。驚きと困惑が入り混じった目を俺に向けてくる。
「どうして？　何でそこまでしてくれるの？　杉村君には関係ないことなのに。ひょっとして、私に同情してる？」
「違う。俺は同情すんのもされんのも、好きじゃない」

「じゃあ、どうして？」
「どうしてって言われてもな」
俺は返答に困った。具体的な理由がある訳じゃない。ただ、俺がそうしたいと思っただけなのだから。
「分かんねえよ。理由なんて」
「えぇ？」
予期せぬ答えに雨宮が拍子抜けした声を出した。
「何でって言われても、分からないものは分からないとしか言えねえ。俺がそうしたいと思ったからそうするんだ。理由なんか後で考えるさ」
雨宮は呆気に取られている。
「ホント、にそれだけ？」
「強いて言うなら、このまま諦めたら絶対に後悔する。そんな道は選べないってだけの話だ」
俺が言い終わると、どこからか拍手が聞こえてきた。
何事か、と俺も雨宮も音のする方に顔を向ける。
「さっすがシュウ！　いいこと言った！　感動したぜぇー」
「またそんな大げさな。まあ、確かに愁也らしいとは思うけどさ」
そう言って現れたのは、ここにいる筈のない信護と速人だった。

今度は俺が呆然とする番だった。信護は言葉の出ない俺の前、ではなく雨宮の前まで歩を進めた。同じく何も言えないでいる雨宮の手を取り、まず五千円札を、次に青色の物体を置く。　雨宮の口から、あ、という声が漏れる。
信護は得意げに鼻を鳴らした。
「偶然通りかかった二人組に快く譲ってもらった。いやー、良かったな」
「そうだねぇ。お金もちゃんと返してもらったしね。快く」
快くとか言ってるけど、あれってたぶん力尽くで取り返したんだ

ろうなぁ。速人はケンカに混ざる筈がないから、二人組を撃破したのは信護だろう。普段の姿からは想像もつかないが、信護はケンカが滅茶苦茶強かったりする。それこそ、俺なんて足元にも及ばないほどに。

それにしたって、ずいぶんとタイミングが良すぎないだろうか。

「お前ら……なんでここに？」

俺は遅れて歩み寄ってきた速人に向かって尋ねた。正しい返答を期待してのことだったが、速人が口を開く前に信護が口を挟む。

「そりゃあお前、いい加減にシュウの悩みの種が知りたかったから、後を尾けてきたんじゃねーか」

「信護」

そんなに俺のことを気にかけてくれていたのか。こいつも結構いいとこがあるんだよな。

「ありが……」

「まあ、ぶっちゃけ愁也が女の子と二人で学校を出てったから、信護が面白がって後をむぐ……」

「ばかやろ！　てめっ……何をあっさりとバラしてくれてんだ」

ぶっちゃけ始めた速人の口を、信護が慌てて塞いだがもう遅い。俺は拳をパキパキ鳴らしながら信護に詰め寄った。

「ほお。俺が殴られてる様を、お前は面白がって見物してたわけか。それはそれはずいぶんと友達想いだなぁ。え？　信護」

「え、なんで？　なんで俺だけ？　ちょっ、待……」

「歯ぁ食いしばれ！！」

「ぎゃぁー！」

信護がどうなったかは想像にお任せするとして。とりあえず俺の気は晴れた。俺の決意は空振りだったがそれはそれ、終わり良ければなんとやらだ。

俺は雨宮に向き直った。

「良かった……私、これが無くなったらどうしようかって……心配で……ずっと……怖くて……ありがと。ほんとにありがと……」

ぼろぼろと大粒の涙を零す雨宮。その涙はしばらく止まることはなかった。先ほどまではかなり無理をしていたのだろう。
俺は空を見上げた。夕日はすでに沈み、晴れた空に月が昇り始めていた。
残るは、俺の問題のみか。
俺は倒れている信護と、それを棒でつついている速人に近寄った。
「信護、速人、雨宮のこと、任せていいか？」
「もちろん」
にこっと笑う速人。
「おぉ……任しとけ」
倒れたまま片手をあげてみせる信護。
「ありがとう」
俺はいい友達を持ったみたいだな。
そして俺は走り出した。確かな答えを胸に。

午後七時過ぎ。すっかり暗くなった道を俺は走っていた。約束の教会まであと少しだ。
角を曲がろうと速度を落としたところで、俺はあることに気が付いた。俺のあとを追っている奴がいる。足音からすると二人。俺は足を止め、背後を振り返った。
「お前ら……」
追ってきていたのは、鼻ピアスと金髪の男だった。金髪の男は今はサングラスを外していた。
俺を尾行してきたのか、それとも偶然なのか。偶然にせよ何にせよ、俺にとってはあまりいい状況とは言えない。
「今さら何の用だよ？」
「お前に直接用がある訳じゃあねえんだが」
俺はぼそりと呟いた。
「じゃ、ついて来んなよ」

「なんか言ったか？　ん？」
俺の呟きが聞こえたのか、金髪の男がわざとらしい仕草で聞き返してきた。その態度に腹が立った俺は、金髪の男を睨みつけて言った。
「うんざりだって言ったんだよ。お前らの相手すんのが。そんなにヒマならバイトでもして金稼げ」
「あんだとぉ？」
俺の皮肉に、金髪は敵意も露わにこちらを睨みつける。怒っているのは俺も同じだ。そんな視線くらいでたじろいだりはしない。
「テメエ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」
前に出ようとした金髪を、鼻ピアスの男が片手で制す。どうやら鼻ピアスの方が立場が上らしい。
「まあ待て。俺達はお前をどうこうする気はねえ。あの髪の短いケンカの強え奴。あいつと知り合いなんだろ？　あいつの連絡先を教えてくれねえか？」
髪が短くてケンカが強いって、信護のことか。俺にあいつを売れと？
抑まりかけていた怒りが再び沸き上がってきた。だが、ここで怒りに任せて殴りかかっては相手の思うツボだ。俺は強いて感情を抑え、平静を装って反論した。
「自分たちが何やったか忘れたのか？　素直に教える筈ねえだろ」
しかし、鼻ピアスも俺の答えを予想していたのか、薄ら笑いを浮かべたままだ。
「殴ったことなら謝るからよ。穏便に話し合いで解決しようぜ」
「殴ったことはいい。俺が許せないのは別のことだ」
「……あ～？　もしかして彼女から金取ったことか？　そうだな。俺も確かにあんなに金を取ることもなかったと反省してるよ」
なんだか随分と素直に謝るな。本心で言っているのか？
俺は鼻ピアスの真意を測りかね、ほんの少しだけ怒りが薄らぐ。
だがそれも、鼻ピアスの次の言葉を聞くまでの一瞬に過ぎなかっ

た。
「あんな見るからにダセェ安物で、五千円はかわいそうだったかもな。なあ？」
と、金髪に同意を求める。
「ハハッ。確かに。百円でも良かったんじゃね？」
「……黙れ」
二人組みは俺の制止を無視して、さっさと新しいのを買えばいいだの大事なもんなら落とすなよだの、好き勝手なことを言い始めた。
あれが雨宮にとってどんなに大切なものかも知らないくせに、分かったような口を聞きやがって！
俺の我慢はもうとっくに限界を超えていた。ただ立ってあいつらの戯れ言を聞いているだけなのに、激しい運動をした直後のように心臓が高鳴っている。全身の血が沸騰するんじゃないかと思うくらい体が熱い。だめだ。この怒りはとうてい抑えられそうにない。
二対一？　知ったことか。俺は強く思った。
こいつらを黙らせるだけの力が欲しいと。
『――――？』
誰かの声が聞こえた気がした。途端、俺の体温がすぅっと下がっていくのが分かった。
「おい、お前ら」
「あぁん？」
二人組がおしゃべりをやめてこちらを向いた。
「言いたいこと言ったか？　それならさっさと帰れ」
二人組の顔色が変わった。
「随分とナメた口聞いてくれんじゃねえか。上等だ。どうなっても知らねえぞ」
「泣いて謝っても許してやらねえからな。後悔すんなよ」
二人組がバカにしたように笑う。俺も笑った。
「それはこっちの台詞だ」
俺が言うのと同時に、二人組は左右に別れた。鼻ピアスが俺の左、

金髪が俺の右へ回り込む。二人がかりで挟み撃ちにしようという魂胆のようだ。俺はさっきまでと違い、ひどく冷静だった。なんだか妙な感覚だ。集中しているからなのか、左右から迫ってくる二人の動きが手に取るように分かる。鼻ピアスが左から、顔を狙って繰り出した拳を僅かに身を反らしてかわす。

続いて右から金髪の、無防備になった俺の脇腹目がけて打ち込んでくる左フックを一瞥し、難なくその腕を掴むと思い切り引き倒した。金髪が鼻ピアスの隣に顔面から倒れ込む。

相手の動きが遅すぎる。まるでスロー映像を見ているようだ。余裕を持って攻撃に対処することが出来る。

鼻ピアスが動いた。放たれた右ストレートを、俺は頭を少し傾けるだけでかわした。連続して左、そして右をかわすと同時に腕を掴んで捻り上げる。鼻ピアスは俺に無理矢理に背を向けさせられ、苦しげに呻いた。

「この！」

起き上がった金髪が殴りかかってくる。俺は空いた手で拳を受け止めた。バシンという音がして、相手の動きが止まる。その瞬間、金髪の男と目が合い、金髪の瞳の中に俺の顔がはっきりと見えた。全くと言っていいほど無表情の俺の顔が。

自分でも驚きだった。俺、こんな顔してたのか？

それでも俺の驚きは表情に出ることはなかった。俺が驚いているうちに、金髪の表情がさっと変わった。

驚愕から、恐怖へと。

「は、放せ、この野郎ォ！！」

「バカ、やめろ！！」

金髪がポケットから光るものを取り出し、鼻ピアスの制止の声を無視して俺の目に向けて光るもの、ナイフを突き出してきた。

俺はナイフを見て一瞬身を固くした。その一瞬が命取りだった。反応が遅れる。加えてこの至近距離。

かわせない……！

「ッ！！」
俺は鋭く息を飲んだ。だが、俺の目を貫くだろうと思われたナイフの切っ先は、俺の目前でぴたりと止まった。
「おいおい。さすがにこれは行き過ぎだろう」
手首を掴んでナイフを止めたのは、いつの間にか現れたクレインだった。呆れと驚きをない交ぜにしたような、そんな笑みを浮かべている。
金髪が我に返り、慌ててナイフを取り落とした。俺の足もとにカランという音を立ててナイフが落ちる。それが合図だったかのように、俺の体から力が抜け、汗が吹き出した。
鼻ピアスは自由になってすぐ、放心して膝をついている金髪に肩を貸し、立ち上がらせた。怯えた様な目から明らかな罪悪感が見てとれる。
「行けよ」
俺は乾いた喉からそれだけを絞り出した。鼻ピアスは何事か言おうとしたが思いとどまり、金髪に肩を貸したまま歩き出した。
クレインはその後ろ姿をしばらく眺めた後、俺に向き直って言った。
「待ちくたびれたぞ、少年。あんまり遅いので様子を見に来てしまった」
顔にはあの皮肉めいた笑み。
「そりゃ悪かった。けど俺も何かと忙しい身でね」
虚勢を張ってみたが、多分もう見抜かれているだろう。今の俺は立っているだけで辛いほどに疲れていた。
正直、休みたい。

揺れる天秤：5

俺は意地を通した。つまり、見抜かれていることを知った上で休憩をせずにまた歩き出したということだ。というか、当事者がここにいるのだからこの場で答えを伝えてもいいのではないかと思ったが、クレインが「話は教会に着いてからにしよう」と言ったので、いつかと同じように、二人並んで歩くことになった。まあ、人が通る可能性も無いとは言い切れないからな。

歩きながら、クレインがちらりとこちらを見て言った。

「ときに少年。私があげたネックレス、身に着けているのだな」

「ん？　そうだけど？　何だよ、やっぱり返せとか言うんじゃないだろうな？」

「まさか。そんなことは言わんよ。むしろ身に着けてもらっていて助かるくらいだ。それにしても、あれほど干渉するなと言ったのにアイツときたら……」

後半は独り言のようだ。顔に片手を当てて、ぶつぶつと愚痴っぽいことを漏らしている。はっきりとは聞き取れなかったが、不満を感じているのが態度で分かった。こういう様子は初めて見る。

そうしているうちに、例の教会に着いた。改めてクレインと向き合う。

「さて、答えを聞かせてもらおうか。その様子からすると、もう決まっているのだろう？」

俺は考えていた手順を頭の中で確認し、今度こそ真っ直ぐにクレインの目を見た。まず初めに言うことは――

「その前に聞きたいことがある。両方を助ける方法は本当に無いのか？」

可能性が低すぎるから、または危険だから、などの理由であえて伝えていないことがあるんじゃないか。

だが、クレインは迷わず否定した。

「期待を裏切るようで悪いが、そんな方法があったらとっくに伝えているよ」
「そうか」
それほど期待していた訳ではない。ただの確認だ。瞳を閉じ、息を整える。もう一度、自分の気持ちを確かめ、それからゆっくりと目を開けた。
「本当は、最初にあんたから話を聞いた時に俺の答えは決まってた。それに気付かない振りをしていただけで。どうにかして答えを出すのを先延ばしにしたかったんだろうな。無意識のうちに、自分の気持ちを誤魔化して、選ぶことから逃げてたんだ」
クレインは微動だにしない。表情も動かさない。まるで、俺の言うことを予め知っているような、そんな落ち着きようだった。
「それで？」
どうしても選ばなければならないのなら、自分の気持ちに正直になろう。選んだ結果がどうなろうとも、仕方がなかったなんて言い訳はしない。
そして俺は答えを出した。
「俺は姉貴を助けたい」
クレインはしばらく真顔で沈黙していたが、不意にその口元を曲げた。
「いい目だ。ようやく覚悟が出来たようだな。いいだろう。明日の午前一時、いや、正確にはあさってか。あさっての午前一時に、病院の前に来てくれ。君の犬も連れてな」
告げ終えると、教会の扉に手をかけた。
「また会おう。少年」
ふっと、薄く笑みを浮かべた。教会の扉が閉まる。扉の向こうには、すでにクレインの姿はないのだろう。一体どうやって移動しているのやら。神出鬼没とはまさにこのことだ。
帰ろうとした俺の目に、出入り口の階段のすぐ横にある小さな墓が映った。以前はこんなものは無かった筈だ。大きさと場所からし

て明らかに動物の墓だ。
誰がこれを？
俺はしばらくそれを眺めた後、その場を立ち去った。

俺はあれから家に帰り、おふくろに小言を言われながら夕食を済ませた。とにかく頭がぼーっとしていて、何を言われたのか覚えていない。風呂から上がると自分の部屋に直行。ベッドに倒れ込み、死んだように眠った。
朝になればそれは治ったが、代わりにひどい頭痛が襲ってきて最悪の気分だった。もちろん授業なんか耳に入らないし、痛みで寝ることもままならない。結局、午後から保健室で頭痛の薬をもらって寝た。それでも六時間目が終わる頃には痛みは引き、下校して家で暇を潰した。
約束の二時間ほど前になると、早寝のおふくろを起こさないように慎重に家を出た。こんな時間には電車もバスも利用できない。利用できたとしても、使わなかっただろうけど。俺はケンを連れて、徒歩で病院へと向かった。
午前十二時四十七分。姉貴の入院している病院の前。俺は隣でおすわりをしているケンの頭を撫でる。ケンがこちらを向いた。
「ごめんな。俺が勝手に決めちまって。許してくれとは言わないけど、せめてお前のために泣いてやるからさ。墓もちゃんと作るから」
そんなことで満足するなんて思わないけど、せめて、それぐらいは。そういえば、俺はもう何年も泣いていない気がする。一、二……八年か。
「早いな。もう少し遅れてくるかと思ったが」
声がした方を向くと、クレインともう一人、見知らぬ女性がこちらに歩いてきた。
「俺もそこまでいい加減じゃない。そっちの人は？」
女性が俺の前に立つ。

「初めまして。私のことはソフィアと呼んでちょうだい。よろしく。愁也君」
と言って握手を求めてくる。
「どうも」
差し出された手を握りながら、内心は首を捻っていた。俺の名前を知っていることは別におかしくないが、どこからどう見ても日本人だよな。まさか本名ってことはないだろう。何でわざわざの外国人ような名前で呼び合うのだろうか？
俺の反応から考えていたことが見抜かれたようだ。ソフィアさんはにこりと笑って説明を始めた。
「この名前のことは気にしないで。私たちの仲間には、本名を知られたくないって人が多いのよ。だから、こうしてニックネームで呼び合うことにしているの」
「はあ、そうなんですか」
そんな説明は初めて聞いた。誰かさんは一言も説明がないどころかはぐらかしていたな。俺はクレインの方をちらりと見た。
「何だ？　何か言いたいことでもあるのか？」
「別に。で？　これからどうするんだ？」
「少し待ってくれ。ソフィア」
「分かってる」
ソフィアさんはケンの前に片膝をつくと、ケンの頭に指先を触れさせる。そのまま目を閉じてまったく動かなくなってしまった。俺は行動の意味が分からず、クレインに質問しようとした。
「これって何を……」
「しっ！」
叱られてしまった。何だか分からないが大事なことらしい。待つこと五分。ソフィアさんは目を開け、立ち上がった。
「どうだ？」
「一応、一か月前まで遡ってみたけれど、それらしい形跡はないわね」

「そうか」
何なんだ。さっぱり分からない。
「えっと、今何をしたんですか？」
「ちょっとね。記憶を覗かせてもらったのよ」
「ということだ、少年。行くとしようか」
「は？」
ソフィアさんに聞き返す前に、クレインが俺の肩に手を置いた。
途端に周囲の景色が歪み、それが収まる時には周りの景色が一変していた。病院の個室だ。目の前には姉貴が寝ているベッドがある。
俺は驚きのあまり、目を丸くして立ち尽くした。ケンも俺たちと一緒に移動して驚いたのか、そわそわと歩き回っている。
「今のは、一体？」
「二つの場の間の空間を縮め、物理的距離を無視して移動できる能力……らしいが、私にもよく分からん」
「分か……。よくそんな得体の知れない力を使う気になれるな」
思ったよりすんなりと受け入れることが出来たのは、俺がトンデモ要素に慣れてきたからだろうか。
「そう思うか？　だが、言ってみればこれは家電製品の使い方は知っているが、どういう仕組みになっているか分からないのと同じことだと思うがね。それに、この力で行ける距離には限界がある上に、使うと私の体力が減る。一度この目で見た場所にしか移動できないという制限もあるしな」
「そういうもんなのか」
万能という訳ではないらしい。なるほど。クレインがいつもいつも突然現れたり消えたりするのは、そういうタネがあったのか。
「私のことはいい。早速作業に取りかかってもらうぞ」
クレインの言葉に、俺の浮ついた気分は現実に引き戻された。ここに来た目的を思い出す。クレインは手袋を外して俺に渡した。
「具体的にはどうすればいいんだ？」
手袋を嵌めながら尋ねると、クレインはコートのポケットから黒

色のケースを取り出して俺に開いて見せた。中に入っていたのはあのメガネだ。それを手に取り、かける。フラッシュのような緑色の光も、三度目ともなるともう気にならない。クレインは入口近くの壁に寄り掛かり、姉貴に視線を送った。

「見てみろ」

クレインの言葉に従って姉貴の方を向くと、姉貴とケンを直径五・六センチほどの太さの緑色の筒のようなものが繋いでいて、しかもそれは全体が姉貴からケンへと流れて行っているようだった。

クレインが問う。

「どんな様子だ？」

「姉貴とケンの間を、パイプみたいなものが繋いでる」

「対象同士が近いからな。密度が高まってはっきりした流れになっているんだ。それを断ち切れば、君のお姉さんを助けることが出来る。その手袋があれば簡単だが、本当にいいんだな？」

「ああ」

もう迷いはない。俺は姉貴と落ち着きを取り戻したケンの間に立った。緑色の筒の中央を握る。流れに思ったより力があって、腕を突っ張っていないと引っ張られてしまう。

俺は数瞬の沈黙の後、腕に力を込め、筒を断ち切った。分かたれたそれは、揺らぎ、空間に溶けるように霧散した。同時にケンが横向きに倒れる。急いで手袋とメガネを外し、ケンに触れようとした時、手に冷たいものが落ちた。それが何なのか分からず、反射的に伸ばした腕が止まった。一瞬、雨かと思ったが、ここが室内だということを思い出す。二滴、三滴と落ちる様を見て、ようやく俺は気が付いた。

そうか。俺は今――

クレインが壁から背を離し、こちらに近付いて来た。

「しょ……」

「来るな」

クレインの足音がぴたりと止まる。今は隣に並んで欲しくなかっ

た。泣いてる顔なんて見られたくないから。
涙が止まらない。頬を伝い、ひとつ、またひとつと病室の床に落ちる。不思議と声は出なかった。どれくらいの時間、そうしていただろうか。涙が止まる頃、俺は動かなくなったケンにそっと触れた。
あれ？　これって。
「寝てるだけじゃ……？」
疑問に思って振り返ると、クレインが口を押さえて忍び笑いをしていた。
「……？……！！」
まさか、騙したのか？　両方を助けることが出来ないってのは嘘だったのか？
「騙したな。両方助かる可能性はないって言ったじゃねぇか」
「可能性がないとは言っていない。方法がないと言ったんだ」
「んなっ……」
そんな理屈があるか。こちとら本気で涙まで流したんだぞ。俺はクレインを怨みがましい目で睨んだ。それを知ってか知らずか、クレインは面白がるような感じで言った。
「いや参ったよ。説明しようとした途端に『来るな』だからな。ん？　どうした？　目が赤いぞ。寝不足か？」
「うぐ……」
この野郎め。分かってるくせに白々しいことを。クレインはつかつかと俺に歩み寄り、肩に手を置いた。
「気にするな。勘違いは誰にでもあるさ」
「……」
周囲の景色が歪む。瞬きをする間に、俺達は病院の前に移動していた。俺達が戻ったことに気付いたソフィアさんが声をかけてくる。
「終わったようね」
「ああ、終わったよ。なんとハッピーエンドだ」
クレインは大仰に両手を広げて言った。
「あら、そうなの？　良かったわね、愁也君」

「はあ、まあ。それはそうなんですけど、何でケンは死ななかったんでしょう？」
聞き返されて、ソフィアさんはきょとんとした表情を見せたが、すぐに俺の困惑の理由を悟ったらしく、ため息をついてクレインを見た。
「クレイン。あなた、どちらも生き残る可能性について話していなかったのね？」
「確証はないんだ。いらぬ期待を持たせることもないだろう」
「どういうことですか？」
未だに理解できていない俺に、ソフィアさんが説明をしてくれた。
「つまり、君の犬の核は一時的な機能不全を起こしていたのよ。何らかの理由でもう回復したようだけど」
「じゃあ、ケンはもう大丈夫なのか」
「いや、不安がない訳ではない。一度あったことだ。二度目がないとは……」
俺の独り言に横から口を挟んだクレインを、ソフィアさんが鋭く睨む。
あ、目を逸らした。
「あ～、ところで、君の犬はしばらく眠ったままなのだが、私が家まで送ろうか？」
話題を強引に逸らそうとしている。魂胆は見え見えだが本当のことらしいので、聞き流すわけにもいかない。
「頼むよ」
俺はケンを抱えた。クレインが俺に近寄り、移動する直前、ソフィアさんが俺の名前を呼んだ。そして。
「ありがとう」
「え？」
次の瞬間、俺は自分の家の前にいては首を傾げていた。
はて、俺は彼女に礼を言われるようなことをしただろうか？
「では少年。これでお別れだ」

「あ、ちょっと待て」
立ち去ろうとするクレインを呼びとめる。ひとつだけ聞きたいことがあった。
「どうしてあんたは俺を選んだんだ？」
クレインは翻しかけた体を止め、鋭い視線を俺によこす。
「さてな。自分でもよく分からん。強いて言えば直感か」
「勘かよ」
適当なその答えに、俺は思わず苦笑した。
「だがまぁ、私の勘は正しかったようだ。君は良い選び方をしてくれた」
「選び方ね。結果が同じなら、選び方に大した意味はないんじゃないか？」
クレインはゆっくりと首を振って言う。
「君はどちらが要らないかではなく、どちらが自分にとって大事かを考えただろう？　その差は大きい。要らないと言われるより、お前は大切だが　自分にはもっと大切なものがある、と言われる方がまだ納得できるだろう」
「……そうか。そうかもしれないな」
そう言われると、なんだか少しだけ心が軽くなった気がする。最後まで残っていた罪悪感がほんの少し、和らいだ。
クレインは俺の様子を見、にやりと笑った後、今度こそ闇に溶け込んでいった。

数日後

俺が家の玄関を出たところで、おふくろから声がかかった。
「愁也。帰ってきたら、ケンを散歩させといてね」
「そんなの姉貴に任せりゃいいだろ。まだしばらく休みなんだし」
「何言ってんの！　深雪は退院したばかりでやることがいっぱい溜まってるの」

「分かったよ。ちゃんとやっとく」
「頼んだわよ。行ってらっしゃい」
「行ってきます」
俺はケンの頭を軽く撫でてから、学校へと向かった。

「おーっす！　おはよう！」
通学の途中で、信護に声をかけられた。相変わらず朝から元気だな。
「おう。おはよう」
「なぁおい。もうすぐあれだぜ？　バレンタインデーだぜ？　今年こそ速人にリベンジしてやる！」
「はいはい、勝手に言ってろ」
「うわ、冷てえなーお前。そういう時はもっとこう、『がんばれよ』とか励ましの言葉を送るべきだろうが！　お前は俺に勝って欲しくないのか！？」
「いや、むしろ負けて欲しい」
そして諦めろ。つーか、そもそもそんなもんで競うな。
「言ったな！　よし、俺は決めたぞ。たとえお前が一個も貰えなくても絶対に分けてやらねえと」
「別に、んなこと頼んだ覚えはないぞ」
「おはよう。なんか楽しそうだね」
速人が合流した。
「おはよう。速人、これが楽しそうに見えるか？」
「信護は楽しそうだよ」
「……」
「ふふん。速人！　今年こそお前に勝ってやるからな。覚悟しとけよ」
「何のこと？」
「気にすんな」
「あ！　おはよー！　杉村君」

校門をくぐろうとした時に、雨宮が向こうから走ってきた。
「おはよう。雨宮」
俺達は四人揃って校門をくぐった。
嘘のような数日間を経て、俺は何事もなく日々を過ごしている。
恐らく、俺は今回の出来事を一生忘れないだろう。制服の胸ポケットには、クレインから貰ったネックレスが今も入っている。
俺はそっと、胸ポケットに手を添えた。

俺はもう逃げない
たとえそれが愚かだと言われても
だって俺は――

第一話　了

画家と黒猫：1

第二話　画家と黒猫

二月十四日、バレンタインデー。
皆が特別な日だと浮かれているが、俺にはあまり興味がない。それより、俺が気になるのはこの状況だ。
場所は公園。人の少ない今なのに、何故か俺達は隅っこの茂みに身を潜めている。そして覗く先には雨宮と見知らぬ男子。
「なぁ、もう帰らないか？」
俺は隣にしゃがむ信護に抗議の声を上げた。
「黙らっしゃい！　今逃げることは許さん」
「いや、逃げるとかじゃねえから」
「でも、やっぱり気になるよね。あの男の子が誰なのか。愁也は気にならないの？」
俺の斜め前に片膝をついている速人が首だけ振り向いて言う。
「別に。それに俺は無理矢理つれてこられただけだしな」
俺はここに至るまでの経緯を思い起こす。
何故こんなことになったのか？
それを説明するには、時間を三十分ほど遡らねばなるまい。

三十分前

ＨＲが終わり、荷物を持って教室を出た俺は帰ろうと玄関に向かった。教室を出てしばらく歩いたところで、背後から肩を叩かれた。誰だろうと振り向くと、そこには極上の笑みを浮かべた信護がいた。気持ち悪いぐらいにこにこ笑いながら、俺に尋ねてくる。
「よっ！　どうだった？」
「どうって、何がだ」

「決まってんだろ。チョコだよ、チョコ。何個もらったんだ？　ん？」
言われて思い出した。そういえば今日はそういう日だったな。
「お前はどうなんだよ」
「俺か？　俺は……」
勝ち誇ったようにふふんと笑い、後ろに回していた手を俺の目の前にさらす。手には大きな紙袋が。中身は言わずとも分かる。
「……」
こいつ、見た目はいいし、性格も明るいからそこそこモテるんだよなぁ。それを羨ましいと思ったことはないけど。
この場合、俺はどう反応すればいいのだろうか。確かにすごいことはすごいのだが、恐らくこの上をいくであろう人物を知っているだけに素直に驚くことが出来ない。
俺の無反応を誤解して信護はまくし立てる。
「お？　その顔は一個も貰えなかったな？　残念だが、お前にあげる気はないからな。期待しても無駄だぞ」
「いらねえよ」
まだ根に持ってたのか。意外としつこいな。いい気になって語りかけてくる信護を無視して歩きだそうとした時、こちらに歩いてくる速人が見えた。
「よう。速人」
俺が声をかけると、速人はわずかに足を速めた。カバン以外なにも持っていない速人を見て、信護が嘲るように言った。
「はっはっは。どうやら君もチョコは貰えなかったようだね。今回こそ、俺の勝ちだな」
「チョコ？　ああ、さすがに段ボール丸々一個分は持って帰れないから、先に車で持って帰ってもらったけど」
「そんなバカなっ！！」
信護はものすごいショックを受けたようだ。三コマ送りでがくりと膝をつき、凄まじい勢いで落ち込んでいる。信護の周りだけ空気

が煤けて見えるほどだ。
ああ、それで速人は玄関の方から歩いて来たわけか。
「あ、そうだ。愁也、さっき玄関で雨宮さんが他校の男子に誘われてたよ？」
見事なまでに信護を視界から消し去って俺の方を向く速人。
「なんで俺に言うんだよ」
すると先ほどまで絶望に打ちひしがれ、うなだれていた信護が勢い良く起き上がった。
「なんと！　それは一大事だ。よし、行くぞシュウ！！」
「お前……さっきまですげー落ち込んでただろうが」
何なんだ、その立ち直りの早さは。
「んなこたーどうでもいいんだよ。急げ、見失っちまうぞ！」
「別にいいじゃねえか。雨宮の勝手だろ。俺らが気にすることじゃねえって」
「かーっ！　このバカヤロウ！」
興奮した信護が、素早く俺の真後ろにまわるとヘッドロックをきめてきた。
「面倒だ。このまま連行していこう」
「はあ！？　てめ……」
「あんた達、なに廊下でじゃれあってんの？　早く帰んなさい」
そこへ偶然通りかかった小林先生が注意してきた。信護の腕が緩む。チャンス、と思った瞬間、ヘッドロックは流れるような動作で羽交い絞めに移行した。すかさず速人が口を開く。
「愁也がですね、自分の彼女が見知らぬ男子生徒に誘われてるから、様子を見に行くって言ってきかないんですよ」
「な……」
速人、お前まで！？
それを聞いた小林先生はあろうことか、ぱっと顔を輝かせやがった。
「あらそう！　それじゃあ放っとけないわね。行ってらっしゃい」

いやいやあんた、そこは止めてくれよ。嬉しそうにしてないで。
「はい！　行くぞ、速人」
「おい！　俺は何も……」
「失礼しまーす」
俺はずるずると引きずられていった。がっちりと捕らえられて全く抵抗できない。
ちゃんと私に報告しなさいよー、という無責任ティーチャーの声を聞きながら、俺はもうどうにでもなれと思った。

そして現在

不本意ながらこの二人に付き合っているわけだ。ほんと、たいした野次馬根性だよな。はぁ、とため息をつきながら、俺は改めて前方のベンチに目を向けた。
「あれ？　あいつ、どっかで見た気がするな」
「マジ？　いつ？　どこで？」
「んー……んー？」
「無駄だと思うよ？　愁也って人の顔とか憶えられないから」
「そうだなー。聞いた俺がバカだったか」
「憶えてないのは本当だけどな、その言い方はないんじゃないのか？」
「つーか、こっからじゃ何話してるか分かんねー」
「聞けよ。……しょうがねえって。ここしか隠れる場所がないんだから」
「まだ肝心な話にまではいってないみたいだね」
「何？　お前、聞こえんの？」
「聞こえないよ。ただの読唇術」
「ほう。ここから口の動きまで見えるのか」
「へー。お前目ぇ良いな……じゃなくて！　読唇術！？　お前そんな技術もってたのか？」

「あれ？　知らなかった？」
「初耳だよ……」
「そういや声マネも出来たよな。速人って」
「プライバシーも何もあったもんじゃないな」
「なんだ？　聞かれて困るような会話をしているのか？」
「そうだぞ。やましいことが無いなら平気だろ」
「そういう問題じゃ……って、ちょっと待て」
今変なの混ざってなかったか？
一斉に振り向いた俺達の後ろにしゃがんでいたのは。
「やあ少年。奇遇だな」
にやりと笑って片手を挙げるクレインだった。

画家と黒猫：2

いつの間にか現れたクレインに、俺はまだしも初対面の二人は完全に虚を突かれたかたちになった。当然、知り合いらしき俺に質問が来る。

「知り合いか？」

信護が横目で聞いてきた。ここは曖昧な返事でごまかしておこう。まさか、ありのままを話す訳にもいくまい。

「ああ、ちょっとな」

「この前、道に迷って困っていたところを助けてもらったんだ。こんな所で会うとは思いもしなかったがな」

この説明にすんなりと二人は納得してくれた。

今日のクレインはいつものコート姿ではなく、キャップを目深にかぶり、パーカーにジーンズという、いたって普通の格好だった。あの革手袋はしていないが、代わりに何やら四角い黒い物体を手に持っていた。さっきから何度も口に運んでいる。

「それは？」

「チョコだ。あそこに置いてあった」

と言って、傍に置き捨てられた紙袋を指差す。指の先を目で追った信護は、一拍遅れで慌てて叫んだ。

「俺のじゃん！！」

「それより、いいのかね？　あちらの会話が進んでいるようだが」

「はっ！　そうだった」

信護、いいように操られてるぞ。

俺も続いて振り返ると、他校の男子が雨宮に長方形の紙を渡すところだった。

「まとめると、あの男子が不良にカラまれた時に、雨宮さんが助けに入ったらしいね。で、そのお礼にチケットをプレゼントしたと」

速人が解説した。目、離さなかったんだな。相変わらず驚きから

の立ち直りが早い。
「あ」
そうだ。思い出した。あれ、鼻ピアスと金髪の二人組にカラまれてた奴だ。
「あれ？　向こうから誰か来るよ」
思い出した様子の俺に問いかけようとした信護も、説明しようとした俺も、速人の言葉に公園の入り口へと視線を向けた。
入口で公園内を見回しているのは、ウチの学校の制服を着た女子だった。雨宮を見つけると一直線に向かって行く。大股で肩を揺らして歩く様子を見ると、どうやら怒っているようだ。
あの人物には覚えがある。
「あいつ、確か桐島朱音（きりしまあかね）」
「お？　シュウが人の顔を正常に記憶しているとは」
大げさに驚く信護。さすがに俺は憮然として押し黙った。
お前、俺をなんだと思ってるんだ。
俺が桐島を憶えていたことには相応の理由がある。あの出来事が無事に解決してすぐに、雨宮が友達だと言って俺に桐島を紹介したのだが、初対面だというのに明らかに俺を見る目に敵意がこもっていた。何故かは分からないが、一方的に嫌われて憶えていない方がおかしい。
桐島は座っている雨宮の手を取り、公園の端へと引っ張っていった。何がなんだか分かっていない男子を置き去りに、何事かまくし立てている。
「何がどうなってんだ？」
「さあ……分からねえ」
事情が呑み込めない俺と信護は頼みの綱である速人の解説を待った。しばらくやりとりを見守っていた速人は、そのままの姿勢で簡潔な説明を始める。
「桐島さんは、自分に黙って目的も分からない男について行くな、と主張してるみたいだね」

「保護者かよ、あいつは」
俺の声に呆れが混じる。まあ、言いたいことは分かるが、あそこまで激怒することか？
と、思っていたら、いきなり横の茂みがガサガサと音を立てた。驚いて音のした場所を注視すると一匹の黒猫が気だるそうに茂みから現れた。くぁ、とあくびをしながら俺達の間を通り過ぎていく。それを追って一人の青年が茂みをかき分けてきた。まさか人がいるとは思っていなかったらしく、目を丸くして俺達を順々に見る。それから不思議そうに尋ねてきた。
「君たち、ここで何をしてるんだい？」
「え、あー、いや、俺達のことはお気になさらず」
「特に意味はないっスから」
この状況は非常にマズイ。ここで会話が長引くと、まず間違いなく隠れていることがバレる。
一見すると大学生風の青年は、俺達に興味を持ちながらも、別のものを探しているようだった。
「何かお探しですか？」
「あ、ああ。猫がどっか行っちゃってね。見てないかな？　黒猫なんだけど」
「それならあっちに歩いていきましたよ」
「そうか。ありがとう」
速人の対応により難を逃れたとほっとした瞬間、歩き出した青年が木の根に躓いて体勢を崩した。あっと声を上げる間もなく、青年の頭と信護の頭が激突した。ごっと鈍い音がし、
「イッ……デェー！！！」
信護の悲鳴が公園内に響き渡る。
ダメだ。これはいくらなんでも気付かれたな。
恐る恐る前方に顔を戻すと、桐島と雨宮が驚いた顔でこっちを見ていた。隠れていても仕方がないので、俺達は茂みから出て行く羽目になった。

桐島の顔に再び怒りが浮かぶ。なまじ顔がいいだけに、凄むと思いのほか迫力があった。敵意がひしひしと伝わってくる。
「あんた達、そこで何してたのよ？」
「あ～、痛っ。さっきので骨にヒビが入ったかもしれん。という訳で、病院で精密検査してくるぜ！」
「それは大変だね。誰か付いていかないと。ってことで僕もこれで」
二人は早口で言うとあっという間にいなくなった。気付いたら、クレインも他校の生徒もいない。
これは……取り残された？
うすら寒い空気が漂う。俺としては、拉致まがいのことをされてここに強制的に連行された旨を説明したいのだが、今さらそれを説明したところで事態の好転はのぞめないだろう。
煮え切らない態度をとる俺に、桐島が軽蔑を込めて言い放った。
「陰からこそこそのぞき見なんて最低ね。行こう、碧」
「え？　でも……」
「いいから！」
戸惑う雨宮を連れて公園を出ていってしまった。弁解がある訳でもない俺は黙って見送るしかない。
立ち尽くす俺に、先ほどの青年が近寄って来た。少なからず負い目を感じているようだ。何か言おうとしたのだろうが、なんと言っていいのか分からなかったのだろう、口を開いたり閉じたりを数回くりかえして、最終的にこれだけ言った。
「大丈夫かい？」
「いや、そっちこそ。ものすごい嫌な音しましたよ」
「大丈夫。最近しょっちゅうだから、慣れてるんだ」
「はぁ、そうですか」
青年の傍らには、あの黒猫がぴったりと寄り添っていた。すごくなついている。青年ははにかみながら、自己紹介をした。
「僕は新垣進。君の名前は？」
「杉村愁也です」

「すまなかったね。邪魔して」
「気にしなくていいです」
この場合、新垣さんに非は無い。頭突きをかまされた信護はもう逃げてしまったし。ってか、あのヤロウ、よくも俺を囮にしやがったな。覚えてろよ。
新垣さんは、じゃ、僕はこれから用事だから、と言って近くのベンチに置いてあった荷物を担いだ。
「何ですか、それ？」
「絵を描くための道具だよ。これでも画家の端くれだから」
全然売れないけどね、と照れくさそうに付け加えた。良い人そうだな。どこか独特だけど。
「用事があるんじゃ……」
「ああ、そうだった。それじゃ、僕はこれで」
いそいそと新垣さんは去っていった。
……はぁ。
なんか、この静寂が虚しい。
「今日も冷えるな。そうは思わないか？」
いつの間にか、俺の隣にさも当たり前のようにクレインが立っていた。
「……ああ、寒いな。別の意味で」
というか、俺を驚かそうとして例の力を無駄遣いするなよ。誰かに見られたらどうするんだ。
「どこに行ってたか知らないけど、ここに来たのは偶然じゃなさそうだな。俺に用でもあるのか？」
戻ってきたクレインは、厚手のジャンパーを着ていた。
それ取りに行ってたのかよ。
「ここに来たのは用があったからに違いないが、少年にあったのはあくまで偶然だ」
「そうなのか？」
クレインは頷く。顔にはあの皮肉めいた笑みを浮かべている。

「たまたま少年を見かけてな、これはりよ……協力してもらわない手はないと思って声をかけたわけだ」
今利用って言いかけたよな？　間違いなく。
「協力って、どういうことだ」
俺の問いに、クレインの顔から笑みが消えた。

画家と黒猫：3

「ん～、どうするかな」
昼休み、俺は財布を片手に迷いに迷っていた。
一体何に迷っているのかというと。
「焼きそばパンとカレーパン、果たしてどっちにするべきか」
「迷うぐらいなら両方買っちまいなよ」
購買部のパンコーナーの前で唸る俺を見かねて、カウンターからおばちゃんの声が飛んできた。いつまでも悩んでんじゃないよ、という顔をしている。
「……じゃあ、両方ください」
料金を払い、しかめっ面のおばちゃんの視線を浴びながら購買部を後にする。しばらく歩くと一組の教室の前に差しかかった。購買部は廊下の端、それも一組側にあるので、二階を経由しない限りこの教室の前を通らなければたどり着けない。
確か桐島も一組なんだよな。昨日の出来事が思い出されて通りづらいことこの上ない。一気に通り過ぎてしまおうと足に力をいれた時、一組の扉が勢い良く開き、人影が飛び出してきた。不機嫌な表情の桐島は、俺を目の端に捉えるとぶっきらぼうに聞いてくる。
「碧、どこ行ったか知らない？」
「いや。見てないな」
恨み事の一つでも言われるかと覚悟していたが、桐島は無言で立ち去った。すたすたと早足で廊下の奥へと消えていく。俺は気を取り直して歩き出した。一分もしないうちに自分の教室の前まで来ると、桐島が突き当りの角を曲がっていくのが見えた。安堵の息が自然と漏れる。一方的に嫌悪感を持たれるのは、思ったよりもストレスが溜まるものだ。ため息をつきながら扉を開く。
教室には数人の生徒しか居なかった。大体この時間は、ほとんどの生徒が食堂へ行ってしまうのだ。食事は一人でとりたい派の俺は

滅多に行くことはない。信護と速人と俺の三人で食べるのが常だが、昨日の今日でそんなつもりは無かった。朝から二人とは口を聞いていない。そろそろ何らかのアプローチがある頃だろう。
案の定、俺の姿を確認した信護がそそくさと近寄って来た。
「や、やぁ。昨日は悪かったな。だ、大丈夫だったか？」
「桐島に最低とののしられた以外は概ね平気だ」
「何か頼みがあるなら言ってくれ、何でもするから」
「そうか。なら少し黙っててくれると助かる」
「ごめんなさい」
信護が沈黙したところで速人が口を開く。昨日のことなど全く気にしていない様子で。
「ところで、桐島さん見なかった？　さっきここに来てたけど」
「あいつなら角曲がってどっか行っちまったよ」
「そう。良かった。……もう出てきても大丈夫だよ」
後ろを振り向いて言う速人。誰に向かって言ってんだ、と疑問に思う間もなく、掃除用具入れが開き、その中から雨宮が出てきた。
なんでそんなとこに？
「っていうか、よくそんな狭いとこに入ったな」
率直な感想が口をついて出た。雨宮は俺の言葉に苦笑いを浮かべながら傍まで寄って来た。
「こうでもしないと、朱音ちゃんに連れ戻されちゃうから。昨日はごめんね。事情も聞かないで帰っちゃって。神田君に話を聞いたら、誤解だったみたいだし」
「それなら気にしてねえよ。見てたのは事実だからな」
俺が気にしているのは、無理矢理つれてったくせにやばくなったら俺を囮にして逃げる、というこの二人の行動のことだ。
「わざわざそれを言いに来たのか？　そこまでしなくても良かったのに」
言いながら、俺の視線が掃除用具入れに向き、雨宮に戻る。
「そうだ！　これを渡しに来たんだった。はいこれ」

思い出したとばかりにスカートのポケットから紙切れを取り出して俺に渡す。細長い紙には『長谷川京介絵画展』と書いてあった。日付は、来週の日曜か。
「せっかくタダで貰ったんだけど、私、来週は用事があって行けないから。よかったら使って」
「……」
絵画。昨日知り合った新垣さんも絵描きだと言っていたな。俺はクレインとの会話を思い出した。

「新垣さんが？」
「ああ、そうだ。今回の対象はあの青年だ」
「だけどあの人、姉貴と違って普通に生活してるじゃねえか」
「君のお姉さんは特殊なケースだ。多くの場合、本人には何の自覚症状も現れん。あってせいぜい体のだるさや目眩程度。気を失うなんてことは稀なんだ」
姉貴の例しか知らない俺にとって、これは驚きだった。皆が皆、あんな風になるわけじゃないのか。
「まあそれは、無意識の内に君のお姉さんが気の消費を抑えたからだがな。仮死状態になって生命力の消費を抑えるなど、信じられないことをするな、君のお姉さんは」
「それ言ったら姉貴は喜ぶだろうな」
姉貴は昔から無茶をする方だ。通っていた高校でも色々とやらかしたらしいが、詳しくは知らない。
「それでだ。君に協力して欲しいのは、事情説明の際に証人になってもらいたいということだ。どうだ？　引き受けてくれないか？」
イヤだと言ったら例の能力で山奥に置き去りにすると脅されたので、仕方なく引き受けた。あのオッサンならやりかねない。って、あー、思い出したら腹が立ってきたぞ。
「やっぱり、迷惑だった？」

「あ、いや、そうじゃなくて。ありがたく受け取っとく」
表情に出てしまっていたようだ。勘違いした雨宮が不安げに聞いてきた。俺自身、芸術には疎いのだが、姉貴はそういうのが好きだった筈だ。
「早くしないと朱音ちゃんが戻ってきちゃうからもう行くね」
「ああ、大変だな、雨宮も」
そんなことないよ、と言って教室を出て行った。
「ところで速人。雨宮になんて説明したんだ？」
「ん？　帰り道に公園の前を通ったら、桐島さんが怒って入っていったから様子を見に行った、って説明したよ」
……コイツ、たまにさらっとウソつくよな。

時は流れて放課後、まだ人の残る教室。その一角に二人はいた。速人は自分の席に、信護はその隣りの机に直に座っている。
「さすがにシュウの奴、怒ってたな」
「そりゃあそうでしょ。あれで怒らない筈がないよ」
「むう、心の狭いやつめ」
「その言葉、明日愁也に伝えてあげようか？」
「やめれ！　俺死ぬからそれ」
「はは、そんな大げさな」
「いやマジで」
二人が雑談していると、教室の扉をそろそろと開き、碧が顔を覗かせた。二人がいたことに安心したようだが、二人しかいないことに戸惑っているようだ。
「杉村君は？」
「シュウなら用事があるからって先に帰ったぞ」
「愁也に何か用？」
「あ、じゃあ…」
碧は言いかけて、やめた。
「やっぱり何でもない。気にしないで」

と言ってあっさり立ち去ってしまった。残された二人は顔を見合わせる。
「そういや、雨宮さん、シュウにチョコ渡したのか？　俺ら昼休みにもらったよな」
「渡してないっぽいね」
「まさか、忘れてたり？」
「それはさすがに……」
「ない……よな？」
ははは、と乾いた笑いが教室に響いた。

画家と黒猫：4

「君は貰ったのかい？　チョコレート」
「いえ。全く」
俺の返答に、新垣さんはスケッチブックを走らせていた鉛筆を止め、意外そうに訊いてきた。
「本当に？　少しくらい貰ったんじゃない？」
「そんなことありませんよ。新垣さんは？」
「僕？　貰ったと思う？」
「……いえ」
俺は迷った末、正直に答えた。新垣さんは苦笑し、言った。
「はっきり言うね。その通りなんだけどさ」
「すみません」
気を悪くしたかと思ったが、新垣さんは、いいんだよと言ってスケッチブックに向き直った。
シャッシャッという鉛筆の音を聞きながら、俺は改めて公園内を見回した。幼稚園児が四・五人、無邪気な声をあげながら広場を走り回っている。少し離れたところには母親らしき人たちが集まり、世間話に花を咲かせていた。
俺はクレインにここで待っているように言われた。大まかな話はもう新垣さんにしておいたらしい。新垣さんはベンチに座り、子供たちの様子をスケッチしている。俺はその横に立って、後から来た新垣さんに昨日の顛末を説明していたところだ。ちらりとスケッチブックをのぞくと、子供たちの笑顔が生き生きと描かれていた。よくもまあこうやって、動くものを絵に捉えられるなと感心していると、新垣さんの表情がふっと翳った。
「本当は、何も考えずにこうして絵を描いていられたらそれが一番なんだけどね。バイトがあるから、なかなか時間が取れなくて」
「大学で描いたりしてないんですか？」

「大学は通ってたけどやめてしまったよ。途中で絵を描くのが苦痛になってきてね。そのうち全く描かなくなってそのまま……」
「ご両親はそれについて何も？」
鉛筆の音が聞こえなくなる。新垣さんは首を振った。
「僕の両親は、僕が小さい頃に他界したよ。身寄りが無かったもんだから、孤児院に預けられた。今は自立して一人暮らし。バイトしながら絵を描いてるんだけど、あんまり売れてなくてね」
何でもないことのように言って笑ってみせたが、並大抵の苦労ではなかっただろう。俺は何も言えなくなってしまった。気まずくなりかけた空気を払拭するように、新垣さんはことさら明るい声を出した。
「いや、悪かったね。つまんない話しちゃったな」
「こっちこそ、立ち入ったことを訊いてしまってすみません」
そしてしばらくの沈黙。それを打ち破ったのは、どこからか聞こえてきた猫の鳴き声だった。たしたしと足音を立てながら、横手から歩いてくる。そのまま新垣さんのところへ行くのかと思ったら、俺の後ろに回り込み、ぴょんとその場で跳躍してから新垣さんのもとへ。口には何か細長い紙切れをくわえていた。新垣さんはそれを受け取り、書かれている文字を読み上げた。
「なんだろ。え～と『長谷川京介絵画展』？」
「あ」
俺は慌てて尻ポケットに手を当てた。ここに押し込めてすっかり忘れていたのだ。俺の様子を見た新垣さんが、チケットをこちらに見せる。
「これ、君の？」
「はい。友達から貰ったんですけど、この人って有名なんですか？俺、そっち方面はてんで分かんなくて」
新垣さんの視線はチケットに注がれていた。俺の質問も、聞こえているかどうか分からない。
「あの……」

「え？　ああ、そうだね。すごく有名な人だよ」
我に返ったように俺に目を向けるが、新垣さんの腕が動く気配はなかった。
「興味あります？　それなら新垣さんが使って下さい」
「いいのかい？」
新垣さんは、嬉しいけれど気が引けるといった感じの表情だった。
「俺が見ても分かんないと思いますから」
「ありがとう」
ズボンのポケットにしまい、足元にいる黒猫を抱き上げる。膝の上にのせて喉を撫でてやりながら、聞こえるか聞こえないか程度の声で呟いた。
「無駄になるかもしれないけど、ね」
先ほどまでの新垣さんの口調と違い、それはいささか自嘲気味に聞こえた。多分、独り言だろう。俺は聞こえなかった振りをした。
黒猫は、新垣さんの膝の上で気持ち良さそうにしている。首輪を着けていないところを見ると、どうやら野良猫のようだ。
「ずいぶん懐いてますね、その猫」
「うん。こうなるまで結構苦労したんだよ。僕はクロと呼んでる」
クロの相手をしている新垣さんは、とてもリラックスしているように見える。
それにしても、見た目通りの名前だな。
「やっぱり黒猫だからですか？」
「それもあるけどね。ほら、これ見てみなよ」
新垣さんは俺と反対側を向いていたクロを持ち上げ、俺の方を向かせる。ガラス玉のような目が俺を見た。新垣さんはクロの眉間の辺りに人差し指を当てた。
「ここにバツ印の傷があるだろ？」
言われてみると、確かに×の形の傷がある。
「なるほど」
クロスをもじってクロ、ということらしい。新垣さんは懐かしむ

ような目になった。
「たまたまこの公園で見かけたんだ。ちょうど僕はその時、大学をやめてその日暮らしだったから暇だった。貯金も少しは残ってたし。絵を全く描かずに過ごしてたんだけど、珍しい傷だなって思ったら、なんか無性に絵にしたくなった」
クロを元の位置に戻しながら、新垣さんは苦笑した。
「でもねー、全然じっとしてくれないんだよ。記憶だけで描く方法もあったけど、意地になっちゃって。で、僕がどうしたかっていうと、どうにかして気を引こうとしたわけだ。大の大人がエサとかボールとかを使ってさ」
それは想像するとおかしな光景だった。意識しなくても自然と頬が緩んでしまう。新垣さんは続けた。
「自分から近付いて来てくれた時は嬉しかったな。気が付いたら、それまでの脱力感が綺麗に消えてた。もうちょっと頑張ってみようって気になれたんだ。だから、クロは僕の恩人になるのかもしれないな。いや、恩猫、かな」
聞いたことがある。動物と触れ合うことで病んだ精神を治療する方法。確かアニマルセラピーとか言ったな。
「聞いてるだけで温かい気持ちになりますね」
「いや、なんか恥ずかしいね。自分で言っといてなんだけどさ」
でも、と心の中で思う。俺がクレインに聞いた話では、そのクロが今まさに新垣さんの命を削っているとのことだった。
皮肉なものだ。救ってもらった存在から、少しずつ殺されていくというのだから。新垣さんはそれを既に知っている筈なのに、むしろ誇らしげにクロの話をしてくれた。それは、真実この黒猫を大切に思っているからなのだろう。
猫は死期を悟ると姿をくらますというが、野良猫であるクロが新垣さんの元を未だに離れていないのは、自分が生きるためなのか、それとも新垣さんとの絆の証なのか。後者であってほしいと願わずにはいられない。

夜の気配が近づいてくるにつれ、公園内の人影がだんだん減っていく。もう少し時間が経てば、完全に俺と新垣さんだけになってしまうだろう。
クレインはまだだろうか。
「君、帰らなくていいのかい？　僕はここで人を待ってるんだけど」
ん？　あれ、俺のことをクレインから聞いているんじゃないのか？
「聞いてないんですか？」
「何をだい？」
怪訝な顔をする新垣さん。俺のことはどうやら聞いていないようだ。まったくあの男、話くらい通しとけよ。
「面倒くさいとか思ったんじゃないだろうな、あいつ」
「失敬だな。そんな理由ではないぞ」
俺の言葉を否定しながら、最重要人物は姿を現した。
「遅えぞ、オッサン。どんだけ待たすんだよ」
「この前さんざん私を待たせてくれたのはどこの誰だったかな？」
「うっ……」
返り討ちにされてしまった。いや、それでも。
「いつでもいいって言ったのあんたじゃねえか」
「という訳で、この少年が前に話した証人だ」
「無理矢理まとめようとすんな」
俺は黒づくめバージョンのクレインを睨んだ。どうやらこっち関係の時になると黒づくめになるらしい。ポリシーでもあんのかな。
「そうだったのか……君が」
「一応言っときますけど、この人の言ってることは本当ですよ」
「一応ではなくきちんと説明してくれ。そのためだけに呼んだんだ」
そして待たせたのか。いい度胸だ。早くしろという目で見てくるクレインだけでなく、新垣さんも説明を求めているようだったので、俺は順を追って説明をした。
ケンが姉貴の生命力を吸っていたこと、俺が最後には姉貴を選んだことなど。新垣さんは横やりも入れず、黙って聞いていた。

ちなみにクレインの能力は伏せ、どちらも生き残ったのは奇跡に近いということを申し添えておいた。俺にだってそのくらいの判断力はあるし、何より力を使った場面になるとクレインの視線が痛いくらい突き刺さってきたからな。

「と、いう感じなんですが、やっぱり信じられませんか？」

「……いや、信じるよ。君が嘘をつく人間じゃないことは分かっているし、それに、実を言うとね、最近体がだるくてしょうがないんだ。病院に行ったら体は健康そのものだって言われて、変だなとは思ってたんだ」

それから、新垣さんは正面に立つクレインの顔を見上げて言った。

「少し、時間をくれないか？」

「どれくらい欲しい？」

「一時間……いや、三十分でいい」

「分かった」

クレインはくるりと踵を返し、すたすたと歩き出した。大人の会話（？）についていけず、クレインと新垣さんを交互に見ていた俺は、最終的にクレインの後を追った。

画家と黒猫：5

夜の七時過ぎ。学校が終わったのが四時を少し過ぎた頃だから、俺は三時間近く待たされたことになる。

「その割にちょこっと説明しただけで終わりか。バラエティー番組に数分だけ出演する出オチ芸人の気持ちが分かった気がする」

「そうむくれるな。これにはちゃんと理由があるんだぞ」

「むくれてねーよ。理由ってどんな？」

俺に背を向け、自販機に硬貨を入れるクレインに胡乱げな視線を送る。もしもふざけた理由だったら、背骨に正拳突きを食らわせてやる心積もりだ。殺意を込めて。ボタンを押そうとした手を止め、クレインは言った。

「良さそうな映画が……」

問答無用で正拳突きを繰り出したら鮮やかにかわされた。突き出した拳がボタンに届く。四桁の数字が見事に揃い、「もう一本選んでね」という音声が流れた。

「……これは待たせたお詫びということで」

「要るかっ！！　今明らかに、ちょうどいいや、みたいなこと思ったろ！」

「そんなことはないさ」

全く悪びれた様子がない。怒る分だけこちらが疲れるので、俺は諦めて話題を変えることにした。

「たった三十分で答えなんか出せんのかな。新垣さん」

「時間をかければいい答えが浮かぶ、というものでもないがな」

命を選択するんだ。どちらかを選ぶしかないと頭では分かってても、キツイことに変わりはない。

「今回は猫か。俺の時と似たような感じだな。選ぶのが当事者っていう違いはあるけど」

「前にも言ったが、君の場合は特殊なケースだ。本来ならば当事者

に決定させる」
「まあ、当事者が意識不明じゃ選ばせようがないよな」
「そういうことだ」
クレインは口元に持っていきかけたコーヒーの缶（結局、二本目はクレインが選んだ）を途中で止めて、す、と目を細めた。暗闇にある何かを透かし見るかのように。声をかけることが憚られるほどに、張り詰めた表情だった。
「ただ、奇妙な点があるにはある。あの新垣という男、生命力を吸い取られているというよりは、むしろ自分から与えているような印象を受ける。もしかすると……」
確かにそれは少しおかしい。俺の件でクレインは、この現象に個人の意思は働かないと言っていた。当事者の意思が働かないというのなら、考えられることはひとつ。第三者の存在だ。誰かが意図してこの状況を作り出したとしか考えられない。不可能ではない筈だ。断ち切ることが出来るのなら、逆もあり得る。だが、分からないのは誰がそれをやったのか、そして何の目的があってそんなことをするのか。
クレインが唸った。
「こんなことならソフィアを呼んでおくべきだったな」
「ソフィアさん、この街にいるのか？」
「いや、理由は知らんが、この街にはいたくないらしい」
「……」
「彼女には彼女なりの事情があるのだろう」
そう言ってクレインはコーヒーを一気に飲み干し、何メートルか離れた場所にあるゴミ箱に向けて空き缶を放り投げた。空き缶は放物線を描いて、吸い込まれるようにゴミ箱に収まった。
「さて、決まったようだな」
クレインの視線を追うと、クロがこちらに歩み寄ってきていた。一声鳴いてから、後から来た新垣さんのもとへ引き返していき、新垣さんの脇にぴたりとくっつく。それに一瞬目を向けた後、新垣さ

んは口を開いた。
「一つだけ、いいかな？　このままだと僕はどれくらい生きていられるんだい？」
「個人差はあるが、長くて一週間だな。考える時間が欲しいのなら、あと一日くらいは待ってあげられるが？」
「いや、その必要は無いよ。僕はこのままでいい」
「泣かせる話だ。その黒猫のために死を選ぶと？」
「……」
クレインの皮肉めいた質問に、新垣さんは黙って首肯した。
俺は、なんとなくこの答えを予想していた。確信も確証も何も無かったが、そんな気がしたのだ。当たって欲しくはなかったけれど。
俺の視線に気付いた新垣さんは困ったような、弱々しい笑みを浮かべた。
何で……笑えるんだよ。死ぬって分かってるのに。
「そんな顔をしないでくれ。君が気に病むことはないんだから」
よほど俺が複雑な表情をしていたのだろう。
俺は何も言わなかった。
その場から動こうとしない俺の肩に、クレインが片手を置いて言った。
「行くぞ、少年。彼が納得して決めたことだ。口を出すものじゃない」
肩から手が離れていく。
そうなのかもしれない。
新垣さんはクロに救われたと言っていた。ならば、新垣さんがクロを救いたいと思うのは自然なことなのかもしれない。
俺に何が出来るというのか。
昨日今日会ったばかりの俺に。
彼の何が分かる？
分かるはずがない。
そんな俺が。

彼に何を言うんだ？
それは頭では分かっているはずなのに。
俺は目を閉じた。
拳を握りしめ、自分に言い聞かせた。
口を出すな。
口を出すな。
口を出すな。
口を出すな。
口を出すな。
口を出すな？
そんなこと――
「ちょっと、待てよ」
出来る訳ないだろう。
クレインが足を止めた。新垣さんも俺に視線を戻した。俺は目を開け、握った拳から力を抜き、新垣さんを正面から見据える。
「新垣さん、あんた本当にクロのために死ぬつもりか？」
「そうだよ」
「こんな言い方をするのは酷かもしれねえ。けどな、クロはもう寿命を終えたんだ。それでもあんたは身代わりになるってのか？」
新垣さんの瞳がわずかに揺れる。
「そうさ。僕はクロのおかげで立ち直れた。今度は僕がクロを助けたいんだ。それの何がいけない？」
だんだん新垣さんの声に余裕がなくなってくる。
「あんたがクロのために何かしてやりたいと思ってるのは分かってるさ。でも、本当にそれだけか？」
「どういう……意味だよ」
俺は新垣さんから視線を外さない。
「俺には、あんたが理由を求めてるように見えるんだよ。これなら自分の命を使っても仕方がないって、そう言い聞かせるための理由をあんたは欲しがってる」

「違う！　僕は本当にクロのためを思って……」
「あいつが可哀想だな」
「……何？」
俺は一歩踏み出した。新垣さんは俺の行動に怯んだようになりながらも、俺を睨み返してきた。
「誰かのためにとか、もっともらしい理由があったとしてもだ。自分で自分を殺すことに変わりはないんだよ」
言いながら、俺はさらに新垣さんに近づく。新垣さんの喉がごくりと鳴った。俺はほとんど目と鼻の先にまで歩を進めた。
「本当にこいつに感謝してんだったらな――」
足もとのクロを一瞥する。
「人殺しの理由にこいつを使うなよ……！」
「そ、れは……」
違う、とは言い切れず、新垣さんは黙りこんでしまった。俺の責め立てるような視線に耐えられなくなり、遂には目を逸らした。
俺はさらに詰め寄り、新垣さんの胸倉を掴んで言う。
「もしもあんたが状況に流されてその答えを出したのなら、はっきり言ってそれは間違いだ」
掴んだ手を放し、様子を見る。新垣さんは苦しそうな顔をして、黙ったまま立ち尽くしている。重苦しい沈黙が続いた。
おかしい。この状況で何故クレインは何も言ってこないんだ？
そう思って横目で窺うと、クレインは腕を組み、成り行きを見守っていた。どうやら口を出す気はないようだ。
そうか。それなら俺は好きにやらせてもらうとしよう。
「そんでもう一つ」
俺は新垣さんに再度歩み寄り、彼のポケットから俺が渡したチケットを抜き取った。顔の前にさらすと、新垣さんははっとしてついさっきこれがあった場所を探った。

「これは使わないんだろ？　返してもらうぞ」
新垣さんは何か言おうとしたが、反論が思いつかなかったのか、開いた口は音を発することなく閉じられた。俺はわざとらしくあ～と唸ってみせた。多分、横でクレインが浮かんでくる笑みをこらえていることだろう。
「俺が持ってても使わないしな。じゃあ、こうしよう」
と言ってチケットを両手で掴み、胸の前に持っていく。両手の人差し指と親指に力を入れ、左手を奥に、右手を手前に動かす。チケットは造作もなく真っ二つに破かれた。
新垣さんの目が驚愕に見開かれ、次いで、見る見るうちに瞳に怒りが宿った。チケットだった切れ端が地面に落ちる頃には、彼は俺を殴り飛ばしていた。地面に倒れた俺を見て、ようやく自分が何をしたのかに気付いたようだ。握った拳を蒼白な顔で見つめている。
俺はゆっくりと立ち上がり、服に付いた埃を払った。
「何で怒る？　行くつもりなんてなかったんだろ？」
「……」
「あとどれ位生きていられるか聞いたのは、本当はこれに行きたかったからじゃないのか？」
「……」
「だったら新垣さん、あんたやっぱり心のどこかで生きたいと思ってんだよ」
「！！」
弾かれたように顔を上げ、俺を見る。俺は新垣さんの手首を掴み、開いた手の平に紙切れを置いた。もう一枚のチケットを。姉貴には悪いがこの場合は致し方ない。
「今でも、死んでもいいなんて思ってるか？」
新垣さんは気が抜けたように首を振った。
「は、はは。なんだそうか。どうやら僕は……本当は死にたくなんか、なかったみたいだ」
「そうか。そりゃ良かった。……ってことになったんだけど？」

茶化すような調子でクレインへと向き直る。
「ま、こうなるとは思っていたよ」
意地の悪い笑みを浮かべながら、クレインは革手袋とメガネを渡して寄越した。
「どうせ俺は分かりやすい奴だよ」
「誰もそんなことは言っていないさ。……本当にいいんだな？」
後半は新垣さんに向けた言葉だ。新垣さんは頷き、最後にクロをぎゅっと抱きしめてから、地面に降ろし、一歩離れる。
「やってくれ」
俺は躊躇せず、新垣さんとクロを繋いでいるものを断ち切った。新垣さんはクロの傍に膝をつき、眠っているだけに見えるその頭を優しく撫でた。今にも消えてしまいそうな、淡く、そして温かな笑顔を浮かべて。
「今までありがとう。クロ」
手袋とメガネを返し終えた俺はそれを見届けてから、この場を立ち去ろうとして体を公園の出口に向けた。
「いいのか？」
「ああ、そっとしておこう」
新垣さんはこれから泣くのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。どちらにしても、俺なんて邪魔でしかないだろう。
だから、俺は振り返らなかった。

画家と黒猫：6

帰り道。すでに月が高く昇ってはいるがその光は弱く、道路脇の街頭を足しても道の奥までは見渡せない。夜の道と言うのは昼とはまた違って見えるもので、人の感覚を狂わせるものだが、見知らぬ土地でもあるまいし、俺の足取りは確かだった。両側が塀に囲まれた住宅街の道の真ん中で、俺はぽつりと呟く。

「良かったのかねぇ、あれで」

俺の横に並んで歩いているクレインが、俺の言葉に反応した。

「さあな。この選択に正解など無いのだから、良い悪いでは片づけられんさ」

「いや、そうじゃなくて。俺なんかが口出しして良かったのかな、ってな」

あの場は俺が納得いかなかったので、言いたいことを言った訳だが、今頃になって余計な口出しだったのではないかと不安になってしまった。

「誰に意見をきいたとしても、最終的に生きることを選んだのは彼だ。結果、彼が苦しむことになっても、それは彼自身が責任を負うべきだろう」

「……そっか」

気分が晴れたとは言い難いが、これで良かったのだと思うことにしよう。いずれにしろ、もう過ぎた出来事だ。悩んでも仕方がない。

「新垣さん本気で、死にたいとか思ってたのかな」

「その気持ちが少しはあったのではないか？　彼にはやりたいこともあっただろうし、夢もあったかもしれない。だが、上手くいかない現実に疲れていたのは事実だろう。死にたいとまでは思っていなかったとしても、休みたいとは思っていたかもな」

聞いた限り、新垣さんは小さい頃から苦労してきたみたいだった。今思い返してみると、そういう節があった気もする。

「そこへ私が現れた。多少なり気持ちが傾くのも仕方のないことではあるな」
「そういうもんか？」
「あくまで私の推測に過ぎんがな」
本当のところは、やはり本人に聞くしかないのだろう。
「……それで？　あんたはこれからどうするんだ？　またどっかで同じようなことを繰り返すのか？」
「まあ、そうだな」
「何のために？」
クレインが立ち止まった。遅れて俺も立ち止まり、振り返って言葉を続ける。
「まさか、趣味ってわけじゃあないよな。なあ、クレイン」
クレインは答えない。俺は今一番気になっていることを問いにのせた。
「あんたは一体、何を探ってるんだ？」
「……聞いてどうする？」
クレインの顔に、あの面白がるような表情はない。無感情な硬い声が、これ以上踏み込むなという強い意志を表していた。
「否定はしないんだな。いいさ、無理には聞かねぇよ」
「それがいい。問い詰められたとしても私は話さんしな」
ふっと表情をやわらげ、クレインは言った。もしかしたらと聞いてみたが、そう簡単に聞き出せることではないようだ。
そもそも、俺とクレインの縁はとっくに切れているはずなのだ。昨日、俺と出会ったことすらとどのつまりは偶然に過ぎない。今日このまま別れたら、再会する可能性はほとんど無いだろう。
なんだろうな。名残惜しいとか、そんな感じではないけれど、何か忘れているような。
「どうした？　少年」
いきなり難しい顔をして黙り込んだ俺を、クレインは不思議そうに見下ろした。少年少年て、最後くらい俺の名前を呼んでくれても

いいじゃないか。と思って気が付いた。
「そうだ、名前」
「名前？」
何を言ってるんだという顔をするクレインを見上げ、指を差して言った。
「そう、これでお別れなんだから、いい加減に本名教えてくれよ」
「ダメだ」
即答だった。一瞬の迷いすらない見事なまでの即答だった。
「どうしてもダメか？」
「ああ、ダメだ。何度聞かれても教えられん」
「それなら俺が教えてやろうか？」
いきなり進行方向から男の声がした。驚き、目を凝らして見ると、声の主は塀にもたれかかり、腕を組んでいた。
ジャケットに明るい色のデニムパンツ。スニーカーを履いた足は片方を膝の高さまで上げ、足の裏を塀に押し付けるようにして体を支えている。
ゆっくりと男が塀から離れこちらを向くと、首に巻いたマフラーも波打った。年は二十歳前後、端正な顔立ち、意志の強そうな、きりっとした顔だ。
男は反応に困っている俺達を見て、ニヤリと笑って言った。
「氷室想真（ひむろそうま）だろう？　あんた」
氷室？　それがクレインの本名なのだろうか。問われた本人はというと、あくまで余裕の表情を保ったままだ。
「ほとんどいない筈なんだがな。その名を知っている者は。一体誰に聞いた？」
「聞かれて素直に答えると思うかい？　俺の名前なら教えてやってもいいが、一応言っとこうか？」
完全に俺抜きで話が進んでいる。俺はとにかく成り行きを見守るしかなかった。
クレインは皮肉めいた笑みを浮かべながら言った。

「どうしてもと言うなら聞いてやらんでもないな」
この言葉がおかしかったのか、男はくつくつと抑えた笑いを漏らした。
「なかなか面白い返し方するな、あんた。俺は皇息吹（すめらぎいぶき）。以後よろしく、なんて次に会う機会があれば、だけどな」
皇の瞳に物騒な色が映る。それに反応してか、クレインの目つきもわずかに鋭くなった。
「聞きたいことは多々あるが、まずそちらの用件はなんだ？」
「とある人物に頼まれてね。事情があるらしいから、なるべく人目につかないほうがいいってんで俺に依頼したらしいが、まあ、つまりはだ。あんたが持ってる手袋とメガネをこっちに渡して欲しいんだ」
「嫌だと言ったら？」
皇とクレインの視線が正面からぶつかり合う。何かのきっかけで一気に爆発しそうなほど膨れ上がった緊迫感が、その場を包んだ。動きたくても体が動かない。立っているだけで押し潰されそうなほどの重圧が俺を容赦なく叩いていく。喉が渇いてひりひりする。
まだ二月だぞ？　なのに何で俺はこんなに汗をかいてるんだ？
クレインがこちらを見ずに言った。
「少年、下がっていろ」
「！……分かった」
固まった足に思い切り力を入れると、どうにか動かすことが出来た。ぎこちない足取りで数歩離れると、少しだけ気持ちが楽になる。
「しっかし、残念だね。あんた面白い奴だから、出来れば手荒なマネはしたくねえんだよ。どうにか折れてくれねえか？」
「手荒なマネはしたくない、か。ならばこのまま帰ってはくれないかね？」
コートのボタンを外しながら、笑って言うクレイン。
「参ったね。どっちも引けないようだ」
不敵な笑みを湛え、まるでこの状況を楽しんでいるかのような皇。

クレインは体を横に向け、脚を軽く開き、わずかに腰を落とした。対して、皇は普通に立っているだけだ。何の気負いも緊張も見受けられない。
「少し待ってくれ」
思い出したようにコートのポケットからケースを取り出し、後ろ手に俺に投げてよこした。
「おわ！」
慌ててそれを両手で掴む。投げるなら投げると言って欲しい。危うく取り落とすところだったじゃないか。中の物が割れたらどうするんだ。
「少しの間、預けておく。危なくなったら迷わず逃げろ」
「お、おう」
クレインの台詞に一抹の不安を覚えながらも、俺は真剣な声音に気圧されて頷いた。
皇は腰に手を当て、余裕の表情で静観していた。話が済んだのを見てとると、友達に聞くような、そんな気軽さで問いかける。
「そろそろいいか？」
「ああ、待たせたな」
先に仕掛けたのは皇だった。数メートルの間合いを一秒足らずで詰め、飛び込むと同時に鋭い突きを繰り出す。速い。かろうじて目で追うことは出来る。出来るが、あれを出されたのが俺だったなら、反応できずに一撃で倒されていただろう。そう、俺だったなら。
だがしかし、クレインは軽く後ろに飛んだだけでその攻撃をかわし、そのまま回し蹴り。脇腹狙いのその蹴りを皇は屈んで避ける。クレインの足が宙に取り残されたマフラーをかすった。攻撃をかわした皇は、この隙を逃すまいと体重を前に移しかけたが、回転して軸足を切り替え、間髪を入れずに繰り出されたクレインの後ろ蹴りのせいでそれは失敗に終わった。
皇は電撃的な速度で飛び退き、ぎりぎりで後ろ蹴りをかわしたのち、バックステップで大きく距離を取った。

この間たった五秒。俺は一連の動きに見とれていた。
「ありえねえ。なんだこれ……」
なによりクレインが強かった事に一番驚いている俺。何故だか騙された気分になった。
両者は未だに無傷だ。俺の印象を言えば、蹴り中心のクレインが有利に思える。
皇はおどけるような口調で言った。
「あっぶねー。ちょっと舐めてたよ。こりゃもうチョイ本気でやらねえとな」
俺は耳を疑った。今のが本気じゃないってのか？
皇はおもむろにマフラーを外し、丸めて横に放った。俺は一瞬、ほんの一瞬だけそのマフラーに気を取られた。
刹那。
クレインの目前に皇がいた。腰を落とし、右手をやや引いた体勢で。驚く間もなく皇の右手がクレインを襲う。
そして。
クレインが吹き飛んだ。
「なっ……！？」
俺の横を腕を交差させた防御姿勢のまま通り過ぎていく。ザザザ、という音を立てて踏みとどまったものの、優に四・五メートルは吹っ飛ばされた攻撃だ。無事な筈がない。クレインはその場で片膝をついてしまった。
「やっぱりな」
俺はクレインに向けていた顔を正面に戻した。ゆっくりと歩いてくる皇から目を離すことが出来ない。
「たいしたもんだよ、あんた。あれに反応できるんだからな」
俺なんかには目もくれず、皇はクレインの前まで進む。それを追って振り返ると、こちらを見るクレインと目があった。訴えかけるようなクレインの目を見て、俺は先ほどの言葉を思い出した。
『危なくなったら迷わず逃げろ』

そうだ。俺がここで皇から上手く逃げおおせることが出来れば、クレインは例の能力でどこへなりと逃げられるのだ。
だが、果たして俺の足で、あんな速さで動く人間から逃げ切れるものだろうか？
それに、脱出する策があると分かっていても、クレインを置いて逃げることにはやはり抵抗を感じる。俺に何か出来ることはないのか？
「何をしている！　走れ！！」
クレインが叫んだ。
「！！…くそっ！」
俺は身を翻して駆け出した。
全力で、後ろも見ずに。
腕も足も、いや全身が重く感じた。
全然速く走れている気がしない。
焦っている筈なのに、こんなに必死になって走るのはいつ以来だ、なんて場違いなことを考えた。
少しでも振り切る可能性を上げようと、何度も角を曲がる。
走って、走って、息が切れても止まらなかった。
肺も心臓ももう保たない、というところで俺はようやく足を止めた。
塀に手を付き、肩で息をしながら後ろに目を遣る。あるのはただの暗闇だけだった。もしかして振り切れたのだろうか。しばらくの間、この体勢で息が整うのを待った。これだけ待っても皇が現れないところを見ると、どうやら本当に逃げ切れたようだ。
というか、走っている時は夢中で気付かなかったが初めから追って来なかったような気がする。一度も後ろを見なかったから、何とも言えないが。
「いや、違う」
見なかったんじゃない。
見れなかったんだ。怖くて。

俺が逃げたのは、俺が何も出来ないからでも、合理的な判断からでもない。
紛れもなく、恐怖心からだ。
怖かったから逃げ出しただけだ。
自覚した途端、激しい後悔が俺を揺さぶった。あまりにも情けなさすぎて自分に腹が立つ。
「何やってんだ俺は……！」
歯を食いしばり、俺は来た道を引き返した。

画家と黒猫：7

遠のいていく足音を意識の内に留めながらも、皇はその場を動かなかった。その注意は依然として地面に膝をつくクレインに向けられている。

どこかから響いてきた犬の遠吠えが、静かな夜闇に余韻を残していった。それが消え、再び静寂が戻ったことを見計らったかのように、クレインは膝をついたまま言った。

「後を、追わなくてもよかったのかね？」

かすかに乱れた息と額にうっすらと浮かんだ汗から、未だに先ほどのダメージが残っていると分かる。

「追ったらあんたが邪魔してくるんだろ？　二兎を追うものは一兎をも得ずってな」

クレインの瞳には不利な状況に対する焦りや怯えはない。少しでも注意を逸らしたなら、たちまちにその綻びを狙ってくることだろう。皇はそう感じていた。

「私を兎と例えるか。それはまた随分と似合わない例えだな」

「そうだな。あんたは牙を持ってる。そして手負い。気ぃ抜いたら噛み付かれそうだ」

警戒の言葉とは裏腹に、皇の表情はあくまで面白がっているそれ。

「出来ればもうそれは使いたくないがな。時に皇とやら、君はこの手袋がどういう物か知っているのか？」

急な話題変換、しかも人の興味を引くような、いかにも自分はお前の知らないことを知っているぞと言いたげな自信に満ちた表情。それを時間稼ぎであろうと判断した皇は、それでもなお少しばかりの興味を満たすためにその誘いに乗った。

「さあな。俺は突っ込んだ話はしない主義でな。依頼人の思い入れのある品としか聞いてねえ」

「つまり元の持ち主は自分だと主張している訳か」

「ああそうだ」
僅かな沈黙の後、クレインは断言した。
「嘘だな。これは元々一個人の所有物ではない。とある企業が作り出し、倒産するまで保管され続けたものだ。私以外の人の手に渡ったことなどない」
一瞬だけ皇の表情が険しくなった。険が抜けた皇の顔にはそれでもまだ硬さが残っている。
「そうかい。だがあんたの言い分を鵜呑みにする訳にはいかねえよ。あんたと依頼人と、どっちを信じるかなんて分かり切ったことだ」
皇の余裕が崩れたのを見てとり、クレインは皮肉めいた笑みとともに追い討ちをかける。もう額の汗は引いていた。
「その依頼人というのは、果たして本当に信用できる人物なのかな？」
「はっ。勝手に言ってな。どっちにしてもあんたは俺から逃げられねえよ。俺は俺の仕事をするだけだ」
「だろうな。分かり切ったことだ。悪いが君の労力は無駄になるだろう。君は私に時間を与えすぎた」
立ち上がったクレインの姿が揺らぐ。皇が驚きで硬直している間に、クレインはその場から完全に消えてしまった。
一拍の間をおいて、皇は額に手を当て天を仰いだ。そして呟く。
「あ～、やられた……」
はぁと嘆息。ポケットに両手を突っ込む。
「仕方ねえ。出直すか。にしても反則だろあれはよ～」
ぶつくさと文句を言いながら皇は帰路についた。
愁也が二人のいた場所へ到着したのは、それから二分が経ってからであった。

午後九時。俺は自分の家の玄関を前にして立ち尽くしていた。
あの後、皇と遭遇した場所へ戻ってはみたものの、既に皇はその

場を立ち去っていた。クレインの姿も見当たらなかった。その後どうなったのかを知る術は無い。諦めて家まで歩いてきたのが十分前。それから俺は、今の今まで目の前のドアを開くことを躊躇していた。
隣でおすわりをして、同じようにドアを眺めているケンを横目で見る。ケンも俺を見上げた。
「行くか」
俺は覚悟を決め、ドアノブに手をかけた。いつもより慎重にドアを開く。
「ただ……」
「遅い！！」
「いい！？」
スリッパが俺の顔面を目がけて高速で飛んできた。慌てて避けたそれを、ケンがジャンピングキャッチして俺の前に置いた。いや、そんな『どう？　今の』みたいな目で見られても……。
俺はとりあえずケンの頭を撫でてやり、スリッパを拾って廊下の奥に仁王立ちしている姉貴のところまで持っていった。姉貴の周りになんかオーラみたいなのが見えるのは俺の気のせいだろう。そうに決まっている。
姉貴は静かに口を開いた。
「遅くなるなら連絡くらいしなさいって……」
「……」
「言ってんでしょうが！！」
姉貴は俺の手からスリッパをひったくり、硬い側面で額に一撃、さらに裏面で俺の頬に往復ビンタを食らわせた。
「……！……！」
この上なく痛い。特に額が。ただの生活用品のくせに、けっこうな威力がありやがる。
「今何時だと思ってんの？　ねぇ？　ほら、言ってみなさいよ」
「九時……」
「正解」

スパンと小気味良い音とともに左頬に軽い衝撃が来た。
今のはどう答えてもはたくつもりだったな。
そして姉貴は振り切った体勢のままで愚痴り始めた。
「そりゃ面倒だからって鍋にしたのはあたしだけどさ」
面倒だから鍋ってどんな理屈だ。
ちなみに今日はおふくろ、珍しく風邪で寝込んでいる。よって代理として姉貴が夕食を作ることになった。
「あんたに分かる？　一人で鍋をつつくあの虚しさが」
「いや、それなら……」
「お黙り」
本日四度目のスリッパによるビンタが今度は右頬を強襲。
問答無用だ。俺の意見、聞く気ゼロだな。
「まー仕方ないからあたしが全部食べたけどね」
え、ちょっと待て。家にある鍋って、軽く三・四人分の大きさがあった筈なんだけど。それ全部ひとりで食ったのか！？
「……（絶句）」
「それと……これね」
差し出された物は文庫本サイズの大きさの箱。包装紙で包まれ、リボンが巻いてある。俺は差し出されたそれを受け取り、試しに振ってみる。カサカサと音がした。
「来てたわよ。アマミヤさん、だったっけ？」
「アメミヤだろ」
「そうそう。まだ帰ってないって言ったら、帰ってくるまで待ちますって言ってね。あんたがあまりにも遅いから、これだけ預かって帰らせたけど」
姉貴の顔に非難の色が浮かぶ。ああ、そうか。怒っている本当の理由はそれだったか。
あれ？　でも――
「俺の住所を話した記憶が無えんだけど」
「小林先生から聞いたってさ」

あの人かぁ。まぁ、嬉々として教えそうではあるな。
姉貴が嘆息してから言った。
「まったく。あんた、明日ちゃんと謝っときなさいよ」
「分かってる」
「分かってるなら良し。とっとと風呂はいって寝な」
「メシは？」
「んなもん無し」
「え！？」
「当ったり前でしょ。あんたは朝まで飲食禁止。なんか文句ある？」
「……いいえ」
うちの姉貴はおふくろより厳しい。

風呂を済ませ、私服に着替えた俺はベッドに仰向けになっていた。
「腹減った……」
起き上がり、何か食べ物が無いかと部屋を見回す。一階に行けばあるだろうが、みっともない上に姉貴に見つかったら今度こそ殺される。
諦めかけた俺の目に映ったのは、雨宮が置いていったという四角形の箱。
わりと薄っぺらいけど、何が入ってるんだ？
俺は机に置かれたそれを手に取り、包みを開いた。
「チョコレート？」
これって昨日渡し忘れたってことか？
何にせよ助かった。一口サイズのチョコを口に放り込む。控え目な甘さで、思ったより食べやすかった。
昨日今日は色々と慌ただしかったから、渡す機会がなかったのかもしれない。雨宮の近くでは桐島が目を光らせていただろうし。速人に聞いたのだが、桐島は俺が嫌いなのではなく、単に男嫌いなだけらしい。速人は雨宮から聞いたとかなんとか。

俺は机の引き出しに目を遣った。あの中にはクレインから預かったメガネを、ケースに入れて保管してある。
「預けておく、か」
あいつは上手く逃げられたのだろうか。あの後どうなったかは分からないが、無事ならそのうち預かり物を返してもらいに来るだろう。
そして皇息吹。突然現れたあの男は一体何者なのだろうか。俺もあの男に狙われることになったわけか。恐らく、俺は近いうちにもう一度あの男に会うことになるだろう。俺がクレインから預かったもの、それを皇が取りに来た時に。
その時、俺はどうするべきだろうか。
ま、何はともあれ、今日のところは。
「寝よう」
俺は電気を消してベッドに潜り込んだ。

後悔？
そんなもん十秒でいい
立ち止まってる時間が惜しいだろうが

第二話　了

画家と黒猫：7（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第三話　再開

廊下の左右にずらりと絵が並ぶ光景というのは、なかなかどうしてすごいものだと思う。休日の午後、俺はある人の招きで個展を見に来た。

学校の廊下ほどの広さの通路はシミ一つない柔らかな白色で、額縁に収められた絵が等間隔で飾られている。訪れた人々は皆、真剣な眼差しを絵に注いでいた。

俺は周りを見渡すのをやめ、目の前に展示してある一枚を眺めた。二匹の鳥が木の枝に止まり、肩を寄せ合っている絵だ。

右隣りで同じくこの絵を見ていた雨宮が言った。

「この二匹、なんか恋人同士みたいだね」

「確かにそうだな。この鳥は、インコか？」

俺が首を傾げると、雨宮の向こうにいた桐島が非難の声を上げる。

「あんた何言ってんの？　これのどこがインコだってのよ？　オウムに決まってんでしょ」

俺の左隣りにいる信護も首を傾げ、疑問を口にする。

「そうか？　パッと見じゃ分かんねーんだけど。どう違うんだ？実際」

言って隣の速人を見る。問われた速人はさも当然のように答えた。

「オウムとインコには厳密な区別はないよ。中・小型で尾が長くて、色鮮やかなものをインコと言うらしいけど。その判断基準でいくと、この絵に描かれているのはオウムだね」

「へえ」

一同はもう一度まじまじと絵を眺め、速人の言ったことに感心した。再度信護が速人に目を向けて言う。

「お前、どっからそんな知識を……」

「暇つぶしに読んだ辞書に載ってた」
帰ってきた返答に、俺と信護は思わず呟いた。
「暇つぶしに……」
「辞書……」
どう考えても暇つぶしに読む本じゃないだろう。雨宮も感心すべきかどうか迷っている。桐島は俺と信護に向かってからかうように言った。
「あんた達もそれくらいやったら？」
「何を！？　俺は学校の勉強だけで精一杯だ！」
「あ、そう。じゃあ、ただのバカってことね」
「確かに」
「否定できないね」
「てめぇらは一体どっちの味方だ」
そのやりとりを見て、雨宮がくすくすと笑った。始めは桐島が俺達（正確には俺と信護）に突っかかるだけでおろおろしていたが、最近は慣れてきたのかずいぶんと余裕が出てきた。
俺がクレインと別れて二か月が経ったのだから、当然と言えば当然か。意外なことに、あれから皇息吹が俺の前に現れることはなかった。その代わりクレインにも会っていないので、今も預かり物は机の引き出しに入ったままだ。
どうにかして連絡を取れないかと考え始めた頃、思わぬ人から手紙が届いた。差出人は新垣さんだった。あれから新垣さんは絵画展に行き、そこで知り合った画家と意気投合し、その人に弟子入りしたらしい。今回、その人物が住寄市で個展を開くからよかったら来てほしいとのことだった。手紙にはチケットが五枚も同封されていた。
新垣さん、これはちょっとサービスしすぎだ。
とりあえず信護と速人と雨宮にチケットを渡すと、「碧が行くならあたしも行く」と言って桐島が俺の手からチケットを抜き取っていった。速人はまだ分かるが、信護も来るとは思わなかったな。

「おい！　これ、見てみろよ」
先を行く信護が手招きしている。何だかんだで楽しそうだな、あいつ。
「桐島そっくり」
「へえ、どれが？」
指差した絵を覗いた桐嶋が石化した。不審に思って覗き込むと、窓辺に女性が一人座っている絵だった。
題名は『窓辺の老婆』。……ってこれ、仕返しのつもりか？
桐島の肩が震えている。雨宮は苦笑いを浮かべていた。ひょいと、速人が後ろから顔を出し、軽い調子で言った。
「未来予想図？」
速人の言葉にぴくっと反応し、桐嶋のこめかみに青筋が立った。
「あぁんた達、これのどこがあたしだってぇ？」
「やべェ！　逃げろ！」
「御意」
即座に二人は駆け出した。
「待ちなさい！」
桐島も後を追って走り出す。あっという間に三人は見えなくなった。
ここは大人しく絵を見る場所だから、あまり騒いでほしくないんだが。
「何やってんだ……あいつら」
俺が呆れてため息をつくのと対照的に、雨宮はくすくすと笑って言った。
「楽しそうだね、朱音ちゃん」
雨宮が言い終わって間もなく、後ろから複数の足音と声が聞こえてきた。
「止まるな速人！　止まったら殺られる！」
「ていうか、僕もう抜けていいかなぁ？」
「あんのスポーツマンもどきめ！　捕まえたらボコボコにしてその

辺の壁に飾ってやる！！」
一周して戻ってきたらしい。桐島の声が尾を引く。駆け去っていく三人を見送りながら、俺は雨宮に言った。
「あれでか？」
「ま、まあ、今はちょっと本気だけど。でも、朱音ちゃんって嫌いな人には見向きもしないんだよね」
「鼻で笑ってそうだよな」
「あはは、当たってるかも」
「それにしてもあいつら、こんなとこで走り回んなよな。見てるこっちが恥ずかし……い……」
目の端にちらりと気になるものが見えた気がした。そちらに顔を向けると、一枚だけ感じの異なる絵があった。その絵には首から上が描かれていなかった。代わりに、中心に据えられていたのは一匹の黒猫。ベンチに座る誰かの膝の上で気持ち良さそうに眠っている。顔は見えずとも、猫の背に優しく片手を添えるこの人物はきっと微笑んでいるのだろうと分かる。
和やかな雰囲気が伝わってくる絵。
これは。この絵は。
俺はどうしても確かめたくなり、そこで足を止めた。俺の様子が変わったことを怪訝に思ったのか、雨宮はためらいがちに聞いてきた。
「どうかした？」
「いや、ちょっと、気になる絵が……」
よぉく見ると、俺の思った通りこの絵の猫には額に傷があった。
「それは僕が描いた絵だよ」
不意に聞こえた声に振り向くと、そこにはスーツ姿の新垣さんが立っていた。私服と比べるとずいぶん大人っぽく見える。はにかんだ笑みは二か月前と変わらない。ただ、以前よりも雰囲気が明るくなった気がした。
「新垣さん。じゃあ、他にも何枚か新垣さんの絵があるんですか？」

「いや、この一枚だけ。この絵は、まぁ、その、特別だからね」
そこで、新垣さんは雨宮に気付いたようだ。
「二人だけかい？」
「いえ、あと三人、友達が来てます。雨宮、この人がチケットをくれた新垣さんだ」
「雨宮碧です。初めまして」
「初めまして。僕は新垣進。これでも長谷川先生の助手をしてるんだ」
そう、新垣さんが弟子入りした人物とは誰あろう長谷川京介だ。人生どこで何が起こるか分からない。
新垣さんはぐるりと辺りを見回した。
「ところで、彼は来てないのかな？」
「黒い人は来てませんよ。今ちょっと連絡が取れない状態で」
「そうか。せめてお礼くらい言いたいんだけど。連絡先を聞いておけばよかったな」
残念そうな新垣さん。だが、すぐに気を取り直して明るく言った。
「じゃ、僕はまだやることがあるから、悪いけどこれで失礼するよ。今日は来てくれてありがとう」
「忙しそうですね」
「まあね。楽しんでやってるよ」
「お仕事がんばって下さいね」
雨宮の微笑みに、新垣さんはありがとうと爽やかな笑顔を返して去っていった。
生き生きした新垣さんを見ることが出来て俺は安心したが、同時に少しがっかりもしていた。新垣さんにも連絡が取れないのか。もしかしたらと思ったのだが、当てが外れたな。
「これからどうすっかな」
「それなんだけど」
「！」「ふわ！」
いきなり背後から速人が話しかけてきたので俺と雨宮は驚いて動

きを止めた。雨宮が目をぱちくりさせながら言う。
「びっくりしたぁ。速人君いつから後ろにいたの？」
「たった今」
「一人だな。追いかけっこは終わったのか？」
「さあ？　僕は途中で抜けてきたからね」
飄々としている。こいつが取り乱したところを見てみたいと思うのは、多分に自然な感情だろう。まあ、こいつが初めからこうだった訳ではないのだが。
そこへ桐島が信護を連れて戻ってきた。いや、持って帰ってきたというべきか。信護の襟首を掴んで引きずってきたのだから。
……もうちょっとマシな運び方は出来ないのか。
これを視界から外すことは誰にだってできはしないだろう。周囲の反応は言うまでもない。
俺達と合流すると、桐島は信護を掴む手を離した。何も言わずに顔を背ける。見るからに不機嫌そうだ。俺は桐島の宣言通りボロボロになり、地面に倒れている信護の顔を覗き込んだ。あー、白目剥いてら。それから見て分かることを一応訊いてみる。
「大丈夫か？」
「……」
返事がない。ま、いいか。放っといても。死んじゃいないだろ。
「ところで速人……」
「ぅおおい！！　もうちょっと労われや！！」
若手お笑い芸人のような復活の仕方をした信護のツッコミを、速人が冷やかに切り返す。
「だって自業自得だし」
「てめぇが言うな！！　この裏切り者め！　隙見て逃げ出しやがって！」
「なんだ。わりと元気そうだね。よかったよかった」
「ふっざけんなこの！　この負傷具合を見やがれ！　もうちょっとで俺は鬼ばばに八つ裂きにされるところだったんだぞ！？」

「誰が鬼ばばだって？」
ゆらりと怨念を込めて振り向く桐島。信護はひぃっ、と情けない悲鳴を上げて俺の後ろに隠れる。親友の情けなさに思わずため息が出た。ちなみに雨宮は桐島の後ろでおろおろしている。さすがに桐島がキレやしないか心配になったのだろう。苦労するなぁ、あいつも。（他人事）
流れが止まったところを見計らって、速人が軽く咳払いをした。四人の視線が速人に集まる。
「これからのことだけど、皆この後は予定入ってる？」
桐島が黙りこんでしまっているので、雨宮がやや慌てた口調で言う。
「あ、私と朱音ちゃんはこの後買い物に行くつもりだよ」
「信護と愁也は？」
「俺は特にない」
「俺もヒマ。なに？　素敵な提案でもあんの？」
速人は頷いた。
「ウチの親がね、友達と出掛けるって言ったら、『それなら友達と一緒に行きなさい』って、お店予約しちゃったんだよね。『代金は自分が持つから』って」
「よーし！　行く！　俺は行くぞ！」
信護は迷わず飛びついた。この決断の早さは長所なのか短所なのか。速人は苦笑しながら信護をたしなめる。
「返事は最後まで聞いてからね。場所はここからちょっと遠いけど、知ってるかなぁ。鳳楼苑（ほうろうえん）っていう店で七時から……」
「鳳楼苑！？　ウソでしょ！？」
さっきまでむっとした表情で黙り込んだままだった桐島が突然食いついた。思ってもない介入に速人は驚きこそしなかったものの、桐島に視線を向けた。皆の視線にはっと我に返った桐島は、顔を赤くしてわざとらしく咳払いをした。取り乱したことを恥ずかしく思っているようだ。気を取り直して速人へ話しかける。

「すっごい高いお店じゃないの」
まったく知らない俺はいまいちピンとこない。ウチはそもそも外食自体が少ないのだ。何故かといえば、それは姉貴とおふくろが食い過ぎるからだ。曰く、美味いものならいくらでも胃袋に入る、らしい。俺にそんな特質はないけど。
「そんな高いのか？」
誰にともなく訊いた俺の問いに雨宮が答える。
「うん。高級料理店として雑誌にも載ってるよ。一番安い料理で二千円くらいかな」
「そりゃ、すごいな」
一般庶民には絶対に手が出せない。それにしても、そんな店の予約（その上に代金持ち）を即座にするなんて――
「神田君のお家って、お金持ちなんだね」
雨宮の他意のない言葉に俺はどきりとした。信護もわずかに緊張した面持ちで俺を見る。
「まあ、そんなとこだね」
あっさりと頷く速人。てっきり柔らかく否定するものだと思っていたが。
「杉村君どうする？」
「あ？　ああ、俺は行くよ」
妙な話だ。なんで俺が動揺しているんだろう。上手く表情を繕えているかどうか自信がない。だが雨宮は気付かなかったようで、桐島に話を振った。
「私は行ってみたいな。朱音ちゃんも行こうよ」
「確かに。こんなチャンスは二度とないわね」
「じゃあ、この際だから皆で移動しない？　いいよね？」
「別にどっちでもいいけどね。あたしは」
「お？　意外。もっとイヤがると思ったぜ」
「荷物持ちが付いてきたと思えばどうってことないわよ」
「俺ら荷物持ちですか」

信護が茶化すが桐島の方が一枚上手だった。がっくり落ちた信護の肩に手を置いて俺は言った。
「諦めろ。決定事項らしいから」
その傍らで、上手いこと荷物持ちを免れそうな速人が口を開く。
「話はまとまったみたいだね。それで、一つだけクリアしなくちゃならない問題があるんだけど」
「何だ、問題って」
「保護者同伴っていう条件があるんだよね」
「……なるほど」
そういう事か。速人の両親が付けそうな条件だ。
「今更って感じだけどねー」
やれやれといった様子の速人に、桐島が胸を張って言った。
「それなら大丈夫よ。今日はコーさんが来てくれることになってるから」
「「「コーさん？」」」
男子三人の声が揃った。聞き返さないところをみると、雨宮はその人物を知っているらしい。
「朱音ちゃんのお母さんがやってる店で働いてる人。頼りになる人だから、問題ないと思うよ」
「ふうん。その人とはどこで合流するの？」
尋ね終わるのを待たずに桐島の携帯が鳴った。今流行りの着うたが、静かな館内に思ったより大きな音となって響く。そういうのは電源切るか、せめてマナーモードにしとくべきじゃないのか。
桐島はメールにざっと目を通して言った。
「今入口の近くに車止めて待ってるって」
「よっしゃ。それじゃ行きますか」
信護の言葉に、俺達は出口＝入口に向かって歩き始めた。それほど道幅がある廊下ではない上に人の往来があるため、自然と雨宮、桐島、速人、信護、俺の順に縦一列に並んで歩くことになった。
展示してある絵を眺めながらしばらく歩くと、通路の先にエント

ランスが見えてきた。
俺は何気なく前から歩いて来る客に目を遣った。若い男が一人。若いというか、十代後半に見える。涼しげでそれでいて凛々しい顔立ち。だが、長めの前髪からのぞく鋭い瞳のせいか、それとも不機嫌そうな表情のせいか、どこか近寄りがたい雰囲気をまとっていた。腰下までのスプリングコートにシャツ、細身のジーンズはいずれもおとなしい色合いで、全体的に大人びた印象を受ける。
俺はちょっと気になって、すれ違う際にちらりと横目でその男の様子を窺った。男が片手でコートの襟を直す。
「！！」
それは、ともすれば見逃してしまいそうなほど短い動作だった。だが、俺にはまるでスローモーションのようにはっきりと見てとれた。男が右手首に嵌めているブレスレット。俺がクレインに貰ったネックレスと全く同じデザインだった。
驚いて硬直、足が止まる。迷いは一瞬だった。前を行く信護に声をかける。
「悪い！　先に行っててくれ！」
言うや否や、俺は振り向いて男の後を追った。さすがに走るわけにもいかず、立ち止まっている人や前から来る人を避けて歩いていてはなかなか追いつけない。危うくぶつかりそうになって目を離した一瞬に、俺は男を見失ってしまった。
「気にしすぎか……？」
冷静に考えてみれば、同じ、もしくは似たデザインのものが存在したって不思議ではない。いずれにしろ、見失ってしまってはどうにもならなかった。俺は仕方なくもと来た道を引き返した。
エントランスを抜け、出入り口である自動ドアをくぐり、左右を見る。俺から見て左手側の少し離れたところに皆がいた。運転席を道路側につけて停車している車も見えた。
俺に気付いた雨宮がこっちだと手を振る。他の三人はこちらに背を向けている男と話をしていた。恐らく彼がコーさんなる人物なの

だろう。明るい色のジャケットとデニムパンツを着こなすその後ろ姿に、どことなく見覚えがあるような。雨宮がコーさんになにやら説明すると、コーさんは話をやめて振り向いた。

すぐそこにまで近付いていた俺は、振り返った男の顔を見た途端、緊張に体を強張らせた。

おいおい……こんなのアリかよ。

「初めまして。俺は皇息吹だ。よろしくな」

足を止めた俺に向かって、いつかと同じあの不敵な笑みを浮かべながら彼、皇息吹は言った。俺は驚きを必死に抑え、自然な風を装って答えた。

「杉村愁也です。よろしく」

まさか、こんなところで再会を果たすとは。

本当に。

人生どこで何が起きるか分からない。

サイカイ：2

再会は思わぬところでだったが、それ故に今一時の猶予が出来たのは幸いと言えた。衆人環視の中では手出ししてくることはまず無いだろうからな。

そして皇息吹との遭遇とはまた別に、ここに新たな問題が発覚した。信護が理不尽さに声を荒げて言う。

「全員乗れねえのかよこの車！」

そう、息吹さん（初対面ということにしているのでこういう呼び方になった）が乗ってきたのは軽自動車。運転席、助手席に一人ずつ、そして後部座席に三人の最大五人が乗れるが現在の人数は六人。照らし合わせると一人だけ乗れないという事態になってしまうのだ。

「仕方ないじゃない。あんた達を乗せる予定なんてなかったんだから」

「むぅ……」

桐島のもっともな反論に信護は口ごもった。残った一人はバス、またはタクシーを使って移動することになる。もちろん実費で。全員が電車のち徒歩という手段でここに来ただけに、自転車なんて便利な物は持っていなかった。

「とにかく、そういうことだからあんた達三人のうち一人が降りなさい」

降りるというのは言葉のあやだ。実際は道路脇で口論をしている状態。

だったのだが。

「だってさ。二人とも」

後部座席の窓から顔を出し、速人はにこやかに言った。

「速ェなオイ！！　行動がよ！」

「いつの間に後部座席に……」

誰よりも早く速人は自分のポジションを確保してのけた。さすが

に抜け目がない。話し合いもせずにあと一人になってしまった。信護が半ばヤケになって言った。
「おーし！　こうなったら正々堂々ジャンケンで決めてやらぁ！」
「いいよ。俺が降りる」
「ジャーンケーンって、え！？　譲ってくれんの？」
「ああ、俺は別の手段で行く」
「やった！！　やっぱ持つべきものは親友だな！」
「分かったから抱きつくな。そんで頬擦りすんなっつーの気持ちわりぃな」
「場所は分かる？」
速人の問いに俺は頷いた。前に一度だけ、姉貴に連れられて行ったことがある場所だった。主に荷物持ちとして。
それに辞退したのは優しい心遣いからではない。息吹さんと一緒に移動する際の緊張を考えれば多少の散財は安いものだ、という判断である。買い物には行かないと言い出すとそれはそれで怪しまれる気がするし。
そんな訳で、俺は一人、走り去る車を見送ることとなった。車が去った方に首を向けたまま、目的地に一番近いバス停はどこだったかな、などと考えた時、前方の建物から見覚えのあるスプリングコートが出てきた。

車内の雰囲気は和やかだった。息吹の親しみやすい性格が初対面の気まずさなどを軽々と吹き飛ばし、信護と速人はもうすっかり息吹と打ち解けていた。
運転中の息吹が前を向いたまま言う。
「いやー、それにしても、朱音に男の子の友達が三人もいるとはなー。正直予想外だ。お兄さんびっくり」
「誰がお兄さんよ。それに、こいつらはあたしじゃなくて碧の友達なの」
助手席の後ろに座る朱音が抗議した。その隣りにいる信護がその

発言にさらに抗議する。
「何を言う。友達の友達は友達だろうが」
「信護。抗議するポイントが違う。っていうか、その理屈でいくと誰でも友達が五十人は出来ちゃうよ」
右端に座る速人が淡々と間違いを指摘する。助手席の碧が振り向いて言った。
「でも朱音ちゃん、友達でもないとこんなに一緒にいないでしょ？」
「ぅ……いやそれは……」
「そうだなー。俺なんて最初は口も聞いてくんなかったからな」
「え、そうだったっけ？」
「忘れてんのかよ……。あんときゃ俺、少なからずヘコんだんだぜ？」
息吹の言葉に信護が意外そうに応じる。
「え！？　息吹さんもっスか？　俺んときは思いっ切り睨まれたんスけど」
「そりゃ、あの状況じゃあねぇ」
速人が苦笑いしながら呟く。とは言うものの、速人も内心は意外に思っていた。今までのやりとりを見た限り、息吹と朱音の仲が良いことは分かる。気を許した者同士の気安さみたいなものすら感じられた。まるで兄妹のような。ここまで親しい男性がいるとは、と速人は表情には出さずに驚いていた。
息吹は軽い口調で言った。
「知り合ってしばらく経つけど、初めの数か月はほとんどシカトされてたしな。俺だってあの件が無けりゃ……」
「コーさん」
朱音が鋭く息吹の言葉を遮った。
「っと、わり。喋り過ぎた」
車内の空気に少しだけ緊張が混じる。謝りながら、息吹が碧にちらりと視線を送ったのを見たのは角度からして朱音だけだったろう。
速人は場の空気が変わったことを察したが、あえて言及はしなか

った。信護は難しい顔で何事か考えている。やがて、ゆっくりと朱音の方を向き、重々しい口調で言った。
「桐島。俺は今、非常に気になっていることがあるんだが」
「何よ？」
聞き返す朱音の表情には、少なからず警戒の色が見える。信護は神妙そうな顔を崩さない。
「なぜ俺のとなりが雨宮さんじゃないんだ」
車内の時間が数秒間、止まった。
「……は？」
しばらく固まっていた朱音が、拍子ぬけを通りこして何言ってんのコイツという顔で言う。速人と碧は苦笑いだ。息吹はさも面白そうににやにや笑っている。
信護は真面目くさった口調で続けた。
「俺としては、スキンシップによって親睦を深めるいい機会かなー、なんて思ってた訳なんだなコレが」
「あんたがそんな考えだからでしょうが」
これ以上ないほどの渋面をつくり、いつもより低い声で言う朱音。そんなことは気にせず、信護は両腕を大きく振り上げ朱音に迫った。
「こぉの際だし桐島でもいいかなー、なーんて」
さながらル〇ンのように詰め寄ってくる信護の様子に身の危険を感じた朱音は、出来るだけ距離を取ろうとした。だが、狭い車内では数センチしか後ずされない。
「ちょっ……近い近い！　なんか危険な気配もするし！　ってあんたも黙ってないで止めなさいよ！」
信護の顔やら腕やらを掴んで押し退けながら助けを求めても、速人はにこにこ笑っているだけで止めようとしない。さっきとは打って変わって、朱音は顔にも声にも余裕がなくなっていた。
「じょ、冗談でしょ……？」
「ふふふ……観念しなせえ」
信護の目がキラリと光った。朱音に腕を掴まれていてもやはり力

の差は歴然であり、押し切られるのも時間の問題だと思われた。接触まであと少し。いよいよもって朱音の顔が引き攣った、その時。
「あ～、信護クン」
「はい？」
息吹の呼びかけにそのままの姿勢で首だけ回す信護。その頬には一筋の汗が見える。
「うちの朱音に手ぇ出したら、走行中の車からドア開けて道路に飛び降りるっつーハリウッド映画張りのアクションをやってもらうことになるからそのつもりでなー」
「うちの！？　ってあの、息吹さんの頭になにやら二本の角のようなものが見えるのは、俺の気のせいでしょうか……」
慌てて姿勢を正したあと、おそるおそる尋ねる。
「それか、ビルの屋上からロープ無しでバンジージャンプっつーハリウッド映画張りの……」
「なぜにそんなにハリウッド映画にこだわるんスか！？　ていうか、そんなんやったら普通に死ねますよ！？」
「はっはっは。ビビんなよ冗談だから」
「で、ですよねー？　はは……」
「息吹さん、顔が笑ってません……」
「は……」
碧がぽつりと漏らした一言は、信護を石化させるに十分な威力があった。
「面白そうだね、それ。やってみたら？」
今まで黙っていた速人が固まった信護に軽く声をかけた。ぎこちない動きで信護の首が九十度ほど回転する。顔には引き攣った笑みが張り付いていた。
「どこをどう聞いたらそんな結論が出る？　ん？」
「あ、席交代しようか？」
「ぅオイ。それは暗に俺に飛び降りてみせろと言ってんのか？」
「うん」

「頷くなよぅ！！」
後ろの席の言い合いを聞きながら、息吹は隣りに身を傾け、碧に訊いた。碧は苦笑混じりだが、それでもちょっと楽しそうに笑っていた。
「いつもこうか？」
「いえ、いつもは適当なところで杉村君が止めるんです」
「どうやって？」
「えっと、体を張って」
「……力ずくってか。ま、あれを止めるにはその方が速いだろうな」
バックミラーには、高速で次々とパンチを繰り出す信護と、そのパンチをにこにこ笑いながらかわしたりいなしたりして全て避けている速人が映っていた。
「そういや、その愁也君だったか？　どんな感じなんだ？」
「こんな感じです」
碧は両手を使って眉間に深い皺を寄せた。この場にもし愁也がいたら、そんな顔してねーよとツッコミをいれたことだろう。
「それ、ネタか？」
「ネタ？」
「いや、いい。そうじゃなくて性格とかそういうのを教えてくれ」
「性格。うーん、一言で言うと、素っ気ないというか、ぶっきらぼうですけど優しい人です」
「へぇ。なるほどね。そりゃあ気が合いそうだ。一度、腹割って話がしたいな」
にやりと笑って乗り出した身を戻す。あんな体勢でも前方に注意を払って運転していたのだから、凄いとしか言い様がない。
「訊きたいこともあるし、な」
隣りにさえ聞こえない声で独白した息吹の目は、少しも笑っていなかった。

さて、どうやって話しかけようか？
俺がぶち当たった壁はそれだった。当たり前だ。面識のない赤の他人に気軽に話しかけたり出来るほど俺は社交的じゃない。かといって偶然を装って話しかけるきっかけを作るなんて器用な芸当も出来ない。
どん（肩がぶつかる音）！　ああ失礼おや珍しいブレスレットですね実は俺も似たような物を持ってるんですよー。
ありえない。絶対に怪しまれる。俺の脚本能力は最低レベルのようだ。
結局、そのまま見失うことだけは避けたい俺がとった行動は、適当な距離を置いて後ろを歩くこと。簡潔に言うと尾行だ。自主的に誰かの行動に探りを入れるという経験がない俺にとって、これはあくまで仕方なくだ、仕方なく。
男は先ほどから大通りを散策しているだけで、どの建物にも入る気配がない。人気の多い道ばかり歩いているので、俺の尾行が気付かれることはないだろうが、いつまでもこの状態でいるのは好ましくない。こっちには時間的余裕がないのだ。
唐突で悪いけど、ちょっとそれを見せてくれとでも言おうか。多少強引でさっきの考えと似たり寄ったりな案ではあるが、何でもなければやっぱり見間違いだった、とかなんとか言えばいい。俺は尾行対象との距離を詰めにかかった。男が角を折れて見えなくなる。追い付ける距離にいるとはいえ、視界に映らないと不安なものだ。俺は早足で角を曲がった。
「俺に何の用だ？」
声がした方向は俺の斜め後ろ。振り返ると、ポケットに両手を突っ込み横目で俺を睨む元尾行対象がいた。疑いの目を向けられることは覚悟の上だったが、まさか尾行がばれていようとは。
男は焦れたように言った。

「聞こえなかったのか？　何の用だと言ったんだ」
初対面だというのにずいぶん偉そうだ。言葉に棘が混じるのは分かる。俺だって同じ立場ならそうなるだろう。だから俺は男の威圧的な態度に腹は立たなかった。
「あー、ちょっと訊きたいことがあっただけなんだ。ほらこれ」
そう言って俺はネックレスの飾り部分を手に持ち、男に見えるようにした。元々鋭かった男の目が、ネックレスを見た途端にさらに鋭くなった。が、すぐにそれは元に戻り、さして興味なさそうな声で言った。
「ふん、そうか。お前も俺と同じということか」
「同じ？　どういう意味だ？」
勝手に納得されてもこっちには何のことだか分からない。しかし、このネックレスにはやはり何か秘密があるらしいことは男の言い草から確認できる。考えてみたら、あのクレインが善意でこれをくれたとは到底思えない。ただ、男の言う「俺と同じ」とは一体何が同じだというのか。俺の困惑した表情と問いに対し、男は眉間に皺を寄せ、逆に聞き返してきた。
「お前、それをどこで手に入れた？」
「どこでっていうか、人に貰った物だ」
「貰った？」
なおも疑り深い視線を俺に向けてくる。こっちの質問に答える気があるのかこいつは。しばらく考える素振りを見せたあと、男は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「どうやら本当に何も知らないらしいな。……いずれにしろ、俺にはどうでもいいことだ」
そのまま来た道を引き返そうとする男。俺は慌ててちょっと待てと呼び止めた。
「何だ？」
もう話はついたと言わんばかりにぞんざいな返事だった。事実、男の顔には不機嫌の三文字が見える。前言撤回。こいつは普段から

偉そうな奴らしい。
俺はネックレスを指して言う。
「これが何なのか知ってんだろ？　教えてくれよ」
「俺が説明してやる義理はない。それをくれた奴に聞け」
それが出来たら苦労はないというのに。さっきから聞いていれば、ずいぶんと失礼な奴だ。まあ、こっちにも邪険にされる原因はあるけど。それにしたって人を見下しすぎだろう。
この――
「お前、名前は？」
口をついて出た誰何の言葉。
男はわずかに振り返り、短く答えた。
「萩原鏡次（はぎわらきょうじ）」
そしてそれきり何も言わずに角を曲がり、俺の視界から消える。
あいつ、俺が何者かも聞いてこなかったな。俺の名前なんかに興味はないってか。
軽くため息をついてから、俺は重大なことに気が付いた。
ああ、もう時間がないな。

サイカイ：3

待ち合わせ場所である某デパートに辿り着いたのは、あれから三十分後だった。着いた途端に言われた遅いだの何だのの文句は適当に聞き流しておいた。

そしてさらに一時間半後の現在、俺は背もたれのない簡素なベンチと自動販売機が置いてあるだけの簡易休憩所にいた。売り場よりも奥まった場所にあるため、週末のデパートのにぎやかな声は遠くのざわめきにしか聞こえない。

初めのうちこそ皆で行動していたが、如何せん女子二人の買い物が長い。幸いにも買い物の量はさほど多くないため、俺達が荷物持ちとして随伴する必要はなく、息吹さん一人を付き添いとして残して別行動をとった。

男子三人が向かった先はデパート内のゲームセンター。俺もついさっきまでそこでガン・シューティングをしていた。相棒の信護は早々に脱落して他へ移っていってしまったが、結構長いことやっていたので、腕と肩が少しばかり疲労していた。オモチャとはいえそれなりの重量はある。喉も渇いたし、休憩を兼ねてここに来たという訳だ。立ち去り際にちらりと見たら、信護と速人が格闘ゲームで対戦しているところだった。どうでもいいけど、ゲームでうりゃあとか叫ぶのはやめた方がいいと思うぞ信護よ。

ごくごくと喉を鳴らしてジュースを飲む。思ったより俺の体は水分を求めていたようだ。ベンチに腰を下ろし、紙コップを脇に置く。両手の指同士を絡め、手のひらを天上へ向けて肘を伸ばす。固まった筋肉がほぐれて、少しだけすっきりした。

飲み干した紙コップを捨てようと腰を上げかけたところで不意に前方から声をかけられた。

「おう、ここにいたか。探したぜ」

「息吹さん」

快活そうに笑って、息吹さんはこちらに歩いてきた。俺の隣にどっかりと座る。俺もつられて中途半端に入れた足の力を抜いて座り直した。
「雨宮達と一緒にいたんじゃないんですか？」
「んー？　いや、さすがにあの場にいるのがしんどくなってきてな。あんだけ仲良さそうにされると俺の入り込む余地がねえ」
確かに、あのキラキラした雰囲気には俺も入っていけなかった。その雰囲気を壊してはいけないような気がして、どうにも話しかけにくい。離れて見るには微笑ましい光景なのだが。
息吹さんは俺をじっと見つめている。
「何ですか？」
「話の前に、一つだけいいか？」
「はい」
「敬語は使わなくていいぞ」
「でも……」
「その代わりに俺もお前のことを愁ちゃんと呼ぶから」
「ちゃん付けはやめてくれ」
思わず素で反論してしまった。息吹さんはからかうように、にっと笑う。
「んーな冷たいこというなって愁ちゃん」
「愁ちゃんて言うな！」
いかん、まんまと乗せられている。落ち着け俺。
「どしたい愁ちゃん？」
「だから愁ちゃんて……ああもう！　話があるんじゃなかったのかよ？」
もういいや。何とでも呼べ。俺はもう吹っ切れた。
息吹さんの顔がいくぶん真剣になる。それでも、うっすらと笑みは浮かべていたが。
「そう怒るなよ。ちょっとふざけてみただけだって。まあ、察しがついてるだろうが、話ってのは二ヶ月前のあの夜の件だ。お前、あ

れから氷室と連絡ついてないだろ？」
「氷室、ってクレインのことだよな。ああ、その通りだよ」
「やっぱりか。でなきゃそんなに警戒しねえだろうしな」
「……まるで、もう警戒する必要ないみたいに聞こえるけど」
見た感じ、俺をどうこうって気はないように思える。
こちらに一瞬だけ鋭い視線を送ってよこし、息吹さんは一拍おいて言った。
「結論から言うと、俺はあの件から手を引いた」
「手を引いた？　どうして？」
「俺は便利屋をやってる。簡単に言や金取って人助けする仕事だ。ま、そうは言っても仕事は選ぶがな。あの夜、お前がいなくなった後、俺は氷室と少し話した。そしたらどうにも気になることができてな。念のために調べてみたら、依頼人が実在しねえときた。胡散臭いしムカついたから依頼、蹴ってやったよ」
語っている時の息吹さんの横顔は真剣そのものだった。多分、嘘は言っていない。とりあえず俺が息吹さんに狙われることはなくなったらしい。対策なんてものは全く考えていなかっただけに、それを知って安心した。
息吹さんは体を前に傾け、太ももに肘を置いて体重を支えていた。顔の前で拳を作り、もう一方の開いた手をその拳で軽く叩き、薄く笑う。
「はっ。まったくよ。俺を騙そうとはいい度胸してやがるぜ」
吐き出した声は、どこか面白がるような響きがあった。表情と声だけなら、嬉しそうと言ってもいいくらいだ。
ぞわり、と。
背筋に寒気が走った。視線を前方に戻しかけていた俺は不意に襲ってきた場違いな感覚に驚き、息吹さんの横顔に釘づけになった。心臓が締め付けられるような、そんな圧迫感。なんとなく居心地が悪く感じて、体が落ち着かなかった。
忘れかけていたのかもしれない。初めて会った時、この人から感

じた恐怖を。目の前の人物があまりにもあの時と違いすぎたから。意識して視線を息吹さんから剥がす。
「息吹さん、もしかしなくても怒ってる、よな」
「ああ、悪い。思い出したらちぃっとな」
俺の言葉で初めて自分の作った空気に気付いたらしい。謝罪と同時に圧迫感が消えた。息吹さんが本気で怒ったりしたら一体どんなことになるのだろうと想像しかけたが、精神衛生上よろしくなさそうなのでやめておいた。気持ちを落ち着けるために思い付いたことを訊いてみる。
「それ、依頼を途中放棄したってことだろ？　恨みを買ったりしないのか？」
「別にどってことねえさ。来たら来たで返り討ちにしてやるし。それより、行くとしたらお前の方だろ。事の顛末は話してねえから、お前が目的の物を持ってるってのは知らねえだろうが」
「けど、特に何もなかったんだよな」
息吹さんが話していないとすると、俺が預かってるアレに結びつく情報は全くと言っていいほど無いことになる。そして、二ヶ月以上が経ったにも関わらず何事もないってことは……。
「その依頼人、やっぱり諦めたってことか。それにしても、何でアレを欲しがってたんだろう」
「さあな。大事なもんだとしか聞かされてねえから何とも言えねえなぁ。つーか、ありゃ一体どういった代物なんだ？」
「クレ……氷室が言うには、あのメガネを使うと生物の気を直接見れるようになるらしい。俺も使ったことがあるから本当だと思う」
なんて言っても普通は信じないよな。頭大丈夫か、とか言われるのがオチだ。その場の雰囲気で正直に言ってしまったが、失敗だったかもしれない。
「なるほど。道理で報酬がバカ高いと思ったぜ。だが今さらそんな物に使い道なんか無いだろうに……」
……あれ、なんかすんなり受け入れられてる？

「息吹さん？　俺の言ったこと信じたのか？」
「あん？　何だ。冗談のつもりだったのか？」
「いや、そうじゃないけど……」
一笑に伏されるものだと思っていた俺は、予想外の反応にびっくりして言葉に詰まった。息吹さんは全く疑わないどころか納得さえしている。俺は口を半開きにして呆けてしまった。そんな俺を尻目に、息吹さんは後ろについた手を支えに天井を仰ぎ見た。
「いるんだよ。俺の知り合いにそういう常識外れのチカラを持ってる奴が。そんな訳だから、俺はお前の言ってることが嘘だとは思わねえ」
納得したか、とそのままの体勢で首だけ回して俺に聞いてくる息吹さん。この人も俺の常識から外れたところにいるよな、という考えが頭をよぎったが、瞬間移動とか記憶を読むとかに比べればまだ常識の範囲内だろうとも思ったので、黙って頷くにとどめた。もっとも、俺の中の常識なんてものは二月にあの男と出会った時点で崩れ去ってしまった訳だが。
「ああ、そうだ。すっかり忘れてた。ほい」
上着の胸ポケットから一枚の紙切れを取り出して俺に差し出す。切り取った手帳の一部らしいそれの中央には、十一桁の数字とその下にアルファベットの羅列が走り書きしてあった。
「俺のケータイの番号とアドレスな」
「はぁ」
そうだろうとは思ったが、何故このタイミングで？
「なんかあったら俺に連絡しな。仕事抜きで世話してやっから」
「考え過ぎじゃ……。現に今まで何もなかったんだから」
「報酬がバカ高いっつったろ？　そう簡単に諦めるとは思えねえんだ。念の為だよ念のため」
「そう簡単にって、そんなに高かったのか？　その報酬って」
少しだけ興味を覚えた。一体あの二つにどれほどの価値があるのか、ということに。息吹さんは頷いて、事も無げに言い放つ。

「百万だ」
「百！？」
予想を超える金額に愕然となる。あの二つが百万円。にわかには信じがたい話だ。およそ普通の高校生には縁遠い金額が出てくるとはな。そして息吹さんはその報酬を依頼ごと蹴っ飛ばしたという。
「後悔してないのか？」
依頼主が胡散臭くても、それに目を瞑りさえすれば報酬は受け取れただろうに。だが息吹さんはあっけらかんと答えた。
「後悔？　そりゃしたさ。十秒ほどな」
「十秒って。ずいぶん短いな」
「当ったり前だ。そんなもん十秒でいい。立ち止まってる時間が惜しいだろうが」
きっぱりと、さも当然というように言い切ってにやりと笑う。
「そんなもん、か」
よく笑う人だと思った。そして、俺はそれを素直にすごいと感じている。なぜなら、この人は心の底から笑っているから。自分の失敗を認めてなお、それに少しも囚われていないのだ。
それに比べて、俺はどうだ？
「後悔してんのか？」
「……何を」
脈絡のない、唐突な、それでいて的確な質問に、俺はかろうじて疑問詞を呟いた。
「氷室を置いて逃げたこと」
咄嗟に言葉が出ない。どうして分かったのだろう。俺が未だに後悔していることを。俺を見る息吹さんの目には、これといった感情は窺えない。気遣うのでも責めるのでもなく、ただ訊いただけとでも言うように。
俺の返答を待たずに、息吹さんは話し出した。
「別に責めちゃいねえよ。逃げることが悪いとは思わねえし、あの状況じゃしょうがねえ」

違う。
「むしろあの状況で向かってくる奴は馬鹿だろ」
違うんだ。
「俺が後悔してるのは、そういうことじゃないんだ」
「あ？」
予想が外れたからか、息吹さんは間の抜けた表情をしている。
「氷室が走れって言った時、俺は状況に呑まれてたんだと思う。俺は自分がどうしたいのか、なんて考えもしなかった。仕方ないんだ、何も出来やしないんだからって自分に言い訳して、楽な方を選んだ。でも……」
知らず、体に力が入り、手に持った紙コップを握り潰していた。
そう、俺が悔やんでいるのは氷室を置いて逃げたことだけじゃない。もちろんそれもあるが、自分を取り巻く状況、それに流されて思考を放棄したことをひどく後悔しているのだ。他人には、状況に流されて出した答えなんて間違いだとか言っておいて、そういう自分が出来てないじゃないか。そう思った。
でも、後悔してるだけじゃ意味がない。大事なのは、これからどうするかだ。立ち止まってる時間が惜しい。確かにそうだよな。
そろそろ、歩き出そう。
「俺はもう逃げない。逃げたくない」
たとえそれが愚かだと言われても。
「だって俺は、もう自分の気持ちを誤魔化したくないから」
俺は息吹さんの目を見て、はっきりと決意を伝える。と同時に、これは俺自身への戒めの言葉でもある。
息吹さんはさっきの俺と同じように、口を半開きにして呆けていたが、徐々に口の端が上がっていき、面白いと嬉しいが半分ずつといった笑みになった。それから無言で俺の背中をばしんと叩いて椅子から立ち上がり、何で叩かれたのか理解できていない俺を置いて売り場へと戻っていく。その途中に振り返って言うには。
「自分の力だけで頑張るのもそりゃ大事なことだ。けどな、困った

時は意地張らずに人に頼れよ。俺で良かったらいくらでも相談に乗ってやる」

にっと笑うさまは、えらく頼もしく見えた。

サイカイ：4

息吹さんと再会してから数日は、何事もない日々が続いた。しかし、その平穏を破り、俺はとある事件に巻き込まれることになる。

事の発端は信護のこの言葉だった。

「なあ、花見しねえ？」

学校帰りに、俺を含むいつもの三人で立ち寄ったハンバーガーショップの一席。それぞれが頼んだ品を食べながらの、他愛ない雑談中にぽんと出た一つの提案だ。

「花見？」

俺は口の中に残っていたハンバーガーを飲み込み、正面にいる信護に問い返す。信護はソファ型の席に深く腰掛け、ポテトを片手に言った。

「だってよ、せぇっかくこんだけ咲き誇ってんだし、それ見ながらワイワイやったら絶対に楽しいだろ？」

ポテトを持っていない方の手で窓の外を指差す信護。俺はそれに従って窓の外に視線を移す。まばらな人通りの舗道には都市計画の一環か、満開の桜が植えてあった。春独特の温かい日差しに照らされ、明るい雰囲気を醸し出している。まさに今が見ごろと言えるだろう。

「そらまあ、そうだろうな」

俺は視線を正面に戻し、信護の言に同意した。次いで、信護の隣の席で同じように桜を見ていた速人が言う。

「ワイワイやったらって、この三人で？」

勿体つけるようにしばらくポテトを咀嚼し、ごくりと嚥下してさらにコーラを飲み干した信護は、にっと自信に満ちた笑みを浮かべて制服のポケットから携帯電話を取り出した。

「そこは俺の出番だ。すぐに十人ほど集めてやるよ」

そう言って、友人に連絡を取り始めた。

信護自身はどこかしらの部活に所属している訳ではない。しかし、運動神経は学年でトップクラスなので助っ人を頼まれることが少なくないのだ。そのため、元々の交友関係の広さに加えて運動部系の知り合いがとても多い。

人数集めは信護に任せて良さそうなので、俺は食事を再開することにした。

とはいってもそれもすぐに食べ終わり、手持ち無沙汰になってしまう。速人も食い終わったようなので、信護が電話している間に日時と場所を決めてしまうことにした。

今日は木曜日。桜の咲き具合からしてなるべく早い方がいいだろう。

「日付は、今週の日曜はどうだ？」

「いいんじゃない？　時間は一時くらいがいいと思うよ」

「そうだな。この時期は……どこも混んでるだろうな。この辺にいい場所ってあったか？」

腕を組み、椅子に浅く座って速人に意見を求める。アゴに片手を添えて何事か思案していた速人は、なにやら迷っている様子だ。電話中の信護もどうしたんだとばかりに俺を見る。

「ねえ、ひとついい場所を知ってるんだけど」

心の中で算段を付けたらしい速人の口調は、それでもどことなく歯切れが悪かった。表情からしてそれはおそらく、不安や懸念といったものが原因だと思える。はっきりと感じたわけではないけれど、どこか感情を隠し切れていない印象を受けた。

「いい場所？」

「うん。確認を取ってからじゃないと断言できないけど、たぶん大丈夫。確認が取れたら後で連絡するから」

「そうか」

「で、どう？　人数は集まったの？　信護」

俺が返事をするや否や、いつも通りの態度に戻った速人はちょうど電話を掛け終ったらしい信護に尋ねる。

またタイミングを逃してしまった、と思った。どうしたと訊こうとしても、速人にはするりとかわされてしまう。あまり突っ込んでほしくないところなのかもしれない。そこを下手に突いて嫌な気分にはさせるのは、と思うと改めて訊くことは躊躇われた。仕方なく言葉を飲み込む代わりに、俺は心の中でため息をつく。

一方、問われた信護は携帯電話をポケットにしまい、ふっと格好をつけて笑った直後、テーブルの空いたスペースに突っ伏した。

「誰も電話に出ねえの。なんで？」

気の抜けた声には先ほどまでの自信は欠片も感じられなかった。避けられたのだと思って落ち込んでいるのだろう。つくづく信護は自分の気持ちに正直だ。その様子を見ていたら、自然と出てきた苦笑とともに、沈みかけた気分が消えていった。

「チクショウ。一人も出ねぇなんてあんまりだ……」

声の主は未だにテーブルに突っ伏していじけている。なかなかダメージが大きいようだ。

そんな萎れた友人を勇気付けるためにも、さっきの問いに答えてやろうか。

「当たり前だろ。まだ五時にもなってないんだぞ？　まともな運動部なら練習してる時間だよ。電話に出れなくて当然だ」

テーブルに『の』の字を書き始めていた信護の手が止まる。顔を上げて背もたれにすとんと背中を戻した信護は、拍子抜けしたように呟いた。

「あぁ、そっか。そりゃそうだ」

「ちょっと考えれば分かると思うけどねぇ」

隣で頬杖をついて落ち込む様子を見ていた速人は、今頃気づいたのとでも言いたげな顔をして言った。それに対してバツが悪いのか照れ隠しなのか、むっとした表情で反論する信護。

「いいだろ別に。あれだ。思い立ったら記事にしろって言葉があるだろ。行動力は大事なんだよ」

「君は新聞記者にでもなるつもり？　それを言うなら、思い立った

が吉日でしょ」
「そうそれ。あと、もしなるとしたら俺は新聞記者よりカメラマンのがいいな」
「君に理性的な文章は書けそうにないもんね。それより、だんだん話がずれていってるよ？」
「あれ、そういや何の話してたんだっけ？」
「もう忘れてるし」
速人は呆れるというよりむしろ諦めの境地に入った。だんだんと目が据わってきて、まるで不思議な生き物でも見るかのような視線を信護に送っている。
俺の方はさっきの信護の発言から、この場にいない比較的親しい友人のことを考えていた。
あいつは文化部の所属だし、もしかしたら連絡がつくかも知れないな。さっそく携帯電話を取り出して目的の人物に電話を掛ける。コール音三回目で相手は呼び出しに応じた。
「杉村か。どうした。何か用事か？」
「ああ七海、今度の日曜は空いてるか？　良かったら一緒に花見をしようかと思ってるんだけど」
「花見か……。そうだな。そろそろ桜を撮りたいと思っていたところだ。ちょうど予定も空いている。場所と時間は？」
「時間は午後一時、場所はまた後で連絡する。食い物とか飲み物はたぶん持ち寄りになると思うから、なんか用意しといてくれ」
「分かった」
「ん。じゃあな」
七海とは高校に入ってからの付き合いだ。入学当初、同じクラスだった俺と七海は席が近いこともあってなんとなく馬が合い、以降ちょくちょく一緒に行動するようになった。もちろん信護と速人の二人も七海のことは見知っている。
写真部と新聞部を掛け持ちしていてなかなか忙しいらしく、いつも行動をともにするという訳にはいかないが、こういうイベントの

際には七海が呼ばれることも多かった。
　文化部といえば、今年からの知り合いである雨宮と桐嶋は、七海とは面識がないんだよな。人数は大勢の方が楽しいだろうと思い、とりあえず誘ってみることにする。桐嶋は面子が面子だけに来ない可能性が大きいので、まずは雨宮に電話を掛けてみた。
「はいもしもし。どうしたの、杉村君？」
「雨宮、今週の日曜日って何か予定入ってるか？」
　部活中なのか、電話越しにかすかに人の話し声が聞こえてくる。
「ううん。何も入ってないよ」
「そうか。今皆で花見に行こうかって話が出てな。良かったら雨宮もどうだ？」
「へえ、面白そう。じゃあ私も……え、何？」
「なんだ。どうした？」
　どうやら電話中に誰かが話しかけてきたらしく、途切れ途切れに雨宮の声が聞こえるだけになった。しばらくして。
「あのね、朱音ちゃんも行くって言ってるんだけど、いいかな？」
「桐嶋が？　ああ大丈夫だ。むしろ人数は多い方がいいだろうし」
「そっか。それで……」
　ぶつりと音がしてそれっきり、何故か雨宮の声が聞こえなくなる。どうしたのだろうと携帯電話を顔から剥がし、しばらく液晶画面を眺めていると、雨宮からのメールが届いた。今は無理だからまた後で連絡するといった内容が絵文字付きで書かれている。先生に見つかりそうになったとか、たぶんそんな理由だろう。
　とりあえず三人は確保した。後は信護に任せればいいだろう。そう思って携帯電話をズボンのポケットに戻し、二人に成果を報告する。
「三人確保しといたぞ。七海と雨宮と桐嶋」
「おおう、でかしたシュウ！　七海と桐嶋はどうでもいいけどな」
　報告と同時、もはや当初の目的を忘れて雑談に入っていた信護が、神速で俺の手を握ってきた。

うわぁ。瞳がキラキラと輝いていらっしゃる。
「お前な、さっきの言葉を七海と桐嶋に伝えてやろうか？」
「はっはー！　やぁだなぁ、冗談だよ。なあ速人？」
俺の手を握ったまま上機嫌で同意を促す信護の顔先に、速人は無言で自身の携帯電話を近づける。そして親指で軽くボタンを押した。
『七海と桐嶋はどうでもいいけどな』
携帯電話から流れた音声は間違いなく信護の声だ。硬直した信護に満面の笑みを浮かべ、速人は言う。
「便利だよね。ケータイの録音機能」
このあと、二人の間に携帯電話の壮絶な奪い合いが展開されたことは言うまでもない。

近づくことを恐れているのは、果たしてどちらなのだろう？
俺か、それともあいつか。
あの時言えなかった言葉が、今もこの胸の中で訴え続ける。
俺をここから出せと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2994e/

それを望むなら

2010年10月18日23時51分発行